

川柳塔

創刊大正十三年 通卷九六一号



日川協加盟

No. 961

六月号

予告

第十三回 川柳塔まつり

とき 十月八日(月)
ところ アウィーナ大阪

◎ 詳細は後日お知らせいたします。恒例によって同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親会を開催します。同人総会以外はどなたでも参加できますので、ふるってご参加ください。

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。よろしくお願ひ申し上げます。

★個人 一口 二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六〇〇〇円 ③ 2/3頁 一二〇〇〇円

② 半頁 九〇〇〇円 ④ 一頁 一二〇〇〇円

▼原稿締切 六月二十三日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第二ビル二〇二号室

「19年度の主な催しもの予定」

●第22回詩歌文学館賞贈賞式 19年5月26日(土)

受賞者 (詩) 池井 昌樹・童 子(思 潮 社)

(短歌) 岡野 弘彦『バクタッド燃ゆ』(砂子屋書房)

(俳句) 小原 啄葉『平 心』(角川書店)

記念講演 粕谷 栄市

「詩を書く人間」

●二〇〇七年度常設展

「温泉と詩歌 東北地方篇」

19年3月13日(火)～20年3月9日(日)

●第4回現代歌人の集い

19年11月10日(土)

●俳句指導講座

19年8月2日(木)・3日(金)

●短歌実作講座

講師・館長 篠 弘

●俳句入門講座

●短歌入門講座 ●詩の講座

「詩歌資料ご寄贈のお願い」

当館は日本の明治以降の詩歌資料を、作者の有名なグループの規模の大小を一切問わずに収集保存し、展示や閲覧、研究に役立てています。皆様のいっそうのご協力をお願いいたします。大量の資料のご寄贈に関しては、事務局までお問い合わせください。当館の所蔵資料は、特別資料を除きホームページで検索できます。

【対象資料】

●詩集・歌集・句集・柳集、評論、研究、随筆、評伝などの詩歌関連図書全般

●同人誌・結社誌、グループ誌などの詩歌雑誌 ●その他

●「収蔵資料」(平成19年2月末現在)

●図書・雑誌：約97万点

●特別資料(原稿・直筆資料・写真・遺愛品)等：約6万7千点

【休館日】

●毎週月曜日及び年末年始(12月28日～1月4日)

※山口青柳宅(雑草園)・展示室・井上靖記念室は、4月1日～11月30日までの毎週月曜日は公開しています。

日本現代詩歌文学館

〒024-8503 岩手県北上市本石町2-5-60 TEL 0197-65-1728 FAX 0197-64-3621
URL <http://www.shiikabun.jp> E-mail shiika@shiikabun.jp

やれば出来る

河内 天笑

元川柳塔社の重鎮(傲)西田柳宏子さんは毎月十八回も各地の句会に出られた事で有名だ。また(傲)黒川紫香さんの後任として本社句会の司会を長らく務められ見事な進行ぶりで句会をリードされた。後に私がその役を引き継ぐに当たり柳宏子さんからは「手際の良さ」を、紫香さんからは「司会者は目立ったらあきまへんで。」と手短かに司会の真髄を教わった。

実際大きな会になればなる程「手際の良さ」が要求される。旨く進行出来て当り前で少しでも「手落ちや手違い」が発生すれば落胆と失笑を買う。約十五年間柳宏子さんの後釜として句会部と司会進行を務めさせて頂いたおかげで、他柳社の大会や塔の地方大会に寄せて頂く折、その会の進行具合や協取のリズムなどにとっても関心があり、特にいい呼名の多い会には思わず拍手を送りたく思う事もまれにある。

司会者が手際よく、選者の披露が粒揃いで、その上間髪を容れぬいい呼名が聞かれ、これを協取がリズムよく返す。こんな天下一品の句会をいつも夢見ている。が、あくまでも夢で現実には程遠い。然しながら全てが駄目と

いうのではなく、どこも努力しているのでそこそこは満足しなければならぬが、一つの大会では一時的にはあるがとても上等の披露をされ、それにつられて呼名も間がよく「夢のような時間」を経験させてくれる事もある。披露、呼名、協取の腕、これらが一体となってシンフォニックジャズに聴き入る様な幸せな気分に来るだけ多く出会いたい。

一つの目的に向かって皆の心が一つになれば「夢のような句会」は可能な筈だ。現に一時的にでも「夢の時間」をちよいちよい経験している私にとつて「やれば出来る」と叫びたい。披露台に立てば誇りを持つて堂々と発表し、自分の作品が読まれたらタイミングよく協取に届く声で呼名。そして協取はにこやかにしかもはつきりと呼名を返す。たつたこれだけの事が全う出来ていないのが現実だ。ひとり川柳塔のみならず、川柳のレベルアップは先ずこの辺から考えなければならない。

自選句

どたん場でジョークを一つ思いつき

天笑

仲間ではないなと思う怖い声

〃

大人しい顔をしている反逆者

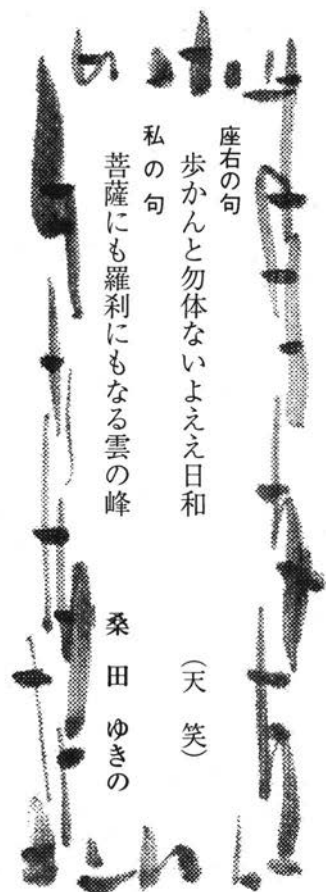
〃

友達が死に友達の家覚え

〃

伐られたら困ると柚子が実り出し

〃



座右の句

歩かんと勿体ないよええ日和

私の句

菩薩にも羅刹にもなる雲の峰

(天笑)

桑田 ゆきの

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「在原の里」

■巻頭言 やれば出来る

河内 天笑 …… (1)

清水白柳先生

小島 蘭 幸 …… (2)

川柳塔 (同人吟)

河内 天笑 選 …… (4)

川柳塔の川柳讃歌 (30)

木津川 計 …… (51)

自選集

奥田みつ子選 …… (52)

水煙抄

奥田みつ子選 …… (56)

温故知新

新家完司選 …… (78)

愛染帖

新家完司選 …… (80)

誹風柳多留——篇研究 22

川上大輪・松本文子共選 …… (84)

檸檬抄「デザイン」

川上大輪・松本文子共選 …… (86)

清水白柳先生

小島 蘭 幸

菊活けてひととき欲を忘れたり 白柳

昭和57年9月26日、阿部野神社境内で故清水白柳先生の句碑除幕式が挙行されました。私は山内静水竹原川柳会会長と、当時3歳だった長女史子と一緒に出席しました。午後1時から北島殿で記念句会が開催され、選者は席題「欲」岩本雀踊子、「財布」橘高薫風、兼題「菊」八木千代、「職人」定金冬二、「雑草」山内静水、「先祖」森中恵美子、「板」中尾漢介、「仁王」西尾葉の8名でした。記念句会作品集には佳句が綺羅、星の如く輝いています。その中のいくつかを紹介いたします。

白菊も老いては髪を乱しがち 薫風

白菊を百本買うてこころの忌 冬二

平家部落に生れし男無口なり 豊次

父と子に先祖からあるざくろの木 無成

まな板を男は大切に思う 恵美子

悟りきれずに金剛力士月に立つ 水客

句碑は清水白柳先生の十三回忌に建立されました。

父の忌よ菊一輪にある情け

健司

一路集	「午 後」	前たもつ選	……	(88)
	「遺伝子」	中村金祥選	……	(88)
	「コンビニ」	岩崎公誠選	……	(89)
初歩教室	「傘」	三宅保州	……	(90)
秀句鑑賞	同人吟	遠山可住	……	(92)
	水煙抄	中井ゆき	……	(94)
■各地句会だより	すみよし川柳会	岩崎公誠	……	(95)
■句集鑑賞	西出楓楽著『天秤座』	仁部四郎	……	(96)
■句集紹介	『天秤座』西出楓楽著	木本朱夏	……	(97)
閑人閑話	大塚国際美術館	(故)田中正坊	……	(99)
五月本社句会	……	……	……	(100)
各地柳壇(佳句地十選/伊勢田 毅)	……	……	……	(104)
柳界展望	……	……	……	(119)
六月各地句会案内	……	……	……	(120)
■編集後記(ひとこと/小林妻子)	……	希久子・尚士	……	(122)

座右の句

天と地のはざまにふわり生かされて

(緑之助)

私の句

鉛筆が小さくなって曲り出す

多久和 敬子

清水白柳遺句抄

清水白柳先生は、川柳塔創刊に尽力をされ、昭和40年10月創刊号から大萬川柳の選と作句教室を担当されています。それに川柳塔の広報活動として各地の大会、句会への参加、教室、講座も数多く指導されてきました。その超多忙の中、地方の小さな柳社竹原川柳会の作句教室も担当しておられたのです。当時の竹原川柳会は会員が十人にも満たない一番苦しい時期でした。白柳先生の速達、電報による選句、選評に支えられ、その川柳に対する情熱によって今の竹原川柳会があるのだと私はいつも思っています。川柳塔編集長として活躍されていた昭和45年11月12日に急逝されました。先日、大阪でみつ子、たもつ氏、楓楽理事長とお話する機会があり、白柳先生のごことが話題になりました。私には今でも25年前の阿部野神社の風景が、鮮やかに浮かんで来ます。最後に白柳先生作品介绍させていただきます。

ふるさとを語る大工は腰を据え

一寸した血はなめて置く大工の手

夢をふくらませて動物園で寝た児

酔眼もうろう大切なものまたぐ也

長生きが母系に多い祝膳

海老の眼に今宵かがやくものばかり

春日遅々として仁王さんねむくなり



河内天笑選

鳥取市 岸 本章

手抜きした付けが忘れたところに来る
自分への嘘が一番許せない

自信ないときはにつこり引き下がる
身についた札儀作法がさりげない
入れ知恵がすんなり胸に収まらぬ
風邪が出すイエローカード侮れず

藤井寺市 太田 扶美代

辛い大根嘘をついている

花談義土の匂いのする人と

豊かさの中でしたたかに孤独

散りつくすまでに一度は会うつもり

ボケツトのない服なんてつまらない

ぜいたくに少うし飽きただんご汁

シドニー 坂上 のり子

言い逃ればかり晒している議会

ペコちゃんの瞳信じていいかしら

気を抜くと原発チエルノブイリになる

持つて悩み持てぬも悩み人の性

消し忘れたパソコンだけが動く闇

雑草がへへへと同じとこへ出る

堺市 加島 由一

村中が棧橋に出る島の嫁

ふと不安跡を継ぐ子の迷い箸

単身赴任ところどころに地雷あり

純情な恋で漫画になりやすい

ジャニーズ系知事が出るのを待っている

米びつの底が見えたも死語となる

米子市 政岡 日枝子

花道をおりと寒い風がくる

順番が来なくて光れない私

満足の日々を知らせる寺参り

新入りは笑顔の武器をもっている

新入生少し笑顔が出る五月

ロマンはいつも少し危ない風を呼ぶ

吹田市 山 本 希久子

シンプルに生きる一直線の滝
同じ星眺めて隣国は遠い

ささやかな祝賀やさしさ持ち寄って

七十路の海で抜き手をきっている

琥珀色愛し現実から逃避

検査数値と一喜一憂して生きる

唐津市 市 丸 晴 翠

美しい国に容赦のない地震

慣らされて婦唱夫随の八十路坂

置き場所を変えては揉める共白髪

猫も欲し赤ちゃんポスト春の風

時間差の返事のどかに老いは昏れ

山の樹は海の命も育て上げ

東大阪市 谷 口 義

主婦業は全日制になっている

全般にわたり母方の血が濃い

完全犯罪狙う目ぐすり注しながら

お変わりもなく待合せには遅れ

家計簿はつけず通信簿をつける

ゴトゴトと鈍行で来る運だった

兵庫県 大 谷 幸次郎

友招くつもりの掃除念が入る

茜雲やれば出来るとふと思う

保険屋の若しもの時はに嵌められる

ガラス窓姿見にして街を行く
嬰兒の笑顔マナーの芽生えかも
硝子窓拭けば黄砂がふと匂う

竹原市 時 広 一 路

天を突く元気が詰まる竹の節

有難う今日も言えたぞ有難い

よく来たね今年も庭にジョウビタキ

指五本ちゃんとあるのに字は不得手

肩の凝り知らぬ傘寿に痛む膝

スーパールの飾り万国旗が似合う

高知市 小 川 てるみ

美しい地球を壊す温暖化

温暖化カラスがうれしそうに鳴く

好きなようにしろと愛想尽かされる

花吹雪あの世この世を往き来する

ボンバルの事故後不安の離着陸

夜間飛行ビーズのような灯が点る

岸和田市 森 元 ふみよ

古日記賢い事が書いてある

披露宴招待状を独り居に

忌憚ない意見述べたら呆れられ

少子化で五月人形欠伸出る

檻樓々々のジーンズ捨てて怒り買う

戦中派お呼びがなくて喜寿となり

尼崎市 軸丸勝巳

ひらひらを集めて下る花筏
枯れるまで咲く定年のない桜
一瞬の地震老後の夢奪う
避難所の余震あの日を思い出し
相撲道揺れる国技の国際化
軽い脳叩く度忘れ勘違い

橿原市 居谷真理子

一村の品位を守る大樺
一万歩歩けば考えも変わる
カラッポを守る律儀に鍵かけて
不眠症今朝も確かに影はある
雪しんしん情に殉ずるほかはなし
時折は話題となつてやがて消え

横浜市 菊地政勝

年金のくせにもたげる虚栄心
倅せを受ける両手はすぐ出せる
胸襟を開かせに呼ぶ酒の宴
百葉の長に足元掬われる
酒呑んで無策の政治斬りまくる
毒だとは思っていない酒煙草

鳥取県 山下節子

意に添わぬ人悪党に見え出した
子守歌聞かせ育てた児は素直
天空を一人占めして露天風呂

苛めあい心の乾く音がする
団塊の築いた平和崩すまい
平等に育てた子にも個性出る

鳥取市 夏目一粋

感情がなければよいと思う日々
孫おもう孫のおもいは薄けれど
にんげんを分析しては句にしている
握りかえされてヘンな気持ちになる
猫ばばが一瞬よぎりはつとする
鬱の字を見るときもやもやしてしまふ

米子市 中井ゆき

黄砂来る風の匂いがなくなった
満足な眉かきあげて春の街
花達に背中おされて生きのびる
犬猫も人に飼われてやさしい目
満ち足りて青空に浮く雲になる
その昔ロマンスグレーに恋をした

黒石市 相馬一花

天国が混んで地獄に回される
筋トレが好きで段差に挑戦す
当確の報に群がる浮動票
ダイエットしてもくびれに見放され
金貸しを悪役にするサスペンス
只酒にいつも足元掬われる

半壊の軒に燕の里帰り

河内長野市 坂上淳司

耐震の工事見積り見て震え

現実は一歩進んで二歩さがる
大鵬も巨人も消えて玉子焼き
今もって納得いかぬ地動説

別室に隔離されてもまだ喫むか

大阪府 池上清治

煙草税払うているのに目の敵

肺癌で逝った写真の前で喫み

アメリカの一国主義が掘る墓穴

和歌山市 堀畑靖子

バカを言いあつて淋しさを埋める

もう寝ようアシタは内視鏡検査

負け犬になったおかげで出来た友

チャレンジの春だが昼寝かせない

秘仏見るはずが食い氣に変わる旅

目の奥のはるかな場所にゐるあなた

鳥取市 春木圭一郎

してもらうよりも自分で出来る事

いい出会い隠れた長所引き出され

会うのなら言葉を交わし笑いたい

本当の出会い影響与え合う

見返りを求めぬ情に支えられ

きびしさと優しさ絆から学ぶ

大阪市 井丸昌紀

友がみな偉く見えても僕は僕

点滴で生き長らえる哀れ友

灰汁のない人ばかりで出る欠伸

深夜バス格安ながら命がけ
捏造が学者にまでも流行りだし
聞き飽いた再発防止する誓い
お悔みをすらすら書いて式に出ず
男でも料理上手で暮したい
有難い物の一つに無料バス

三田市 北野哲男

最初はグー赤ちゃんの手もその通り

目で釘を差して夫を送り出す

作業服リボンをつけてハレの服

噛みしめて来た奥歯さえゆるみかけ

ハイチーズピントは甘い方がよい

礼服の時だけ出会うのも絆

富田林市 藤田泰子

これからは鈍感力を売りものに

童心に還りたい日の動物園

お二階へメールを送る何食べる

孫達へもつたいないを教える

どなたかに破って欲しい殻である

泣いてても笑っていても桜散る

さいたま市 星 野 育 子

記念樹の咲いた桜に友の顔
童謡の四季が美しい日本
豊かさの陰でなくした道徳心
食べ物の話になれば二時間も
人生はまさかがあつて面白い

さいたま市 八 田 敏

温暖化季節の順が逆になり
花植える季節に忘れられぬよう
農村と都会を区切り団地住む
団塊に老人会が揺れ始め
遺産分けするほど財なく子も独り

佐倉市 岡 井 やすお

オリンピック都民は待つていらしい
協約は破られるためにあるらしい
野球には盗塁という技がある
月七百日で楽しむ宝くじ
働きもののお日さま帰りがらぬ夏至

日高市 根 岸 方 子

SLが桜吹雪をかき分ける
日に三度野球やキユウの人もいる
テレビから六甲おろし春になる
いつからかルーベを供に旅支度
休耕地帰化植物が大手振る

柏 市 河 野 桃 葉

美しく枯れる背筋をピンと張り
気骨ある母のよわいを遙か生き
団塊の翼は趣味に拉致される
離婚して輝く瞳持ち帰る
領いた途端共犯者にされる

柏 市 永 峰 宣 子

懐かしい店で求める桜餅
暖冬の桜満開見る弥生
高額に殺意がチラリ保険金
人生の華であつたか子育て期
赤ちゃんが大きな口で待つ西瓜

東京都 岸 野 あやめ

霞草一度は主役勤めたい
嘘泣きを笑つて見てるお祖母ちゃん
介護する方も汗疹が癒らない
あの世まで持つては行けぬ恋と金
整形の跡が見えない超セレブ

東京都 長谷川 康 子

開幕戦勝利の美酒に酔う投手
初出場同士で競う優勝旗
遠来の客にこちらがねぎらわれ
ウグイスも帰る頃にはうまく啼き
週一度人を招ぶ気の掃除する

東京都 清原悦子

本降りの雨紫陽花が生き生きと
単線の先で待つてる母の笑み
宇宙から夢の欠片がこぼれ落ち
一言の重みじわ効いてくる
もともとは汚染をされてない地球

東京都 小川賀世子

満開の刹那を追った三日間
花びらのシャワーに心までピンク
桜散り家事のあれこれ思い出す
悔し涙孫は大きくなるだろう
大阪弁先生にすぐ覚えられ

国分寺市 野崎勝

年金の暮らして肩凝りも知らず
華やかに散り葉桜に衣替え
禁煙をしたから肥えた訳じゃない
高ぶれば思わず訛り迸しる
新酒です試飲が過ぎて二日酔い

八王子市 播本充子

桜咲く少しおかしい人ばかり
母と観た桜はもつとさくら色
くわえタバコの性別が判らない
ただいまもいただきます言う独り
少々なことではメゲぬ旗を振る

武蔵野市 亀井円女

右脳に左脳見事に萎えたお仕舞か
ニコラデのギターに酔うた雨の夜
おいメシフロと一度は言うて見たかった
嫁と娘の仲が良すぎてちと妬ける
陽も知らぬ陰に咲く花いとしゅうて

横浜市 小野句多留

運転もゴルフも止めて視野細る
不揃いのサクラを嘲る温暖化
腕組んであんな人畜無害だと
バスのゴミ面倒みてるパーキング
また名所六本木には行かなくちゃ

静岡県 蘭田獏脊

寺参り遊び半分腰を上げ
春の風工事現場の手旗振り
美しい日本生きるに苦勞する
保母さんがうまく引き出す子の喋り
減反の田に花咲かせ米を買う

可児市 板山まみ子

平和な世ずっと夢なのかもしれぬ
災害と背中あわせに生きる日々
捜しもの見つからぬまま行く季節
ほどほどに弱音も吐ける友がいて
ハブニングあればなお良し旅の空

可児市 鶴留百合

陽光へ野点席へと足が向き

出稼ぎへ社内食堂メニュー増え

羽があるのか我が家まで黄砂飛び

孫と風呂まだまだ歌は続いてる

退院の理由は犬と居たいから

犬山市 吉田幸子

時々のお灸アチチとはね返す

イメージを変えないでねとにくい人

好き好きと寄り添う風へかすみ草

生きがいのひとつペットと過ごした日

決断を知るゴミ箱の広い口

犬山市 関本かつ子

散歩して咲いた散つたと余所の庭

平のまだんだん窓による机

仕切り屋が必ず一人趣味の会

待たせたね二泊の旅を鉢に詫び

カタクリの花にひれ伏すカメラアイ

犬山市 金子美千代

ちよつとだけ贅沢をするいい知らせ

言い出せず払い続けている会費

宝くじ当たるサイフを売る神社

ケイタイを離せぬ指の依存症

頑張った母を称えてする介護

愛知県 早川盛夫

不味いもの確り食べて元気です

これだけはどうか仕様もない好き嫌い

薬よりよく効く一杯のビール

少しなら吞めると底が知れぬなり

無人駅だから善意が溢れてる

京都市 高島啓子

毎日を急場凌ぎでやりすごす

枷は皆はずそう時計ネックレス

表裏見せてサバサバ生きている

酒さなり愚痴を言わないのが大人

印を結んで風の吹くのを待っている

京都市 三宅満子

老木に元気をもらう花めぐり

花浄土にいてもやっぱり腹が減る

一年分感動したな花の下

団塊にも浮いた話が芽吹く春

花粉症の犬に家計を狂わされ

京都市 榎本宏子

めし茶碗食の進みを気にしてる

始発駅に過去を預けたひとり旅

駅員に女性の増えた民営化

公園で紺のスーツが座り込む

迷わずに進路を決めた子にエール

亀岡市 井上 森生

豊太閤花見行列今もなお（醍醐寺）

寛いで気ままに吐ける友になる

大戦下かくも尊き男たち（映画 硫黄島から）

古稀嬉し生きた証に富士登山

やるからは納得のいくマニフェスト

長岡京市 山田 葉子

作られた画像が一人歩きする

メンバーも同じところに刀疵

メンバーがふと覗かせる違う顔

女の意地ここから先は譲れない

ときめきを隠せずにいるかすみ草

大阪市 前 ともつ

初孫にサクラがサイタ通り抜け

松坂の初勝利聞く通り抜け

短冊のたもつも入れて写真とる

ライトアップかおりに酔うて通り抜け

通り抜け仲よい夫婦見てもらう

大阪市 鶴田 遠野

夜校は人目気になる女と行き

貧相な僕を頼っている妻子

悪友の妻につんけんされている

くたびれた恋人と行くフルムーン

無礼講なのに冗談しかられる

大阪市 岩崎 公誠

CMを派手派手に塗り赤字パス

嘘だらけ自分の嘘に溺れ落ち

甘言を防ぐ耳栓持ち歩く

ミス防ぐマニユアル持つてミスばかり

この先は防ぐ手のない老いの坂

大阪市 升成 好

光年の億に現実感がない

生きる知恵竹のしなりに教えられ

忠犬は撫でられ方も心得る

老梅は散つて新芽に場所を空け

何だつて肚をくくれば頑張れる

大阪市 川端 一步

筆さきを八分で止めて書く手紙

絶食に生命力か食べる夢

生命保険小さくしてから癌告知

腹切つてさて歌えるか江差節

入院に史好の句集辞書一つ

大阪市 板東 倫子

贅沢の極み誇示する六本木

破廉恥をとらえて見れば知識人

両親が医者でも心病む息子

大国を金正日がふりまわす

どの家も憂さ二つ三つ抱えてる

大阪市 川久保 睦子

ありがとう今日も夕日が美しい
鏡よかがみ若さばかりをたのんでる
竹割った気性で女損をする
喋ったらこわれてしまいそうな夢
ショーウインドウ溜息の数ゼロの数

大阪市 清水 絹子

雨上がり虹立つ朝のいい予感
立ち止る時も傲った盲導犬
右往左往老いも若さも二十四時
新大阪着けば足早荷も軽い
ひと言の情けに浸る日暮時

大阪市 渡部 さと美

来た孫にくせ真似られてこそばゆい
罪なこと赤ちゃんポスト子捨て箱
ときめかぬ心斎橋のけばけし
夫喜寿ここから現状維持管理
怒らない夫になって家静か

大阪市 小泉 ひさ乃

桜さくら一途に咲いて潔い
豊かさに惚けていたら消えた虹
昨日まで出来てた事が今日できぬ
小魚も小松菜も食べ骨粗症
つぎつぎと馴染みが消えて春の冷え

大阪市 小谷 集一

骨董品扱いされる知恵袋
セールまで待つてうちに売り切れる
白旗をすぐ上げる癖治らない
ド演歌でないと歌った気がしない
花言葉花の知らない奇麗ごと

大阪市 西川 更紗

恋の絵馬神も微笑む梅日和
快活な友には運もついて来る
煙突が消えて昔がみんな消え
やとと春煙たい上司左遷され
お出かけに合せるように姑が来る

大阪市 星野 きらり

体力も萎えて男手欲しくなり
悩み事発想変えて今日生きる
ウオーキング朝の公園花ざかり
八十路坂余命繁多にござります
身の程という物差しをつい忘れ

大阪市 伊藤 博仁

眼帯をはずした先に女医の顔
お茶受けに組み込まれてる仏菓子
通夜帰り玄関で塩脱いで酒
泣き言はいわぬときめた痩せ蛙
解凍で起きるたたきに寝付くねぎ

大阪市 榎本舞夢

門柱が家の格式示してる
父さんが動き始めた定年後
好きですと言われ浮き浮きしています
浮いた世辞まともに受けて馬鹿を見る
バラ一ぱい恋人といえる甘い部屋

大阪市 中村れんげ

お詫び欄多く新聞気が重い
常識の線でもめてる世代の差
床の間に上がる花より野辺の花
罪と罰両手に重いへんろ笠
ありつたけの薬を入れた旅かばん

大阪市 熊代菜月

雑草は寒さに負けず花咲かす
ほろ酔いの父がそろそろ佐渡おけさ
雑談が弾み本音を言い出せず
煩惱がまだ燃え尽きてない傘寿
言いなりと見せて夫を手の内に

大阪市 榎本日の出

喜んで年取るようにしています
極楽と風呂につかって言える年
人間の弱味引出す占師
頑固さが消えてきました歳かしら
神様へ煩惱少しずつ返す

大阪市 奥村五月

左遷した友のボトルで泣き上戸
ジージャンの破れ気にせぬ几帳面
四コマの漫画に学ぶ生きる道
ハイチーズ監視カメラに媚を売る
丸投げで妻に託した定年後

大阪市 中村叡子

松坂が日本男子の意気揚げ
傲慢な人だが殻を破る人
アベックで出掛ける先はお医者様
時々呆けた振りして困らされ
知事になり胡瓜やトマト売りに来る

大阪市 福岡末吉

歳重ねもたげる僻み日々寂し
夢多き赤黒たわむランドセル
虹の橋渡つて未来を見てきます
いつ果てる格差に終始我が暮し
省みて幾多の好機見過せり

大阪市 大川桃花

美辞麗句百より響くぶつきらばう
似たような話している前の席
体形の七難カパーするセンス
金看板降して猫と住む余生
長いことかけて出て来た卵焼

大阪市 岡 本 久 峰

愚か者日本の神話ふみにじる

やすやすと拉致を許した日の甘さ

芸能人知事のお尻の軽いこと

マスコミを笠に大臣呼びつける

スターリンの轍をふむなよ北のドン

大阪市 川 原 章 久

酒の毒わかつちやいるがやめられず

出来ちゃった婚早熟らしいコウノトリ

挨拶に桜が入る月始め

十代の素肌美わやにする化粧

口車に乗せて払わぬ保険金

大阪市 古 今 堂 蕉 子

短い足なのにこのごろよくもつれ

足腰とついでに脳もきたえとこ

いずれ減る友をせっせと増やしてる

焼きたての目刺しの試食うますぎる

大正琴桜ハラハラ散る中で

大阪市 松 尾 柳 右 子

町会の婦人部集う昼下がりが

盛り付けの人参料理引き立てる

道頓堀タコヤキ食べる修学生

くだおれ前の人形ひとを寄せ

幼き日思い出させる墓参り

大阪市 津 守 なぎさ

花見頃黄砂にかすむ大阪城

旅仲間どんどん増える風みどり

一病をいたわる友の名言集

バスツアー喚声あげる桜吹雪

嬉しさが衣裳に迷うデイナーショウ

大阪市 神 夏 磯 典 子

口止めをしても慶び洩れてくる

二次会で意見を吐いている男

播く時期を違わず豆が鈴成りに

雑踏でスマートな人避けて行く

インタビューだけで名人笑わせる

大阪市 津 村 志 華 子

飛行機雲あれは天女の解いた帯

大根の強さに雑草負けている

丹精の郷土野菜はエコライフ

正直なカメラに歳を暴かれる

様ざまの灰汁抜け切って母白寿

大阪市 小 糸 昭 子

祭壇の花嫁白いドレス映え

鳥にも上下軍隊式があり

巣の中が全部口なり燕の子

お彼岸に猫は留守番不満顔

木の芽和えその味付けに舌踊る

池田市 栗田 久子

迷うても道はどこかに通じてる

赤々と夕陽が胸におちてくる

田おこしの人をせかせる走り梅雨

気づかずにわたしに巣くつていた甘え

若鮎の抜かれた骨の美しさ

茨木市 藤井 正雄

大胆なカット庭師は芸術家

公約はみな厚化粧選挙戦

漬け具合祖母が秘伝の紅生姜

ときめきもとまどいもある人に逢う

きつといい返事と思う花切手

和泉市 横山 捷也

携帯を切って妻から雲がくれ

すぐ怒る妻は元氣な証拠です

少し的はずしておこう妻へ愚痴

共倒れ避けよう老いの朝の膳

支え木をはずせば倒れそうな夫

和泉市 西岡 洛醉

手の平の皺は苦勞の場数踏み

味噌汁の朝餉に妻は愛を盛り

来年も生きる積りの種を蒔く

楽しみの外食妻と年金日

揉め事は水に流して舟を漕ぐ

泉佐野市 山本 蛙城

教育に囲炉裏卓袱台あればよい

パセリまで残さぬ誇りベジタリアン

遺句集の表紙の白にある力

無党派の風と溜飲下げました

君が代が終ると浮かぶ海征かば

大阪狭山市 矢野 梓

集まれてラッキーだったクラス会

歳のさば読まなくていいクラス会

生き方を重ね合わせてクラス会

在りし日の友を偲んでクラス会

ご自由にしてねと妻はクラス会

交野市 山川 日出子

落ち椿ドミソドファラと並んでる

大阪弁まだ話べた呉生れ

新力士平常心を祈る父

故郷を背負って励む相撲取り

野崎寺お染久松見てた鐘

交野市 田岡 九好

天変か地異か彼岸の入りの雪

女房の口蓋したき春の宵

女房の助手で生きんと思いいけり

人影にあの琴平の寂れよう

不適切などで済ませていいものか

交野市 森 本 弘 風

夜九時にもう寝ていますテレビ消し

排ガスを出さぬ元気な足を持つ

不味くても文句言えない妻の味

家揺する春雷を聞く床の中

お彼岸に不孝を詫びる墓掃除

河内長野市 村上直樹

生きててねあなた年金生む機械

棘のないバラだどっこい気をつけろ

焼け跡に花も咲かせてきた気骨

越えてなおまたその先に地平線

惜敗の涙は空が吸ってくれ

河内長野市 水谷正子

咲く人も散る人もあり春四月

車窓から青田が消えて住宅地

決算期膳も張り込む老人会

メガネにも此処ですよのベル欲しい

お菓も九種類あり呆けられぬ

河内長野市 井上喜醉

知事になりタレントよりも人気でる

踏まれてもタンポポ元氣すぐに起き

月掛けて葬式代を掛けて置く

地鎮祭お粗末でした紙コップ

照る月が黄砂へ霞む春の宵

河内長野市 植村喜代

だんだんに漢字も覚え孫便り

信じたい信じられない人ばかり

おばあちゃん大すきメロメロにさせた孫

寝て起きてあつと言う間に八十路坂

春が来て心の春を待っている

河内長野市 山岡富美子

私の余生を照らす一行詩

年金が照らす余生のほの灯り

すれ違う通園バスと介護バス

ひな壇に野心が並ぶ国の顔

ブランドで武装している負け戦

岸和田市 土橋房枝

春色の口紅選ぶうきうきと

過去の事想い出させる桜咲く

花びらに好きか嫌いか聞いている

ロマンスの花咲きそうな初対面

ロマンティスト金と力はなかりけり

岸和田市 井伊東吉

長持ちの桜に欠ける潔さ

四五月に納付書どつと押し寄せる

デパートのチラシが先に季節呼ぶ

句会への運賃意外高くつく

ホットからコールド変わるおーいお茶

岸和田市 岩佐ダン吉

ゆつたりと生きる性善説をとる

九条に何が言いたいのだらうか

人間に戻ろう核はゼロにする

この一匹ちりめんじゃこにある命

覚悟きめたつたひとりの手を挙げる

岸和田市 雪本珠子

輪の中でやさしい嘘に繋がれる

下手な嘘すでにしつぽが見えている

鈍感になれば気楽に生きられる

幸せは笑顔に引かれやって来る

久し振り会えばイメーヂ変わってた

岸和田市 堤 植代

したたかに鈍感力で生きてます

コマーシャルつるりつるりの肌ばかり

シナリオはいらない明日の風を待つ

思い切り桜の下でのびをする

苦勞してやっと咲かせた花にキス

岸和田市 原 さよ子

平凡という幸せをつい忘れ

人情まだすたれぬ近所温い

ボンボりにせき立てられている薔

陽を一杯吸って布団も生き返り

野菜だけ買わずにすますほどの鍬

岸和田市 小島笑司

妻不調右往左往の急看護

長寿法御洒落快食好奇心

懷古趣味大正浪漫赤毛布

父草鞋母檻襖補修囲炉裏端

花冷えと雨に祟られ通り抜け

堺市 柿花和夫

煩惱を断つ方法で迷ってる

もうだれも叱ってくれぬ盗み酒

不覚にもバリアフリーを勧められ

止り木の内部告発から雪崩

一合で猿も私も眠ります

堺市 矢倉五月

弱気ではないが一病心得る

雑音の中にも私に響く音

桜吹雪を浴びてしばらく夢を見る

親孝行元氣な笑顔だけで良い

心意気だけで登れぬ山と知る

堺市 石堂潤子

晴れ晴れと宿題の無い春休み

いい年をしてCMの無駄を買う

ポストまで行き初蝶に迎えられ

頂いた花を片手に立ち話

連れてつてと言う目で犬がついて来る

堺市宮本かりん

欠伸の字読んで大きな欠伸する

これだけとは意地を通してもつれ出し

相合傘の余韻残した傘たたむ

うろ覚えの道思い出が甦る

新緑がひとときわ映える雨上がり

堺市齋藤さくら

鎌倉の人人に酔っている

雑誌にも載ってる店とのぞき込み

長谷寺の花のみことさ目を見張り

踊り子が歩いただろか天城越え

ありがとう別れの涙手で拭い

堺市源田八千代

古希祝デイズニーランド満喫す

ニュータウン坂を登れば桃源郷

泣いている新人生に孫重ね、

山桜母在りし日の畑仕事

お互いに意識し過ぎる好敵手

堺市西村りつえ

賑やかでやがて淋しい夕ざくら

路線変え灰汁を抜きつつ若返る

ロバタ焼しかめっ面に笑み戻り

温暖化米に宝の雪不足

良妻を半日演じ肩が凝り

堺市山本半銭

雨の午後仲直りした姉いもと

雨の午後独り善がりが続いている

疵付けた柱を残し皆巣立ち

漬物に値札をつけて人居らず

柱時計響き老人だけの家

堺市志田千代

活断層の上と知りつつ住んでいる

目の高き孫が合わせてくれている

元金の減らない貯金だけしてる

ドタキャンはさよならのつもりでしたの

うたた寝をまたいでいった猫の影

堺市村上玄也

禁煙のシールが貼ってある新車

伴奏は無視して歌う父の歌

玉突きで転がり込んだきたポスト

病み上がりへ譲られた席温かい

いける口だと直ぐ分かる飲みっぷり

堺市奥時雄

スタイルをヒップに集め闊歩する

ミニスカートでもよさそうな初夏となる

悪知恵に長けて寿命を縮めてる

鼻柱折られ卑怯な顔が出る

妻と娘の多数決にてハイ決まり

堺市和田つづや

黄砂にはまつ赤な菌が居はせぬか
使い方知らぬ忠誠愛がある

謙遜の中にちよろちよろ虚栄心
温めても返らぬ卵だから食う
はまるからテレビゲームは退職後

四條畷市吉岡修

曾孫抱く命のふしぎとはこれか
つなぎとめる金も無いからあきらめる
社友というわけのわからん名をくれる
耳のそばを携帯電波十重二十重
内緒だよ言うてもらしたから速い

吹田市早川清生

乗り継いできた宿釣りの竿並ぶ
自己凝視結局飲んで湯宿出る
天皇を神にし神を使う軍(小倉侍従日記 3句)
皇后と諍い弟宮避く天子
A型でおわすか決断欠く聖慮

吹田市太田昭

ジョーカーを使う相手が見つからぬ
古傷を見せ合う友も居なくなり
私の骨も焼くと白くなるだろうか
地下街を抜けると会えぬ人に逢う
仏壇の前で決意の盃を割る

吹田市穴吹尚士

それほどの金もないのにセコムする
言い訳が過ぎて傷口深くする
風呂敷に法螺を包んで借りにくる
年金を妻は愛してくれている
カウンターのいつもの隅で酔いどれる

吹田市大谷篤子

すれ違う群れは知らない街の午後
頑張らずのんびりとして生きのびる
今のうち沢山笑い暮します
うっかりと病人だったこと忘れ
古手紙まだ捨て切れぬ二三通

吹田市瀬戸まさよ

散骨は海ふるさとは港町
山いずこ霞とまがう黄砂降る
見上げるといちよう並木は赤子の葉
ほんのりの苦味がいいね春の菜
ご蟲屑のそば黒七味出汁の美味

吹田市須磨活恵

おにぎりや春を満喫草筵
花吹雪浴びて今年も春惜しむ
人並という標準に感謝する
分相応過ぎれば怪我のものになる
がらくたになっても昭和捨て切れず

吹田市 木下敏子

菜の花に囲まれ湧いてきたやる気

吐く物がまだ残ってる腹の虫

いい夢を見せて貰った花の下

太陽に恋し雑草伸びのびと

ストレスが張り付いている生きている

吹田市 野下之男

ごね得で手を叩いてる北の人

廊下でも遊んでくれる花吹雪

溜め息をつかせて妻の赤い服

特売場妻の顔まで生き返り

同じなら美人の団子買うてみる

高石市 浅野房子

友が逝き思い出だけを置き去りに(たず子さんへ 2句)

リーダーが逝つて烏合の衆となる

ああしんどこの世の坂はしんどいな

夢を見る五臓六腑も疲れたか

金の算段しながらも浪費癖

高槻市 井上照子

嫁ぐ孫に人生訓を書く手紙

祝福の曲の余音が胸にしむ

病妻に尽くす米寿の兄優し

温暖化地球の危機がみえている

茶柱が立つて朝から心地よい

高槻市 傍島克治

立ち話頼まれごとを忘れさせ

呼吸が合わぬ老人ホーム合唱団

春の陽気が不精な彼を外に出す

金婚で妻に授ける助演賞

言訳の捏造ならばまかしとき

高槻市 瀧本きよし

疲れてる母さん癒す児の寝顔

痩せるには歩くことだと万歩計

日向ぼこしたいと思う招き猫

乙姫とアバンチュールし火傷する

手を合わせ浮気を妻に詫びました

高槻市 富田美義

それぞれの顔がそれぞれエゴを持ち

出生の過去は問わないこぼれ花

形見分け臓器欲しがる奴もいる

ロボットも世界に生きる知恵を持ち

地球儀の一ミリ満たぬエベレスト

高槻市 佐甲昭二

風が止み途方に暮れる風見鶏

飛びついた電話やっぱり不合格

あいまいに答えて尻尾掴ませず

冷めた目でボチが見つめる朝帰り

特攻の島に浮かれる花見客

高槻市 乙 倉 武 史

千年の樹齡さくらの下で飲み

健康の指向玄米食も馴れ

麦飯で若さ弾けた兵の頃

他人から兎角いわれる筋はない

それぞれに言えぬ各自の裏事情

高槻市 指 宿 千枝子

お呼びせぬ遠い空から黄砂降る

歳ですねルーズになった腰回り

ふるさとを満喫させる道の駅

自信作の米に名札が付けられる

黒猫にじつと見られて身が竦み

高槻市 執行 稲 子

ほんのりと彼もやっぱり老いの類

待合室マスクが右往左往する

故里に幼い日の夢貰うて来る

吉と出て財布に抱いて笑むババの背な

べつたりと張りついて笑むババの背な

高槻市 峯 村 勲 弘

古希迎えギアはスローに切り替えて

老い二人青春切符旅鳥

フルムーン疲れを癒す花明り

紫陽花のスタンバイする花の寺

塩加減利かせどっこい生きている

高槻市 西 谷 治三郎

特級酒飲んでた頃が華でした

姿見にわが身映せば皺目立ち

お互いに同じ話を二度三度

どの薬効いたか最近調子良い

肥えるにも痩せたいときも金かかる

高槻市 生 田 義 一

見ちゃおれん日本力士は総くずれ

歯が立たぬ八百長騒ぎでお茶にごす

開幕戦例年のごと虎吠えず

乾杯の挨拶泡が消えてまだ

うらやましお手々つないで老い二人

高槻市 大 崎 侑 子

バス停が近くていつも走ってる

無料バス好き放題に乗り回し

遺言に書くほどのもの何もし

日記には思う存分書き連ね

表向き良妻賢母くたびれる

高槻市 左右田 泰 雄

こっそりと抜け出す眠い会議室

凍てついた大地に芽吹くふきのとう

気紛れで当てにされないお天気屋

からつぽと言う音がする石頭

手つかずの自然に触れた岩清水

豊中市 岸 田 知香子

美しく年を取るのも楽でない
差し向いジャンケンポンで皿洗い
ここかしこ故障だらけの老いの坂
薬持ち十五時間のカナダ旅
バスポート十年先の見栄を切る

豊中市 山 門 タ ミ

一人では出れぬ明るいもぐらです
生かされて一人暮らしも今流行
お偉いさんプライド捨てて頭下げ
有難や手とり足とりリハビリ
連れられて桜トンネル車椅子

豊中市 安 藤 寿美子

杉花粉黄砂と空気吸いにくく
病弱な祖母が天寿を全うし
足ちゃんと出るヒコキかよう聞きや
雨かいな庇が水玉模様です
戦時下の娘で育ち八十二

豊中市 藤 井 則 彦

方便の嘘は見抜けぬ発見器
作っても渡す相手のない名刺
見るからに楷書のようなお人柄
黒髪が座ると目立つ昼のバス
不思議にも美人が来ると目を逸らす

豊中市 水 野 黒 兔

手を洗い心も洗う五十鈴川
収穫は海の青さという釣果
ベランダの収穫もまず仏前へ
油断してねこにあくびをもらう春
陽炎にやせて揺れてる影法師

豊中市 江 見 見 清

栄転か介護か決める時が来た
安売りと書いてあるので立ちどまり
手書きしたメニューなんだか美味しそう
お友達とはいうてゐるが恋仲だ
達筆な礼状みなで回し読み

豊中市 吉 田 あずき

春野菜うれしくなつて買い過ぎる
童謡を歌えば何故か出る涙
母の轍走つて母に会いに行く
中流も消えて格差の億単位
原発ミス皆隠してた怖い世だ

豊中市 樫 谷 郁 子

満開の桜に感謝八十路坂
花筏木の葉船頭風まかせ
夜桜の盃へ浮べる花吹雪
一泊二日帰る我家にほつとする
待つ人の居ない家でも恋しいな

富田林市 大橋 鐘 造

夢抱いて巢立つ四月という舞台

騙す者おらず淋しい四月馬鹿

草の芽に詫びて莫塵敷く花の下

吹く風に乗って桜の花筏

花吹雪同じ散るなら美女の肩

富田林市 池 森 子

説き伏せて春を一片^{ひしひら}借りて来る

浮かれたらあかんと言うて散るさくら

改札を出ると視野は三六〇度

春彩にすっかり染めるわが余白

改札を何度も抜けて現在地

富田林市 中 井 ア キ

ふわふわと遊んでいます古稀の春

日曜日テレビといちにちを笑う

お魚の煮付けもチンで済むくらし

ひと呼吸おけば周りが澄んでくる

ベテランを叩くと熱い音滾る

富田林市 片 岡 智恵子

踏んばっても脚出ぬ飛行機は恐い

中流層崩れ貧富の差を広げ

人はみな自分の短所知っている

鈍感な男に似合う祭り笛

二六五グラムの命が育つ

寝屋川市 江 口 度

もう歳かお宮へ行くのに二度休み

煙草もう吸わない筈が吸うていた

子供の日近づく欲しい鯉のぼり

珍しい蛇が近くにいたと言う

土地買うと言うから山を買うと言う

寝屋川市 平 松 かすみ

兄弟に祝福されてマイホーム

鍵三ツ無事に返して安眠す

ありがたい友居て重い荷も動き

代々の家訓を忘れないように

タダイマの大声保育所から帰り

寝屋川市 太 田 とし子

ライバルの笑いに解けた鼻柱

目の色を替えて何う花の下

ひらめかぬ頭にリボン付けてみる

ピーポーと腰の痛みに笛が鳴る

改めたいことが山ほど新年度

寝屋川市 富 山 ルイ子

しがらみを抜け出し午後は好きにする

つわぶきをおすそわけだと持つてみえ

つわぶきの味なつかしく少しずつ

今年また気の合う友と花の下

二〇分昼寝でやっと元氣出る

寝屋川市 籠 島 恵 子

怠けぐせついてしまった風邪十日

親切に思えぬ医療費の通知

相変らず一筆箋を五六枚

生きてやるとっこいしょと言いながら

今宵満月見ていますかと子にメール

寝屋川市 森 茜

友だちも転ぶ座ぶとんの端っこ

銀行の自動ドアから白い蝶

正確な時計を拒む春の宵

説教はごめんと逃けている顔だ

ひとりっ子ハンバーガーとビデオ観る

寝屋川市 坂 上 高 栄

今日年忌十万億土の一里塚

病院で年末年始冬ごもり

傷癒えて桜桜の花の宴

歩けない足が夢見るフラダンス

福袋買った事ない猜疑心

羽曳野市 安芸田 泰 子

風の鞭一夜に春を追いかう

買うつもりなのにチラシ溜めている

富士山に歓声あがるバスツアー

後悔の涙を吸っている日記

春うらら老いの扉も開け放つ

羽曳野市 酒 井 一 壺

逃げることに知らぬ男で傷だらけ

好きだよの短い言葉出てこない

ありがとうとても短い言葉

手を握りわくわくさせてくれた人

生き下手な僕だが道は間違えぬ

羽曳野市 三 好 専 平

ニセモノでも愛がこもっているダイヤ

人権と死刑の狭間埋め切れず

あやまちはくりかえしません またかいな

自己責任とらないやつが指揮をとり

縄暖簾このごろお女将肘をつき

羽曳野市 吉 川 寿 美

春の絵皿にわたくし色がまだとけぬ

保険証と上手に歳をとってゆく

ありのままのわたしを支えてくれる脚

夫れ夫れの分弁えている十指

男結びも出来ぬお方でほっとけぬ

羽曳野市 徳 山 みつこ

焼き肉はもう食べ飽きている桜

一本のラムネに遠い日の私

地球の逆襲だ水河瘦せ細る

九条を失いたくはない一票

外交はどちら様にも負ける国

枚方市 伊達郁夫

もう少し背伸びしなよと影法師
焼酎の湯割り加減を妻が知る
だんだんと酒が話を膨らます
退屈を流すシャワーを熱くする
一滴の雫も拭いて体重計

枚方市 安達忠央

自分史の初恋の章書きあぐね
いい棋譜をたった一手の歩がつくり
日記帳その日の無念書きなぐり
子離れに笑顔つくって堪えている
お互いと老老介護睦まじく

枚方市 二宮山久

新芽ふく孫も今日から幼稚園
ふる里の花見恋しや淡き恋
夜桜の宴もたけなわのど自慢
桜咲く太めのおにぎり妻と行く
満開の桜並木を万歩計

枚方市 森本節子

紅椿散りしく花びら共に撮り
年とともに捨てるものあり拾うもあり
遠い昔お針に通った上町辺
もう一度歩いてみたい天王寺七坂
はるばるとおよびではない黄砂くる

枚方市 寺川弘一

幸せは格差社会の真ん中あたり
アダムとイブができた時からあるエロス
愛の言葉に嘘は絶対いけません
上手に蓋を開ける夫と暮らして
平均寿命越すとお誘い断れぬ

枚方市 丹後屋 肇

開票の経緯を浮かぬ顔で聞く
春雷がトナリの軒振じ伏せる
数行の過雁冬ごとかつ攫う
廃車して何やら床し散歩道
四コマの漫画に腹を縫っている

枚方市 海老池 洋

お日様と響き合うてる父の鍬
良心が見張りしている無人店
昨日の殻破り咲かせてみたい明日
若いつもりがボックリ寺へ誘われる
栄転を送り左遷で送られる

藤井寺市 中島 志洋

夢破れそれから酒が強くなり
もう無理と鏡が嗤う若作り
悪友の口からばれた艶ばなし
断わりのダイヤル回す重い指
出来すぎた儲け話にうかうかと

欠席の冷たい丸で来た返事

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

限定品買えた得した気になれる

ギャグ少し止めると男前なのに

挑戦のようにライバルいい笑顔

臘月時を惜しんで恋のみち

藤井寺市 若松 雅枝

花の道歩けば心浄められ

新築ブーム子供の影も増え始め

妻の目も今日は穏やか花見酒

硝子拭く綺麗な明日を見たいから

持って来た葉見せ合う老人会

藤井寺市 高田 美代子

ブーメラン帰らぬ友と雲の中

春は駆け足桜は咲いて散りました

真面目さは残しチヨイ悪で遊ぶ

情けない大人で人にすぐ縋る

人は皆一度生まれ一度死ぬ

藤井寺市 鈴木 いさお

昼どきに昼めし食える有難さ

深呼吸遠くにバキュームカーを見る

子供等に見られてるかも知れぬ背な

何時からか妻が家族を取り仕切る

神様に見透かされてた下心

あげる物ないが笑顔と愛がある

その話またかと言わぬ思いやり

あおられて私も納豆買いしめた

毒舌を吐いてる割に好かれてる

人生訓いろいろあつてまどわされ

阪南市 森村 美花

新緑にちよつぱり心弾ませる

シンブルに生きて意固地を通して

わがままになつてきたのはお互いさん

八朔の甘酸っぱさが心地よい

あの手この手 形変えても天下り

東大阪市 米田 水昇

うとうとと花野をのぞむ昼の月

第一歩ふんで大地に立つ幼児

孫とする笑い笑わしにらめっこ

銀髪に紫似合う令夫人

生まれたて水色めだか空を見る

東大阪市 北村 賢子

支給額減らし底辺切り捨てる

マイナスをプラスに変えてゆく気魄

変らないねなんて嬉しい同期会

ハンディある身体ものともせぬ自信

満開の桜へなぜかもの悲し

東大阪市 笠井欣子

コンビニのおでん主役の花の下

伝授した豆のご飯は母の味

桜見に行くと突然言う夫

時雨する今日は一日テレビ見よ

新入社慣れた頃には五月病

東大阪市 佐々木満作

なで肩を鏡に言われ背筋張る

マスクして黄砂花粉の街歩く

葛藤がほぐれ笑顔の嫁姑

踏まれても弱音を吐かぬ影法師

花祭り釈迦に一献差し上げる

箕面市 出口セツ子

定年のころから働くのも奇運

パソコンに振り回される目と頭脳

やる前にできぬと言わぬことにする

傷ついているのか不安子の変化

子の未来いつも笑っていて欲しい

守口市 井上桂作

あこがれの自由を今はもて余し

真実を衝いた落書目にとまる

時々空を見上げて深呼吸

捨てた見栄頭もたげて自己顕示

世知辛い金属口は金具まで

八尾市 宮崎シマ子

一人居の気まま一食抜くことに

草餅を一つ食べすぎ贅の宵

若い人がまた出て行った裏長屋

ケアハウスへそろそろ行こか老い二人

夫は横でグウチョキバァーとかく軒

八尾市 村上ミツ子

一票を誰も彼もに狙われる

何もかも手ぬき省略七回忌

これからも続ける作句供養なり

ヒノキ花粉と黄砂いっしょに攻めてくる

飼主をベットにしているブルドッグ

八尾市 長谷川春蘭

カプセルの色のいろいろ春の風邪

寒の夜の鍵穴逃げてもどかしき

オーバーの色同じなる恋敵

路の臺ほろほろ揚げて誕生日

おどおどと内股歩き春の鴨

八尾市 山本宏至

口ほどに滑らぬ筆がにくらしい

忘れずにくる税金と花粉症

退屈の虫を遊ばす庭いじり

コマーシャルいつか買う気になっている

もくもくと無口同士で仲が良い

八尾市 吉村 一風

高齢化持つてゐる閑と金と口

飲む順に薬並べて確かめる

珍らしく三味の音のなる春の窓

旅好きは雨なら雨でねらいあり

生きのびて迷惑ばかりかけている

八尾市 高杉 千歩

携帯の指の若さに負けている

化粧した顔に自信のもてぬ老い

あんさんの真似してお好みモダン焼

執着と好奇心とで生きている

ドアフォンの人を間違ふ呆けはじめ

八尾市 生嶋 ますみ

よろこばう遅配まだない年金日

天井の染みにリフォーム考える

未だ喧嘩出来る夫婦が頬笑まし

美味しい店みつけて得をした気分

親切についほだされて騙される

大阪府 前田 ゆい

戦友に辞職促す社長業

創業の社長の遺影大きすぎ

終章を飾る社長の一代記

一代記努力努力の奮闘記

やっぱりと言われる社長三代記

大阪府 澤田 重

電話鳴るテレビの競馬いま佳境

割り切れれば雑魚でのんきに生きている

一笑に付したが心定まらず

人間の愛がほしいと泣く地球

空袋持つて拾わぬ犬の糞

大阪府 初山 隆盛

花の里ビルの谷間の通り抜け

血圧にほどほどがよい四月馬鹿

年金へ老人控除認めない

土有情耕す汗に裏切らず

出る幕でないと知ってる月明かり

大阪府 米澤 俣子

靴が鳴る野道が消えて歌も消え

のど飴を食べると黄砂降って来る

有頂天突然梯子はずされる

さっぱりとガラクタ捨てる勇氣欲し

修羅越えた証に出来た皺の数

大阪府 野田 栄呼

付け爪を不気味に見てるお年寄り

割れ目からひしめき合つて芽ぶく草

夜のしじま遠く近くに救急車

遠い日の我慢が楽を呼んだ古希

鉄瓶に癒し求める茶の心

大阪府 桑田 ゆきの

満開の桜へ回す車椅子

遺伝子を貰うたお蔭と手を合わす

真夜中にコンビニへ行くスモーカー

鼻歌で掃除している花筵

受け継いだDNAが冴えている

神戸市 両川 無限

ときどきは妻のハートをノックする

子供とは親とは何か代理妻

悪党は最初優しくしてくれる

少年を釣り好きにした青い海

どん底を抜ける魔法の杖がない

神戸市 伊勢田 毅

凡攻凡守今日も日記の種がない

美しい国の矢印揺れ動く

守備範囲広げてひとり疲れてる

年金で分に応じた日を送る

腹八分順守出来ない身を嘆く

神戸市 山口 美穂

花びらをまぶしてままごとの桜餅

七十年やり直し出来ても同じだろう

春眠をむさぼるわたくしも犬も

山が笑うはこんな感じがすすみれ草

コーヒの味の違いは躁と鬱

神戸市 山口 光久

打てば響く心の絆纏れない

拳骨をもらって悟る広い視野

絵ハガキのまだ見ぬ国が呼んでいる

図に乗ってついつい秘密口走る

用心深い人ほど嵌る落し穴

神戸市 山田 婦美子

正夢とはつと目覚めるストーリー

短か夜に夢まで夢の続き見る

根があれば善きも悪きも生えてくる

捨てられず捨てられずして狭い部屋

苦心して買ったバッグが鎮座する

神戸市 木村 貴代子

幸せは痛み知らずの大手術

幾人の手に救われたこの生命

再びの誕生祝う友の声

病院のうす味口に合ってくる

留守まもる犬に近所の御親切(くも膜下出血より生還)

神戸市 田中 章子

必要とされればしゃんとなる背中

自給率アップを目指し畝づくり

幸せな時にもしみが顔を出す

咲ききって散る桜にはただ拍手

牛井もクローンと聞けば箸止まる

神戸市 池田善守

ほどほどに鈍感力で幸せに

温暖化心は逆に寒冷化

金婚式妻への悪事時効なし

人に世話かけずにバイバイする努力

洗濯機の音も快調妻元氣

相生市 中塚礎石

出稼ぎの安否気づかう秋祭り

昼の茶が時折ひびき合う夫婦

年金の枠を飛び出す月もある

はんなりの愛が女に物足らず

人間を馬鹿にしている朝カラス

芦屋市 黒田能子

ふっ切れたらしい笑顔をとりもどす

二段跳び追い越していく長い足

数のうちに入れてもらって輪の中に

命綱結び直しているピンチ

減塩に物足りなくて唐がらし

尼崎市 春城武庫坊

父おれば笑顔で来そう桜道

学園前若い熱気が群れて燃ゆ

ピッチャー不調何度も帽子に手をかける

休肝日の予定が狂う春曆

森消えてカラフルな屋根並び出し

尼崎市 田辺鹿太

長生きの達人たちはよく笑う

やきもちも焼かなくなつて妻も喜寿

脳に効くくすりを買いに本屋まで

ノ一天気だけでは済まぬ税の使途

退院して以来毎日休肝日

尼崎市 長浜美籠

それぞれに度量は違う花の首

回廊を法主に続き桜の中

ダイアナ妃の座った茶席交替で

軟らかい雨に心底気を許す

桜の下往き交う人も多国籍

尼崎市 林昭三

手伝うと孫が洗車の邪魔をする

咲いてよし散つて鮮やか国の花

歯は丈夫でも一品は冷や奴

請求書上様とある誰だろう

東京に住んでる子より猫が好き

尼崎市 春城年代

リハビリを休むとすねが硬くなる

リハビリに大袈裟な声立てている

ところと居眠りをする老いの春

赤ちゃんポストちさな命を守らねば

チューリップと園児の列が玩具めく

伊丹市 山崎 君子

赤白と夫婦のように咲く椿
ホーホケキヨ小さな世界庭も春
くぎ煮届く友それぞれの温い味
新しい眼鏡に貰う若返り
朝のコーヒー花の目覚めを待ちながら

川西市 西内 朋月

春の午後背なに陽を受け爪を切り
旅で先ず飲み屋を探す夕茜
さばさばと飲む妻の十三回忌
茅葺きの柱に鈍の一揆傷
ちよつとしたことで生じる隙間風

川西市 米原 雪子

ばあちゃんが描く曾孫の未来像
見えて来た米寿の坂を登らねば
しっかりと話すつもりが舌足らず
お下がりがびつたり合つて着せられる
話すまで胸ドキドキの初対面

三田市 久保田 千代

花びらの乱舞の春がまた巡る
お互いの我慢続いてまだ夫婦
生真面目な人と一日いた疲れ
気の弱いところもあつて憎めない
友情に触れて傷口癒えてくる

三田市 石原 歳子

小波が消えてお茶飲む差し向い
この歳になったからこそ赤い服
明日のこと風にまかせることにする
思い切りブランコ漕いで子に返る
振り向いて欲しいと叫ぶ野辺の花

三田市 堀 正和

園児の名読むのに苦勞するでしょう
あるだけの小銭ですますお賽銭
オブラートなしで妻から来る苦言
日めくりの処世訓にも睨まれる
考える振りをしてると寝てしまふ

西宮市 西口 いわゑ

花花人人人の日曜日
テントにもひっそり夢は育つて
行列の出来る屋台のたこやき屋
人間の寒さを花が暖める
夫の世界妻の世界でみるドラマ

西宮市 片山 忠

自己欺瞞嫌な癖だけつきました
お膳立てするからいつも付け上がる
出歩くと口も達者になつてくる
いい着地したのに誰も見てくれぬ
青汁を飲んでたばこに免罪符

西宮市 坪井孝一

自分流の生き方今に悔い少し
転ぶたび囃してくれるボクの影
玉の汗頑張る父の私小説
身の丈の暮しに丁度ぬるい爛
下手な句にも鉛筆6B使ってる

西宮市 山本義子

パントマイムなかなか通じない男
雨降りがことさら好きな花菖蒲
焦れたい臘月夜を責めたとして
なぜかしら突拍子ない夢をみた
家計簿はつけず月末軟着す

西宮市 牧瀧富喜子

はやく逝くしばし廊下に立ちつくす(門谷たす子さん逝く 2句)
喜びと悲しみ重ねさくら咲く
あきらめと切り換え無心の花という
音消して煮物コトコト聞いている
リラ咲いて見知らぬ人に名を聞かれ

西宮市 亀岡哲子

地球儀のこの一点で見るさくら
お土産は宅配で着く旅鞆
プラスマテレビ世界漫遊しています
満天の星が案じている地球
学校給食魚上手に食べさせる

西宮市 緒方美津子

方言でしゃべると電話長くなり
崖に咲く花をとりたいたい時もある
しゃべらぬと御気分でもと尋ねられ
ことごとくつかかる今朝の信号
手間よりもまず百均に走る今

西宮市 井上松煙

隅っこにわたしの城を作ってる
自分史に書けぬ痛みが一つあり
胃袋は働きづめの夜行バス
団体で男子トイレへ流れて来
傘寿すぎてまだ軸足が定まらず

西宮市 菊池トミエ

物置に古い鞆が二つ三つ
少しづつ忘れて丸くなってる
雑草の可憐な花に魅せられる
大人とは話をしない子が増える
老人が盛り場の昼闊歩する

西宮市 秋元てる

アカシヤの古里遠くなるばかり
思い出と違う故郷が気に召さぬ
年取れば賢くなると思うてた
時々自身ゆさぶり活入れる
老醜をやさしく包む綿のシャツ

姫路市 古川 奮 水

籠松明炎が走る二月堂

杉花粉何処吹く風の山育ち

山行きの弁当くぎ煮入れてある

鈍行の旅に仏の友に合う

乗換えの駅の素うどん旅癒す

奈良市 米田 恭 昌

ゴキブリの化石にだってあるロマン

へそくりの出番がやってきた出費

よたよたと祖父のメールが辿りつき

長い髪アメリカでなら切る井川

趣味多忙元氣溢れる老妻は古希(四月十二日)

奈良市 天 正 千 梢

三児三様物差しが皆違い

川柳はいじめも派閥もなくて好き

人さまが足元照らしてくれたから

背負ってる荷物の中身知っている

風のささやきにときめいている八十路

生駒市 飛 永 ふりこ

明日香路のわらびや芹に声をあげ

卒寿からクーリングオフ教えられ

お互いに短所認めて支え合い

菜の花の黄色がハモる童歌

おむすびに桜が吹雪く石舞台

香芝市 大内 朝 子

幸せの尺度の違う離婚劇

バツイチで子持ち女という覚悟

人知れず胸に棲みつゝ恋蛭

母さんと呼ぶ声がして狂えない

この自立さあわたくしを謳歌する

橿原市 安土 理 恵

気付かなくていいよ小さい花だから

どうぞ離れて今は一人で歩きたい

アメリカの牛ですとお安くしときます

釣糸の疑似餌わたしは若かった

還付金一泊二日の旅になる

大和郡山市 坊 農 柳 弘

絵画展ちよつと気取つて梅雨晴れ間

天神さん伝統担ぐギャル神輿

床遊び祇園囃しの露払い

大根の白き情けにすぐ染まる

誘蛾灯恋の予感の雨上がり

奈良県 渡 辺 富 子

子に還る母の手をとり通り抜け

無防備な顔でもたれる春のバス

初給料両親連れて回る寿し

メンズエステ戦う顔を作り上げ

人間の情を拒否する電子音

和歌山市 木本 朱夏

鯛焼のシッポまで餡春うらら
花を見る満座の中にいて寂し
唇のファスナー緩む花の下
分際を忘れた猫の指定席
お手頃な値段で秘密漏れる壺

和歌山市 古久保 和子

野良猫が絵になる路地が現在地
五分咲きの頃がわたくしにもあった
空缶空箱遊び道具であった頃
お医者には嘘をつきます酒の量
アンティークいいえ私の生家です

和歌山市 榎原 公子

針を持つ手は居眠りがお得意で
臘月あの字この字が出てこない
ロウ化とは足から枯れてくるのです
山菜を盛って出費がゼロになる
加齢っていいなあ怖いものがない

和歌山市 福本 英子

心からお詫び申してことがすみ
我が家だけ素通りをした福の神
撒いただけ返らなかったチヨコレート
春の魅力桜吹雪と杉花粉
茶柱が立って黄砂も何のその

和歌山市 田中 みね

弾けるような笑顔の中に棲む火種
何はさて置き名誉な役はお受けする
陰ながらあなたに尽くす好きだから
達筆より切手まっ直ぐ貼ってほし
いただいた手紙で探す誤字脱字

和歌山市 武本 碧

歳の差を言つては居れぬ欧米化
パリ・コレを真似ても無駄な皮下脂肪
若者の新語とり付く鳥が無い
塩胡椒過ぎて深爪してしまう
煩惱を抜ければすでに無の世界

和歌山市 細川 稚代

ピリの子に風が応援してくれる
専業主婦そんな嫁さんがしてる
柿の葉すし今さら故郷なつかしい
これっさりもうこれきりという絆
地下街の迷路他人に助けられ

和歌山市 喜田 准一

意見だけ聞いて戦力外に置く
同調をしつつ主張の骨を抜き
タミフルも言葉も時に副作用
泣いて言うほど深刻でなさそうだ
逆風を躲して守り抜くのれん

和歌山市 玉置 当代

頭下げれば済むと思つてゐる企業
気がつけば私提灯持ちでした
いじわるな風に恋人攫われる
ねだられて孫に虎の子出し尽くす
耳鳴りが内緒話の邪魔をする

和歌山市 楠見 章子

るす番電話みんなは飛んでゐるらしい
楽天家のわたしにスーツ似合わない
イヤリング付けてるもひとりの私
赤ワインはめはずしたい春の宵
入園の翼でつかい夢をのせ

和歌山市 宮本 三喜夫

時勢ですデパート等も統合す
業界も再編すると大流行
老舗でも後継ぎなくて人任せ
議員さん明るい話題教えてね
国会は何するところか解からない

和歌山市 松尾 和香

運命をズキズキさせる愛と憎
栄養の限界に立つダイエツト
入学式希望の風に乗る少女
安全の翼信じて乗るひと科
泣き笑い色いろあつて生きてゐる

海南市 三宅 保州

歩くのが何よりという処方箋
発送をもつて発表するなんて
読み返したら書き直したい日記
晴れてゐるときの天気も下り坂
着陸のときは空港狭く見え

鳥取市 西川 和子

パソコンを貰つて呆けてなどおれぬ
孝行のバリアフリーに改造し
巧妙なからくりだから騙される
からくりの裏には隠し金がある
まだ出来る事もありそうボランテア

鳥取市 加藤 茶人

何事も二番で渡る処世術
顔見れば妻の愚痴聞く喧嘩四ツ
還暦へ死に神背中から覗く
長嶋も王大鵬もいた昭和
死亡欄やたら気になる昨日今日

鳥取市 塔 寛子

立つことは勝つことよりもそれよりも
やりますよ友の笑顔に悔いはなく
燃えた青春今蘇る選挙戦
五万五千票うばった笑みのしたたかさ
長い遠い花道でしたおつかれさん

(知事選に挑んだ64歳の友讀うら)

鳥取市 田村邦昭

しっかりと生きた証が見当たらぬ
散りぎわの下手な桜が多くなり
若かつただけではすまぬ悔い重ね
我が道はレールの上を走らない
それなりに嵐も吹いて明日がくる

鳥取市 録沢風花

三日続きの黄砂に春の微熱でる
生きていくルールを猫もわきまえる
青い鳥来る日を待つて庭掃除
ファッションショー街を歩けぬ服ばかり
選挙戦済んで静かな春の宵

鳥取市 平尾菜美

ちりぢりの団塊惣ぶ始発駅
舟解いて父大海の夢を見る
桜への思い断ち切る鉄ない
虹の橋追いかけて明日もレール敷く
太陽に晒す私の裏年表

鳥取市 中村金祥

勝ち組に乗って行くのも気が引ける
新型の病にエキスを吸い取られ
拉致家族生か死さえも知らされず
ほろかすの人生だつて花は咲く
退職へ今日も金魚とにらめっこ

鳥取市 武田帆雀

蛙よりびっくりしたよ鍬の先
竹の子の頭を踏んだ足の勘
謎秘めた女焼香して消えた
まだ騒ぐ血がある花の真ん中に
松坂が投げる日仕事セツとする

鳥取市 杉本孝男

何故ここへ来たのか元へ引き返す
わが子にも見せぬためらい傷のあと
旅最中わらじの紐を締め直す
親の汗知る子だきつとグレはせぬ
心では泣いて薄情者になる

鳥取市 中宇地秀四

脳ミソの虫干ししたい春うらら
過ぎ去った時間が夢で攻め立てる
知つていて知らないふりも嘘の中
変えようとしない議員の甘い汁
いやですね何でも出来る多数決

鳥取市 富山檳榔樹

うす味の粥もおいしい快復期
今日の汗着に妻と酌交わす
老化かなドキドキ急ぎ落ち着かず
老いたとて耕す汗は現役だ
返り咲く夢は現役水墨画

鳥取市 倉 益 一 瑤

恐る恐る川を下った紙の舟
休んだらわたしの彩が消えそうだ
寒い仲にも温い仲にもする貸しだ
黄昏の恋です浅い夢を見る
干涸びた夢に香水ふってみる

鳥取市 上 田 俊 路

海が見え駅弁の箸休ませる
モンゴルに勝つ益荒男がない国技
大正が昭和平成叱つてる
さらさらと今が落ちゆく砂時計
中東へ平和の鳩を飛ばしたい

鳥取市 宮 脇 道 子

もったいないと口に運んで肥満体
役員は詫びの礼儀を御勉強
花弁も白いお米に見えた過去
流されて何処まで行くの一人旅
車椅子当然だよと妻頼る

鳥取市 福 島 庸 二

脳トレのゲームやクイズ花盛り
高齢化ドック検査も狭き門
大当り出た夢を見て目が覚める
生き方も十色の味で勝負する
不都合を知って行動起す時

鳥取市 土 橋 睦 子

テレビから見る夜桜と唄に酔う
未練かね橋のたもとの桜散る
出る幕はもうなくなつた世帯主
衣食住たりてかショックには弱い
会者定離絆が薄くなつてゆく

鳥取市 土 橋 はるお

てるてる坊主つれて花見に出かけよう
雲海に炭焼き小屋の煙が這う
岬から海に向つて経を読む
老人が掃除している無人駅
トイレだけ使いに入る道の駅

鳥取市 近 藤 佳 子

桜咲く日本に住める有難さ
花の下調子はずれの恋挽歌
流れ星あの恋攫つたのはだあれ
乳呑み児がときどき声出して笑う
君子蘭色も姿も君子蘭

鳥取市 田 中 憧 子

介護師さん第一声がお通じは
老いふたり男子厨房にも入る
商品券不便買う店決められて
黒粋の写真準備が早過ぎた
麻痺の指に合うボールペン買い漁る

鳥取市 福西茶子

欠片ほど愛があるから我慢する
幽舞は泳いで行ける遠い国
核持たぬ国を小国だと吐かし
軽快に運ぶ一万歩のリズム
鳴く蟬も鳴かぬ蜚もいとおしい

鳥取市 山本益子

腸の中美化運動へ先ず野菜
生か死か移植待つ子ら神頼み
口車嘘乗り過ぎて動けない
子育ては態度で示す仕付けから
天の声ゆつくり生きる戒めを

鳥取市 植田一京

胸の奥乾いて春の旅に出る
思いきり波と話してころ風ぎ
いい空気吸って若さを取り戻す
春風の魔法うきうき浮かれたす
謎ときが下手で今でも独りです

鳥取市 吉田弘子

終の駅解らないから生きられる
ポックリ死願ひ余生へ竹を踏む
新年の誓い忘れた痴話ゲンカ
湯タンポのような祖母役演じてる
性別がうやむや胸で確かめる

鳥取市 太田幸枝

生意気な口をきくから嫁が無い
自由すぎ手足や腰が不自由に
棒グラフてくてく歩きのぼして
からくりが上手で夫よく動く
たまに來た息子に自由うばわれる

鳥取市 福田登美

幼な子に遊ばれ心豊かな日
何となくこどもの笑みに溶けている
回想の心静かに三回想
寺の風ほのかに香る白椿
同窓会ときめく人はもういない

鳥取市 有沢せつ子

鬱の日は笑うテレビに力借り
いやな事忘れて脳を楽にする
友達と同じ病気でうまが合い
気を回しすぎて寂しい思いする
やり直ししかない歳で今が華

鳥取市 岸本孝子

スピーチの嘘はきれいに言っておく
認知症我が身のもしものなどと思う
満ち足りて乳首離れた児の寝顔
子はかすがいそれは昔の話です
よく転ぶ夫婦で角が取れてきた

鳥取市 永原昌鼓

倉吉市 最上和枝

負けて勝つ暮らしどつぶり五十年
戻り寒人も桜も惑わせる
老々の介護足腰軋み出す
太陽の魔法が怖い雪おんな
薄化粧自分へ魔法かけてみる

鳥取市 奥谷彩子

割れ鍋にとじ蓋金婚までも持ち
うれしい日影も弾んでついて来る
花の昼花に酔つてるにぎりめし
辛口ジョークジャブがゆつくり利いてくる
ロボットも今に有難う言うだろう

倉吉市 山本玲子

俄雨コーヒー店に駆け込んだ
ロボットは何を拗ねたか動かない
お若いと言われ日参する八百屋
足音がひたひたついてくる闇路
下駄箱に捨てかねている日和下駄

倉吉市 野口節子

良心が時折待ったかけて来る
リフレッシュしたくて一人ぶらり旅
神童と言われた友が惚けて来た
好きですと言われて耳を疑った
汚れなく生きて行くのは難しい

腹時計狂わず飯を所望する

台風の時計回りが気に入らぬ

二日酔今日の荷物が重くなる

急テンポレッドソックス銭を積む

おかしくも無いのに笑顔売る女

倉吉市 牧野芳光

繰り言を言うのはよそう春の山

春の闇には企みが詰めてある

鉛筆一本ひとり遊びがうまくなる

雑草も必死お婆ちゃんも必死

大事なことが鱗のようににはげ落ちる

倉吉市 山中康子

都知事選 百花繚乱とはさすが

くしゃくしゃのハートを包む小掠けい

ほっこりと炊けたうれしい飯のかお

接点が合ってトントン拍子なの

オカリナにやさしくしびれ花も舞う

倉吉市 猪川由美子

七十五日失言御仁胸を撫で

総理殿裸の王とちやいますか

高家貸ルームシエア友探そうか

ケータイ普及言葉も愛も軽くなる

最敬礼当選決まりやすぐ上がる

倉吉市 松本 よしえ

シューベルト流す医院で抜歯する
指定席隣に会釈して座る

レシートが要りますか言う変な店

黄砂来てカラス乾いた声で鳴く

団塊に故郷がある子よ帰れ

米子市 白根 ふみ

離壇といっしょに老いてひな若し

今朝摘んだ芽吹くものからもてなされ

掃除機に奪われているハミングを

マップにも載らない路地に桃さくら

老木が明日はないかも散り愛しむ

米子市 木村 富美子

人助け出来るうそなら迷わない

沢山のうそを洗っている懺悔

税金も陽の目が見たい使途不明

孫の手が届いてうれしい春の縁

ありがたや五体満足米のめし

米子市 青戸 田鶴

大阪の苦勞が実る祝婚歌（孫の結婚式）

それとなく一年生を見守る目

散りしいて木々もやすらぐ桜道

立ち枯れの父にもしものベルつける

暗証番号いつも忘れるポケ老人

米子市 門脇 晶子

果物はきつと神様の手作りよ

長い治療で脳が無になるおそろしさ

足腰を鍛えたいので踊りの輪

運命の橋を渡ると海になる

ふるさとで普通に生きて老いて行く

鳥取県 佐伯 やえ

至福かな朝いちばんに花をみる

花は医者くすんだ心あらわれる

ボタン満開私じまんの三十本

ありがたや花は私を裏切らぬ

仏の御加護花植えかえて雨三日

鳥取県 石谷 美恵子

役柄に徹して偉い馬の足

かぞえ唄どれもまともに歌えない

偉い人だったんだなと弔辞聞く

さえずりを聞いてワラビも拳解き

半分は妥協おしどり夫婦の絵

鳥取県 盛田 夢路

選拳戦実の成る花か散る花か

もつれ合う恋のあやとりほどけない

あっさりと引導受けて友が逝く

バランス食脳もお腹も調子良い

胸の傷真つ赤な嘘に悶えてる

鳥取県 下田 茂登子

坐薬剤能書き読んで迷い出す
争いを起こさぬように無言劇
タミフルは飲むなと孫に電話入れ
惜しまれて逝った隣のお爺さん
逝ってから初めて知った夫婦愛

鳥取県 谷口 次男

よくできた優しい母は避雷針
裏金の力にモラル負けている
太陽をお陽様と呼ぶスピリット
こっそりとひっそりとがね裏で組む
あの時は味方でしたと軽いう

鳥取県 深田 倶久

心眼も片方だけで世間見る
能登地震ナマズはお寺まで壊す
新人生しつかり鞆に夢を詰め
鷺の朝練霜に負けてない
硫黄島へシネマ老兵引き戻す

鳥取県 竹信 照彦

頼りないえんどう豆に杖を貸す
露地イチゴマルチ防鳥網がいる
雑草と相撲を取って腰ギクリ
一本でも大木さくら吹雪見せ
ポイ捨ての缶がコロコロ花吹雪

鳥取県 蔵本 悦子

しっかりと春は芽が出る金も出る
乾燥肌春が美肌にくれる
卒業も入学も見えてさくら咲く
頑張つて掻いた汗には嘘はない
痛目に合つて人間丸くなる

松江市 川本 畔

校庭の桜戸惑う東風黄砂
自転車が崖つ淵まではみ出して
ふきのとう土筆もいつか姿失せ
よく見れば小梅がもはや実をつけて
傘立ての傘旅立つて戻らない

松江市 三島 崧丘

眉にツバつけて梯子は登らない
仏像の素顔に邪心論される
胸突き八丁ここを越えれば灯が見える
よく喋る舌を洪茶で窘める
白黒のけじめ錯覚ばかりして

松江市 小川 注湖

結納が床を飾って春の音
朝霧が晴れて宍道湖しじみ舟
矢印が我慢させてる人の波
アメリカが爆発したら北が飛ぶ
花時計影が長引く恋夢中

松江市 松本文子

ばらばらの話心で組み立てる
耐えてきたこと少しずつ忘れよう
ムードっぽい話が下手で酒を酌む
うきうきの訳はバッグの中にある
天国から眺める桜どうですか

松江市 銭山昌枝

不器用な指で千羽の鶴を折る
患った膝五ヶ月ぶりのベダル踏む
口だけは達者食べてる喋ってる
受信料年払いするお人善し
さりげなく手抜き料理を指摘され

松江市 津川紫晃

あんな声妻にあつたか電話口
つまずいてわかる心の裏表
くじ運の悪い女の泣きボクロ
花冷えに人事異動の噂聞く
自閉症青い空だけ好きになり

松江市 安食友子

蛸さん安堵しました無菌だよ
胸ひしぐ母の亡いサル哺乳瓶
スケジュール無手勝流で終わります
密やかにオーラもゴール考える
エゴ的な色鉛筆と遊んでる

松江市 佐野木 みえ

黄砂ふる車も屋根も白くなる
車窓から薄墨桜凜と咲く
大輪の水仙春の頑張り賞
満開の花よ嵐にたたかれる
追伸に本心をふと覗かせる

松江市 松本 知恵子

開府四百松江のまちに歴史あり
平和な世さくらと城がよく似合う
亡き友の娘と見る桜泣けてくる
宍道湖の鼓動のような曲を聴く
日本の面影残るまちに住む

出雲市 森 茂美

広い娑婆白粉つけた鬼もいる
父母の汗の匂いのする日記
君たちも餌が無いのかカラスの子
キャベツ踏むブルが泣いてる朝の霧
同じ飯食った仲間の計報くる

出雲市 園山 多賀子

脱皮してから自負心を煽られる
水底の小石浮く日を模索する
厨ごと卒寿態よく外される
褒められたことは誇大に書く日記
舌触り栄養などは考えぬ

出雲市 吉岡 きみえ

陽も伸びるつくしも伸びるいい春だ
菜の花を和える晩酌もういっぱい
走ったら風もいっしょについてくる
邪心ない寝顔はきつと菩薩だろ
芋虫のようにまあるく丸くねる

出雲市 伊藤 玲子

眼の力奪われ手許狂いだす
付合いの良い夫高い熱を出し
食欲を誘う山椒に春もらう
生涯現役まだこれしきに負けられぬ
スカーフを小粋に巻いて跳んでみる

出雲市 岸 桂子

一杯の盃地球回り出す
ここに来てもうリタイヤの出来ぬ橋
傍線を引いて記憶の中におく
赤くなる努力忘れぬ唐辛子
星のない空が嫌いなにぎりめし

出雲市 小豆澤 歌子

塩辛い話に水を注しておく
稜線の向こうに響く鐘の音
うっかりと水辺まで来た一輪草
胸の中小さな蝶が飛んでいる
倅せを入れる壺ならよく磨く

出雲市 持田 多輝子

祖先から伝わるしきたり子に伝え
三枝の礼教えられたる我が余生
一人旅無二の親友さいたま市
長らえてまだまだ希望も夢もある
さりげない言葉に情けの深さ知る

出雲市 佐藤 治代

夾竹桃咲いて腰痛冬のままだ
あらいやだ猫背になつて鏡
マニアではないが奇麗な切手買う
メル友になつておもしろい風が吹く
氣遣つてくれるメールに癒される

出雲市 富田 蘭水

さくら茶に二人の祝いかみしめる
花に酔い刻を忘れた平和ボケ
髪型が一きわ夜桜に映える
選り好みしない盃もてている
入学の期待の裏にひそむ枷

出雲市 小白金 房子

桜百選みごとに春を演技する
タンポポの綿毛わたしも春をとぶ
藁ひもも解けて白菜花ざかり
手術後は日にち薬と言うてくれ
半額へ並ぶ女の好奇心

出雲市 石 倉 美佐子

島根県 伊 藤 寿 美

うす紅の初恋さえも彩あせる
本当は帰したくないおぼろ月
火のようなもの少しずつ不足する
雨には雨の約束事がある情け
丸や三角書いて私のカレンダー

出雲市 多久和 敬 子

自転車も私も弾む春が来た
旅先のムードに乗って手をつなぎ
同情をされたくなくて見栄を張る
造花には生花に負けぬ意地がある
錆びた脳油差しても変らない

出雲市 城 多 喜

うつらうつら春が眠りをつれてくる
いたずらな風と遊んでいる白髪
死んでゆく脳細胞にビタミンを
さしみつつわたしのレール過ぎる音
逢いたいと電話を切った後で言う

雲南市 毛利 幸

旬の味油がのって食そそる
恩情に溺れて我を見失う
折角の厚い情を仇にする
金銀銅三つ並んで四股を踏む
恍惚とムードに酔うて無我の境

風流が出雲風土記の中に棲む
竹林の風情を抱いた竹人形
これからは雲みちづれに独り旅
沙羅の花亡夫に詫びたいことばかり
聞き流す相槌でいい独りより

岡山市 井 上 柳五郎

旗日でも町内ひとつ日の丸が
世の中にまさかがつくるロスタイム
公正な眼を狂わせた先入観
ひたすらに愛国心で征途発ち
軍隊でライバルが今無二の友

倉敷市 撰 喜 子

ストローに初恋の味思い出す
しゆるしゆると孫の背丈が天を突く
大きめの靴に子の足よく育つ
短距離を駆け抜ける足美しい
蟬に比べ長い一生持て余す

真庭市 福 嶋 智恵子

ともすれば緩む心に鞭を当て
紆余曲折歩いた足よありがとう
人生は謎があるから面白い
春風に音読のせて恙無い
大正の演歌が踊る花見酒

真庭市 国 米 きくゑ

春風に若さ弾ける甲子園
小幅でも自分の足で歩く幸
人生をひたすら走る駄馬の意地
満開の桜雲の洗札が
歳三七八 五人姉妹の温泉旅

美作市 大石 あすなろ

褒め上手みんな味方にして包む
即答はいたしかねます眼鏡拭く
建て前の隅で本音が顔を出す
ひと皮がむけたか違う人になる
世間並み多めでもなしのし袋

美作市 山 本 玉 恵

まぼろしに追いつがるまで戸を叩く
寂しいと思えば狂う琴の弦
美しく生きますなんて言うたのに
生き下手で良かった今が平和なら
言いなりになつてはならぬペンの先

美作市 福 原 悦 子

傷心は海の広さに救われる
人生のパズルが解けぬ日が続く
咲き切った花の命をいとおしむ
煙草をきっぱり断る子に拍手
ほんのりと桜餅にも春の彩

美作市 小 林 妻 子

桜の下でコーラばかりを呑みながら
靖国の桜は賞める戦中派
大型連休父の法要する報せ
紫陽花の末路お互いパンパース
妹の葉桜にまた誘われる

竹原市 石 原 淑 子

残照の中で二人の愛紡ぐ
菜の花のおひたし弾む夫婦箸
緋牡丹の根っこを食べた悪い虫
ヨッコラショかけ声だけが先をゆく
五月雨に感謝感謝と梅実る

竹原市 岩 本 笑 子

もったいなくも一人で歩く竹並木
きれいだねえと桜に言い妻に言い
山陽も歩いた道に山椿
大根おろし五分以内に夫婦帰る
聴く耳を大事にしたいスローライフ

東広島市 福 島 万 年

持つて来た人には吠えぬ家の犬
ワン切りはきつとあの世の兄からだ
孫からの電話だ妻の声弾む
酒一合豆腐一丁飯一膳
終ったね終りましたと選挙戦

宇部市 平田実男

美しい国へ防犯カメラ増え

選挙戦出したい人が見当らず

八勝が目標横綱にはなれず

俺に似よなんて思えるところがない

人災は忘れぬうちにやって来る

美祢市 安平次弘道

梅一輪部屋の空気をなごませる

傍観者になるから妻に叱られる

申告に行けば税吏とウマが合い

たとえばの話が人を馬鹿にする

電子辞書に入れてあるのは童唄

東かがわ市 川崎ひかり

旅行するために足腰まず鍛え

春なのに理由なくおそう孤独感

母逝つて錆びて動かぬ父の貨車

つまり転んで人の奥を知る

寄付金の時だけ便りくる母校

東かがわ市 伊勢八重子

大喧嘩事の起こりは軽い嘘

駅裏はほんのりレトロな匂いする

長い道重荷に耐えた細い腕

飛び切りの地物に出合う道の駅

意地張らず心に余裕貯めておく

東かがわ市 清川玲子

北朝をのがれ命の岸めざす

ほんとうをしゃべれば火の粉飛んでくる

重いとは言えぬ笑顔でする看護

今日の幕引いて袖湯にひたる幸

蘇える思いで飲んだ山の水

東かがわ市 原賢

もうすこし生きてみたくて薬飲む

重い荷を承けてしまった軽はずみ

春風に触れると元氣湧いてくる

最後かも知れぬチャンスに起ち向かう

ひと呼吸おくと言葉の角がとれ

東かがわ市 成重放任

あと五分あと三分と起きやせぬ

重い物かけ声だけのお手伝い

岩肌で磨いた水のまろやかさ

薬にも毒にもならぬ大臣さま

無人駅人の心が生けてある

東かがわ市 神保坊太郎

言の葉の海で晩学溺れ居り

出土したサヌカイトから聞く弥生

見残した夢のカケラにある未練

姉さまの在せば今日は百を越え

気象庁冬と春とを読みちがい

東かがわ市 池内 かおり

銀行を出るとキョロキョロしてしまふ
同居人と思う日もある倦怠期
留守が良いなんて男がかわいそう
もの分かり良すぎるパパを軽く見る
他人様の不幸でわかる有難み

松山市 高橋 宏臣

一呼吸おいた答に裁かれる
指切りの忘れた指を取りに行く
人間の不信を笑う鍵の束
茶碗割る音が届かぬもどかしさ
末席の美学だ背骨まっ直に

松山市 宮尾 みのり

子や孫へ残す愚直なほどの愛
たとう紙の中で形見がただ無言
菌車になれぬ埋め草たと持ち
晴耕雨読の帰農を嗤う草が伸び
そう言えば女言葉が消えはじめ

松山市 古手川 光

さくらさくらひと時日本美しい
世知辛い世を和ませるさくら咲く
山が荒れ川が荒れ心が荒む
ちやぶ台が消え団欒も消えちやつた
握手したその手が語る暮し向き

大洲市 中居 善信

追い風に乗ると駄弁が多すぎる
結婚をしてから気づく勘違い
玉手箱みんな抱えて老いている
一足す一が二にならない米作り
人妻とコンビを組んで二十年

西予市 黒田 茂代

旅行前日掃除洗濯忙しい
女性客ばかりツアーの雑巡り
健やかになります日田の享保雛
つばくらめ来て賑やかな空になる
寂しいなテレビ相手に笑うなど

高知県 小澤 幸泉

湯けむりに若い裸体の見えかくれ
安酒でテレビに映る祭り観る
箱のような庭に老後の夢を植え
生命なり道なり聖書何を説く
空っぱな心に何が入るだろう

高知県 赤川 菊野

薫風さん佐川の桜も咲きました
腹をけるこの子はきつとベツカムに
生きている限り哀しみつきまとう
一人居でハッパかけたたりなだめたり
自家菜園空豆えんどう花盛り

唐津市 久保正剣

八十五歳まだまだ捨てぬ好奇心
スタッフの若さに社運賭けてみる

風の章火の章くぐる靴を履く

余生まだ心に植える花の種子

逆らってみるかセレブの引力に

唐津市 井上勝視

欠点の多きを自覚もがいてる

他人様の欠点ならば見えすぎる

欠点を斜め裏から考える

自惚れを知らず天狗の鼻になる

欠点だらけ規格はずれでいい夫婦

唐津市 山口高明

外出へ防弾チョッキ要る世相

馬面の個性に主役影うすれ

身に覚えなから余計腹が立つ

火の国の火よりも熱い女の血

何気なく吐いた言葉が火矢となり

唐津市 宗水笑

朝市女の色気話に聞く財布

太古から男の因子戦好き

趣味の畑プロから見れば土遊び

不祥事と謝罪にトップ多忙です

お流れの酒は甘露の音で飲み

唐津市 坂本蜂朗

痛む足腰の命が惜しくなる

惜しくない命があつた二度三度

母の森命の水を補給する

時としてお汁粉も好き鼻の下

子供らの子育て甘いじれったい

唐津市 樋口輝夫

ためらつて押したチャイムのかい音

時間だけどっさりあるが金が無い

いろいろと難癖つける外野席

いろいろと選り好みしてまだひとり

貸す方も火傷しそうな火の車

熊本県 高野宵草

もてなしは何も出来ぬが新茶の香

人生の余白に欲が出て困る

わがままな私を責める鉢が枯れ

生と死の哲学を読む白い部屋

カーテンで囲む私の城ベッド

熊本県 岩切康子

隣席は故郷の話まだつづく

天辺の糞虫皆んな空だった

面白い講話になつて目が覚める

花瓶の水換えて気丈な亡父偲ぶ

大利口わたしの歩幅に合わせてる

熊本市 永田 俊子

長寿ありがたく浴びる花吹雪

花かげで花と昭和を語り合う

花椿思い余つて身を投げる

一杯のコーヒーからの会者定離

かみ合わぬ話をほぐす缶ビール

砂川市 大橋 政良

煩惱を切り捨てました向かい風

曇のち雨とはそれもいいだろう

合掌の指が欠けてる石仏

悪役はまだです半端役ばかり

いつも乗るひとをいつもの目で探す

黒石市 佐藤 古拙

舗装道あらぬ方むく地藏様

なめくじが格差とおもうかたつむり

子の継がぬ田圃でそよぐ葦その他

野暮ったい夫を置いて趣味の会

手を抜いてない受刑者の家具を買う

十和田市 阿部 進

残飯を捨てるの見てるのはカラス

憧れた自由を喜寿が持て余し

あんまんも焼き鳥も好き老夫婦

健康でつい忘れてた休肝日

暖冬で除雪車出番ないまんま

平川市 小川 花峯

孤独とはテレビを消した手酌酒

ばらの香に誘われ鼻に棘を刺す

団塊の世代に積もる肩の塵

臨界に達した微熱離れない

満月に愚痴を吐いてる不眠症

弘前市 福士 慕情

またしても笑顔信じて騙される

日曜日あてにされてる運転手

渋滞は鴨が道路を渡るまで

山道で拾った杖を杖にする

傷口が癒えてないのにまた転ぶ

弘前市 今 悠女

北上のサクラ渋滞まねき寄せ

連休へ亭主の車あてにされ

新緑は歳時記のずれ気にもせず

新緑の山はいのちの浴場だ

温泉宝水解かすに來日す

弘前市 宮崎 ヒサ子

被って脱いで気分転換帽子買う

昭和史放映浅間山荘生々し

朝から晴れ春の長閑さガラス拭く

君子蘭今や遅しと咲くを待つ

よれよれの辞書一冊を側におく

弘前市 相馬銀波

弘前市 須郷井蛙

空転の日々を良識から問われ
願望の豊作市場に出る底値
反論の羅列で持論色褪せり
反骨の姿勢踏み絵を試される
売り買いの相場が揺らぐ休耕地

弘前市 櫻庭順風

弘前市 高瀬霜石

藪切るに悪戦苦闘しんといね
切った藪初めて焼いた不安焼く
藪の山焼いても焼いて焼き尽くす
うっかりと藪の飛び火に一思案
誘われて行かねばならぬ絶不調

弘前市 高橋岳水

富山市 島ひかる

それぞれの想いを抱いて見る桜
時流には乗れぬ昭和の生き残り
握られて握りかえして血が通う
天下取る酒なら二合あれば足る
子の肩を叩くわずかな父性愛

弘前市 岡本花匠

川柳250年 朝顔川柳句会

7月8日(日) 東京都台東区生涯学習センター
会費 1500円 宿題と選者(各三句、投句拝辞)

「ああよかった」大川幸太郎・「さあやろう」播本充子・
「がつくり」田島世四・「おお神よ」米島暁子・「いよいよ」
伊藤正紀・「ちよっかい」脇屋川柳 主催 台東川柳人連盟

くたびれ寝さずなの孫を背に帰る
生き下手の汗が畑打つ春うらら
あれこれとマイナスイオン浴び過ぎる
なぞ解けて一人歩き悦に入る
春キャベツ抱いて笑顔の主夫の自負

川柳塔の

川柳讃歌

③〇

木津川

計

定年後釣り場の主になり申し

堀 畑 靖 子

何に辛抱がいるといつて釣り以上の趣味があるうか。当てがあるやらないやら、なかつたとて腹も立てず従容と家路につく、暇がなければ楽しいめい忍耐のいる遊びである。

定年後、ミスターXは毎朝莞爾として釣り場に向かい、その精励故に「主」と奉られ、奥さんの手間を省いて有難がられる稀有の御仁になった。ソウウウ者ニ私モナリタイ。

手本にははされず見本になっている

山 田 葉 子

右のミスターXは定年後の手本である。元手は要らず、原材料費もタダに等しく、昼食の握り飯は自分で握り、居場所定まって変わることはない。さすれば「女釣り今日はどこまで行つたやら」の放蕩とも絶縁、誰に迷惑をかけるでなく、厭がられもせず、苦にもされず、悠々として自適。かかる御仁をして

定年後の手本と言わずして何と称えようか。

だんだんと和食の似合う顔になり

谷 口 義

老いれどなるか、見本のような人物がいる。年相応に好みは変わる。飲み物がそう。牛乳・ジュース・ビール・焼酎・酒、の後は末期の水とコースは決まっている。

ミスターXは洋食党だったのに、やはり日本人のDNAが働いている。和食の似合う顔にもなれば日本酒が好みになるのだ。脱亜入欧の果ては脱欧入亜への先祖返りである。

忘れてはる確か礼する言わはった

古今堂 蕉 子

「礼をする」と言つた以降の組み合わせてある。①「覚えていて」覚えていて②「覚えていて」忘れていて③「忘れていて」忘れていて④「忘れていて」覚えていて。

言われた人の対応である。①「ごきんごさんで」②「ええーっ!」③「——」④「そんなアホな」で蕉子さんは呆れる。という催促もできず。西尾葉川柳のDNAが生きている。

やさしい人のやさしい力には勝てず

山 本 希 久 子

「こころやさしラララ科学の子の鉄腕アトムは十万馬力のジェット力を持っていた。粗にして野だが卑ではない寅さんもやさしく、実に不滅の十五億人もの集客力を

誇るのである。強い力は当り前だが、やさしい人のやさしい力は映画を救い、地球を守り、もしかしたら「川柳塔」をも安泰たらしめているのである。そんなやさしい力をこそ千の風に。

火種なら持つております風よ吹け

山 下 節 子

亭主は女房に頭が上がらない。それは何故か。概して、女房は道德だが亭主は不道德だから、とは以前に述べた。不道德は道德の力に勝てないのだ。それに男は火種を女に持たれている。「燎原の火も一点の火花から」ではないか。すべては火種を与えた男の所為だ。大揺れの吉本である。中田カウスが持つ火種である。弱みを握られたら男も吉本も弱い。新しい朝が来るから生きられる

菊 池 トミエ

「朝はどこからくるかしら」と尋ねた人の賢さは「光の国からくるかしら」の詩的想像に極まり、「いえない希望の家庭から」の陳腐で平板に墮した。

仕方なく生きている老人の中には寝る前に祈る人がいる。「どうぞこのまま目が醒めませんように」。が、朝が来て、また仕方なしの一日が始まる。トミエさんに訪れる朝は光の国からの「新しい」朝だ。今日もお元気で。

〔上方芸能〕誌代表

自選集

阿 萬 萬 的

雑学をべらべら喋りうとまれる
歯にきぬを他人行儀になる答
振り向けば中途半端な僕の過去
要領よく座を外すのも年の功
まあまあ暮し年金ありがとう

板 尾 岳 人

俊平も薫風さんも来ています(時実新子をしのぶ会 5句)
涙雨一千本の白いバラ
煙突の高さ気にせず逝き給え
その節はお世話になってありがとう
有夫恋 新子が死んだ夜はながし

奥 田 みつ子

二度とない今日に乾杯 明日を向く
浮雲に今の我が身を重ねみる
時々はおだてにも乗るシャボン玉
心寒い話思わず月仰ぐ
独りでもロマンチックに生きられる

河 井 庸 佑

難題を聞いて果たした義理ひとつ
器ではないとやんわり断わられ
逆転を期待風船乱舞する
診察券もう要らぬのにまた増える
科学の目届かぬ謎に増す興味

川 上 大 輪

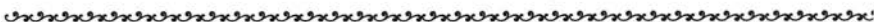
蛇口から魑魅魍魎が溢れ出す
よく切れるナイフで森を食べ尽くす
落とし蓋そうかそういう手があつた
判子がないので信用出来ません
きつちりとメールは返す筆不精

木 村 あきら

碧い空天まで届け竹トンボ
一日一善淋しい心満たされる
街路樹が気嫌損なう排気ガス
細はそと城を守って七十年(92歳)
人間が棲むと緑が消えてゆく

小 島 蘭 幸

てのひらに退職金を乗せてみる
悪戦苦闘とは私の台所
料理の本見ながらぐじゃぐじゃになった
皿洗う皿を一枚割りました
事務局長という肩書きをもつ妻よ



小西雄々

待っていた桜へ稼ぐ小商い
戦った頃の力がいま欲しい
公用で無理して飲んだ酒もある
水無月の膝の痛みは使いすぎ
証拠にはならない虹の橋渡る

小林由多香

民宿の地産地消のおもてなし
お役所の愛想の良さへ恐れ入る
うまいもの食べて寝ていりやいい病
お祭だ花見だ選挙までからみ
職業欄迷わず無しと書けだした

斉藤 磊

葦一本ひっそり野心抱き続け
上を向き歩むでこぼこだとしても
春の門くぐるとふっ切れる迷い
ふっくらといのち奏でている薔
大空へ夢の一字を子と掲げる

塩満 敏

沈丁花貴女の名前出て来ない
暖冬が桜の開花狂わせる
大阪に鶴彬句碑建ちそうだ
金婚の祝いにバラをかうつもり
三代が一つの道を進みます

新家完司

愛想ない顔と態度は女除け
治ったら蟹を食おうと友見舞う
六十五歳の影引き摺って一万歩
光もの付けても影は光らない
無意識に平たい道を選んでいる

玉置重人

見回せば納得します高齢化
グルメから遠いが三度満ち足りる
老いたりとも靴は光らせる
勲章もないのに皺がふえてくる
きつかけを探しあぐねているビール

恒松町紅

人のふり見て納得の自分流
待合室退屈させぬ絵を見上げ
洋食と和食囲んでいる家族
初孫の顔が見たいと披露宴
年のせいだろうかモラル気にかかり

津守柳伸

充電が足りた自信で漕ぐペダル
ITの流れ作業で済む抜歯
雑念を払い空しい午前二時
まだ仕事してます税も払うてます
タミフルを飲んで野となれ山となれ



遠山可住

仁部四郎

テレビ今日も禿げた頭を下げてはる

恐竜が出てやあやあの町づくり

金婚のアルバム繰ればいい夫婦

新年の誓い一つへもう桜

日本中ドドドドドドと桜咲く

都倉求芽

波多野五楽庵

いつまでも笑うてたのは僕ひとり

手加減を忘れ自分で落ちた穴

同じ靴でも冬の道春の道

影長くのびて赤みを帯びる道

追われない日のくることを願つてる

土橋螢

林瑞枝

団塊にからくりがあり落ちこぼれ

天地人真は無言なり仏

ご自由に此処は格差のない世界

恋猫に魔まされ眠れないでいる

正義感一方的に押しまくる

西出楓楽

宮口笛生

言うなればちよつと油気ほしい人

転んだらあかん齢となりにけり

野はみどり孫がもひとり欲しくなる

責任は産ます機械にだってある

句集上梓へ津々浦々のぬくい風

雑音のはずはなかった民の声

騒音の誇りものかは選挙カー

いろいろな音と到着救急車

沢庵を囓む音冥果てました

オルガンの音だよ少しがまんする

はこべらも芹も夕陽も匂う妻

漁り火に夕日がみしり落ちてくる

嬉々として桜吹雪の信号機

忘却の糸をたどれば波の音

托鉢の草鞋が踏んでゆく桜

美容師も褒める黒髪恋を生む

二千年の夢見て塔は風に耐え

姿見の帯におんなの川がある

桜らんまん落語を耳にいい笑顔

穂乃香とは嬉し曾孫は女の子

中国に掃除させたい黄砂降る

休肝日作れと妻がやかましい

おばあちゃんになつても化粧長すぎる

高三で何にもしない出来ない娘

筍がニョキニョキ出てる藪がある



宮西弥生
散るいのち咲くいのちとも朱に燃える

源流の滴山里春にする

夢占い信じて夜行いま発車

封印をゆるめてもとの籍になる

花吹雪満願果す百度石

森下愛論

人情にもろくなつたと年の古い

透明な瓶に入れよう深海魚

青春の断片秘めて惜春歌

タンポポの野を駆け抜ける白い脚

胸の傷レモンが滲む熱帯夜

八十田洞庵

不揃いの茶碗に余韻が残ってる

メーデーをよそに鉄骨天を突く

セザンヌの美女ははにかみ見せてない

ペン先は嵐に向かう芯がある

笑顔の裏に冷えたまなざし見てしまふ

両川洋々

神がくれた命にもある生か死か

四面楚歌の男キャベジン手離せぬ

感性が錆びついたのか句ができぬ

マニユフェストこれが政治のエキスカイ

葬儀料いつでも死ねるほどはでき

第10回 鳥取県川柳文芸大会

日時 7月8日(日) 午前10時開場

場所 新日本海新聞社5階大ホール

(JR鳥取駅南口から徒歩3分)

兼題と選者
「脇 役」 板尾 岳人 選
「巡 る」 大東 豊子 選
「ダ ン ス」 袖本 奏子 選
「 籍 」 両川 洋々 選
「 静 」 武田 帆雀 選
「 井 」 藤原 鬼桜 選
「カ ャ ャ」 石谷美恵子 選
「こっそり」 山松みち子 選

席題なし 出句各題2句まで
当日出句締切 午前11時半
会 費 当日2,000円(軽食・大会誌呈)
欠席投句1,000円(大会誌呈)
表 彰 1句1点方式 総合成績上位10人まで呈賞
(出席者優先…同点の場合上位句のある順)
午後4時頃閉会予定

欠席投句 締切: 7月4日(当日消印有効)
用紙: 自由(事務局により清記)
あて先: 〒680-0074 鳥取市卯垣1丁目1-110 夏目一幹
第10回鳥取県川柳文芸大会実行委員会事務局
主催 鳥取県川柳作家連盟

第2回 松江市川柳大会

日時 8月4日(土) 午前10時30分開場

場所 松江テルサ4F(JR松江駅西側)

兼題と選者

「燃える」 恒松 町紅 選
「おもちゃ」 長谷川博子 選
「 翼 」 高橋久美子 選
「 囁 む 」 竹治ちかし 選
「たっぷり」 小谷美ツ千 選
「傑 作」 牧野 芳光 選
「 音 」 田頭 良子 選

各題2句 出句締切 12時00分

披 講 13時20分

参加費 1,500円(記念品・発表誌呈)

井 当 600円 80個準備(先着希望者)

欠席投句

投句先 〒690-0011

松江市東津田町1203-3 長谷川孝流 宛

投句締切 7月15日厳守

投句料 1,000円(小為替)

主催 松 江 川 柳 会

水煙砂

奥田みつ子選

池田市 上嶋幸雀

天も地もぐるりと春の観覧車
桜咲く口笛吹いてみたくなる
何事があるうと桜咲いて散る
花束にしたくて出来ぬ桜花
来年もきつと逢おうと散る桜
ほんとうは静かに終りたい桜

和歌山市 田中すす

自分史に自問自答が多すぎる
ところどころへ愛ちりばめて夫婦の絵
写経する時間生かされてる時間
坦然と生きて幸せ噛み締める
子ら帰りしばらく耳を休ませる
未熟さを学ぶ私の遠回り

大阪市 森田明子

胎内のポーズで癒えるまで眠る
見る者の心映して桜咲く
花見来て春の愁いを持ち帰る

ざわめきを芯に残して桜散る

マジシャンのようにハラリと若葉出す
春だからちよつと優しい顔になる

大阪市 三浦千津子

箱庭に春がこぼれて花笑う
幸せの形子がいる孫がいる
爽やかな笑顔で結ぶ定年日
悔し涙心を洗う雨である

帯の位置きめて女も負けて居ず
生き方を替えて覚えた変化球

寝屋川市 森田麗

万歩計カチカチ満たす花の道
サクラサク子の人生を変えました
柱の傷と並んで見せる子の笑顔
燃えつきる身とは知りつつ萬若葉
ダイエット失敗でした春の服

岐阜市 平野 あずま

長男に嫁ぎ見えない枷に会う
好きな子が出来て学校好きになる
飛び去った後で気が付く青い鳥
飯炊けた風呂が沸いたと機器の声
私がわたしを許す妥協癖

大阪府 神野 千恵子

時々自分の頭撫でてやる
芽を摘んでいるのは親の虚栄心
ブランチとしゃれてるただの朝寝坊
大福とほうじ茶のある昼下がり
飾り物捨ててあっけらかんと生き

京都市 清水 英旺

うれしいこと大きく太字で日記書く
今年も咲いた老いた桜木褒めてやる
電子音いつもどこでも追ってくる
無器用に生きるしかない明日もまた
サクラチッテ奈落の底のただの人

大洲市 花岡 順子

お喋りの輪が広がっていく波紋
喋らせる酒をついでる呑んでいる
琴線に触れると涙こぼれ出す
引きこもりなど止めました春だもの
伸び盛りらしい竹の子天を突く

奈良県 辻内 げんえい

花嫁の父だ涙は許されよ
義父母への娘の応対が頼もしい
娘は巣立ち残るは俺とお前だけ
送別会嬉し寂しで職を退く
平日ゴルフいつでも行ける素浪人

橿原市 藤永 実千代

何時からか夫婦茶碗が入れ替わる
夫唱婦随そんな時分もありました
閃きを求めせつせと錯落とす
美しい国へ歴史も歪められ
ワーキングプア可哀想では済まされぬ

境港市 遠藤 那珂子

良いマナー教えて娘嫁がせる
フルコース教科書まねてするマナー
ダイエット続くつもりの方歩計
ロマン追う瑞々しさは持っている
満足に気が付かないでいる私

相生市 村木 信子

負け犬になりたくはない意地で吼え
事なかれ主義で修飾してる舌
自己過信ルール外した日の疼き
雑魚の群れ離れられずに老いてゆく
人生に定年はない米を研ぐ

日立市 加藤 権 悟

肅肅と税が弱者の首をしめ
栄転の辞令笑いに耐えている
切り札を抱いて男のうす笑い
信長の末裔と聞き距離をおき
返杯に男の骨を抜く美人

堺市 大久保 伸 子

瘦せるのに一日三度苦勞する
どん底におちても弱さかくして
一言の棘に心を殺される
頭にも柔軟剤があればよい
片思いそれもまたよしロゼワイン

枚方市 二宮 紫 鳳

花吹雪あびて湖岸のハイウェイ
満開の桜にたくす憂さ晴らし
日本中桜 桜で和が集う
娘も嫁ぎ記念樹愛でて花の盃
桜舞う園児の瞳に夢踊る

和歌山県 森 下 よりこ

銀髪が生きた証を奏でている
ちよつとくずれた君が心にひつかかる
正論があとかたもない多数決
団塊退職老人会が若返る
七十年生きた自分を褒めてやる

今治市 塩 路 よしみ

合掌へいつしか心澄んでくる
褒められて素直に受ける花万葉
頭から叱ってくれる人がいる
森林浴外野の騒ぎ忘れさせ
スタートを切る少年の夢無限

八尾市 松 葉 君 江

思い切り笑うと心丸くなる
幼児へおふくろの味叩きこむ
寝たきりへみじんに刻むお漬け物
病院に作ってほしい老人科
老化する脳の隙間を埋める辞書

和歌山市 柏 原 夕 胡

桜散る命のバトンタッチして
売りつけた喧嘩を笑みで躲される
ほんまものの友と本気で喧嘩する
おしどりの喧嘩へ犬が欠伸する
ゆつくりと時を感じて歩いてく

大阪市 中 井 萌

気が付けば母とおんなじ丸い背な
三世代負けるが勝ちに波立たず
似たくないところが似ました苦勞性
人生の今は日暮れか午後の陽か
ころころと笑う妻には逆らえず

吹田市 早 泉 早 人

のんびりと歩きなさいと石だたみ

難民のつぶらな瞳愛を呼び

体調が加齢加齢と慰める

酒煙草非常袋に欠かせない

迷いから目が覚めたのは妻の檄

大阪市 原 田 すみ子

小言より誉める言葉が効いている

全て好きそんな時代もセピア色

母になる娘に願う神の加護

見過ごした溝を侮り溺れてる

結局は自分に甘い人の負け

藤井寺市 津 田 シルク

花だ花だ人科も蝶もランラン

泣かすゾーと部屋まで来たは杉花粉

鬼の顔ってこんなのだらう喧嘩中

老いた身のつかい棒に五七五

たかが風邪と侮り十日床に着く

西脇市 七反田 順 子

夕焼けに今日も一日ありがとう

新入社大海へ船を漕ぎいだす

茶柱に心としますひとときも

新子さん偲んで句集読み返す

北帰行優雅な舞の小白鳥

横浜市 巖 田 かず枝

社会へは塩をきかせて送り出す

別行動共に元気という証拠

迷惑をかけないように医者通い

咲いてよし散つても桜楽しめます

入学を祝う桜とチューリップ

藤井寺市 俣 野 登志子

月のうさを孫に教える日も近い

ハイハイの孫が来るから大掃除

喜怒哀楽激しい孫は誰に似た

交際費堪りません春の乱

車窓からの桜に眼無限大

寝屋川市 岡 本 勲

凍結を解かす力は愛だろう

いたずらっぽく笑う彼女に一目惚れ

スケジュール手帳に詰めて父元氣

命守るための酒だと飲んでいる

相合い傘雨がやんでもさしている

豊中市 神 野 宇乃子

熱燗を両手で包む花見客

花びらをひとひら受けて至福なり

とめどなく花はらはらと闇の中

来年もこれるといいね花のかげ

葉桜の若い命を仰ぎみる

シドニー 森本クックバラ

不眠症脳が残業してゐるらし
頭数国の大事を決めるのは
美しい日本語をも嘆き節
靖国も合祀談合してたのか
子ら巢立ち夫は先立ち独り病む

シドニー 内山 佳代子

日本では読めぬ妃殿下うらばなし
ラーメンは私お箸で彼フオーク
ただいまとシドニー湾に語りかけ
都会の風ビタリ私にまといつく
都会っ子田舎で居場所見失い

シドニー 三谷 たん吉

雨の日は多分開かぬ核の傘
罪のない子に背負わすな古傷を
政治屋よ自分を捨てて子を守れ
怒りの句歯をくいしばり五七五
苛立つが声の届かぬもどかしさ

北九州市 岡田 幸生

懐の辞表が持論枉げず吐く
一枚のはがき気楽な旅をする
年金の暮らしに妻は司令塔
体調を考え迷うパスポート
糟糠の妻が支えた五十年

香南市 桑名 孝雄

終章はいやで総集編にする
心の錦だけで通用せぬおしやれ
程のよい緊張感のある背筋
ストレスを一步手前で止めた酒
落丁もあつて人生しておれる

香南市 百田 幸

エプロンの好きな女と妻を言う
捨てられて尚咲く花をいとおしむ
長寿より無病を願う老いの日々
どん底を生きた女はたくましい
流される笹一枚に似た余生

今治市 渡邊 伊津志

天の気と地の気を巡る呼吸法
何気ないところにあつたこんな幸
さり気ないさわり癒しの核になる
人のために役に立つて生きている
極意などないが愛だけ持ち続け

東かがわ市 赤澤 貞月

バック飯コタツで一人夫は留守
効いてほし効いてくれよと飲む薬
点滴に残りの命かけた夜
難病です何とサラリと言つてのけ
本物の孫の手かわい肩たたき

宇部市 高山清子

間違いを指摘してから四面楚歌

顔色を読んで話を包み込む

晩学へ埃を払う広辞苑

そつが無く話題合わせれ気が疲れ

むずかる孫あやしてママを待つ日暮れ

松江市 松浦登志子

本心をつかれ変った耳の色

本当の鬼を見つけた三面鏡

夢にまであんたはアホや亡母が言う

深夜二時ロックが流れその孤独

しっかりと自分を持って孤立する

松江市 山根邦代

天気図を見ると被災地気にかかる

ふるさととはなんでも葉深呼吸

春の野は元氣もらえろ野草摘み

雑草に負けてなるかと深呼吸

農業の手伝い氣まま古希の坂

松江市 柏井日出子

陽炎に亡き父母が笑む吟行寺

折り紙で夢を生んでるファンタジー

人を刺す句は詠まないとペンもい

感性を育む松江美しい

未知の友いつしか好きになるご縁

出雲市 荒木英子

春告げて不思議な魅力桜花

独り居は趣味と同居で生かされる

春うらら開放されて千の風

独り居に長生きしたい旅プラン

余生には娘と歩き春を呼ぶ

出雲市 川島和歌子

肩書が取れて気軽に興味に生き

口閉じて反抗らしいすねている

何気ない私の仕草母に似る

腹の底透けているから頼めない

そわそわと五分が長い待ち合せ

雲南市 武島ちよえ

花の春前後左右も隙だらけ

目に見えぬ種もいつかは花咲かす

のびのびと蔓は明るい方へ向き

お互いに励まし合って同い歳

身を削り生きたエンピツ悔いはなし

雲南市 菅田かつ子

かわゆくて抱けば火のつく人見知り

ママの夢詰めてしんどいランドセル

みそ汁の匂いに朝が動き出す

お願いをされてばあちゃん嬉しがり

楽しみがあつてゐるん踏むベタル

鳥取市 山口 千代子

鳥取県 橋谷 静江

短命を惜しまれ散つてゆく桜
老木も命の限り花咲かす

同じ酒飲み愉快な人と絡む人

青空と洗濯物が笑み交わす

何気ない顔でジュラシー胸に秘め

鳥取市 山岡 紀子

息抜きが上手な姑になりました

人間も熊も困った温暖化

畳の目数えて経を聞いている

誕生日忘れてしまふ六十五

下心あつてサーピスしています

倉吉市 酒井 美美子

静寂の森から生氣もらつて

ストレスを森林浴で癒される

理屈では夫に負けても実で勝つ

人生は理屈通りに生きられぬ

意地を張り雲行き悪くなるばかり

米子市 猪森 スミエ

童謡を歌い孫との仕舞風呂

ほろ酔いの父はおはこの木挽唄

白梅が散つてロマンの影ほうし

新入生親の手離れ手をつなく

投げ入れの花それなりの指定席

咲く花へ心浮かれて旅へ出る

咲き誇るさくらへ春を満喫し

妥協することが大切定年後

ご近所へ顔をだすのも定年後

大学の下宿暮しで一人減る

鳥取県 岩崎 和子

階段を踏み外しての我が災難

負けられぬカートにすぎりお買物

立つ座る着替えの痛さじんと来る

今夜はね登別の湯いやされる

天国の我が家の風呂で湯治中

和歌山市 堀 富美子

一本の電話がさせた不整脈

独り居に花も燕も住む和み

心までピンクにさせて酔う桜

薔薇よりも主役と思うかすみ草

一周忌ほっとしている夫の墓

和歌山市 たむら あきこ

目と口を肥やす浪費がとまらない

あの世この世は曇りガラスの裏表

考えるポーズは何時もとつて

国境を言うから星が狭くなる

宇宙から見ると国境線はない

和歌山市 土屋 起世子

列島を注目させた都知事選

CDが慰めていた花疲れ

天に伸びる竹の子食べてまだ老いぬ

コーヒカップうれしい愚痴をもらす午後

うちのババ近所の人はみな褒める

岩出市 村中 悦男

盛りつけの妙 一箸をちゅうちよする

笑顔して気配り妻がいて生きる

熱血先生子等といっしょに夢を織る

忘れよう つとめるほどに思い出す

気がかりをあふれる風呂の湯に流す

海南市 小谷 小雪

春日より囁りひとつ添付して

病得て母はしつかり歩き出す

にんげんの哀しみ縣す阿修羅像

生半可な言葉発して増すにが味

通帳とにらめっこする負けそうだ

紀の川市 宇野 幹子

相性を無理に合わせてよく転ぶ

ソプラノで若さ誇示するハイヒール

赴任地で男を濡らす子の便り

バラバラとニートの背骨くずれ出す

ライバルを鬼籍へ送る花吹雪

紀の川市 辻内 次根

その時がやがて私にくる さくら

少しずつ溜まる小言の休火山

正解がでない寿命がまだ延びる

策尽きて攻撃的になつてゐる

すみませんごめんなさいで通り抜け

田辺市 大峠 可動

花便り続く春愁花粉症

天命を持つて病臥の背負投げ

理想空転其の後神経過敏症

いのち残照ふつと故郷が浮かぶ

海よ挽歌よふるさとは日本海

奈良市 乾 春雄

嘘ついて寄り道してた青春譜

別れ際握手をせかす発車ベル

鍵盤の校歌に遠い絵がよぎる

挟まれた葉が古書の吐息聞く

逆縁の悲しみベットに癒される

奈良市 矢野 良一

ケータイのなぜかときめく初メール

切なさど温もり胸に故郷をたつ

一番は友と酌み合う屋台酒

宣誓の熱い言葉に涙する

家々が花競い合う春の庭

奈良市 岡 文 香

三田市 阪 本 藤 朗

は何を取りに来たのか立ちどまる

真剣にやっているのにどこか抜け

突然の雨が二人のキューピッド

忙しいと文句言ってるうちが花

夫婦茶碗投げてやりたい時がある

生駒市 小 西 稔

春の野で自然に学ぶ生きる知恵

孫達とパソコンゲーム知恵くらべ

知恵欲しい文殊に祈る親子づれ

災害を防ぐ心を子に教え

ランドセルうれしい季節桜咲く

尼崎市 河 津 正 治

ジェラシーがからみ内緒が暴かれる

妹の婚儀に姉が落ち着かず

千の風受けて筒親を越え

控え目な仕種でたたむ舞扇

温暖化神の怒りの請求書

篠山市 谷 田 多 美 子

釣りあげた彼女の夢が大きすぎ

春風にのせ夫婦湯呑みをおくられる

いろいろの話題はみ出す週刊誌

桜散る風とお遊び地藏さま

お茶飲み会冥途の話で盛りあがる

白鳥は遠くに見えて美しい

環境の汚染語るか水鳥ら

古も黄砂が降るや臘月

ほどほどのつもりでいても花見酒

人さまを見飽きたサクラ散り急ぐ

三田市 白 井 二 英

鈍感で知らぬが仏幸いし

司馬さんの怒りが分かる荒んだ世

一つでも捏造あればみな怪し

学校の近くに住んで気をもらう

本音聞くためにこちらも胸ひらく

西宮市 藤 本 直

この一本足して人生あみだくじ

お互いに許せる巾が広がった

後悔はしないが頑固やや自戒

衣かつぎ初夏喉元をすべり落ち

試されて開けてみせたい胸のうち

西宮市 石 野 照 代

えんどうのさやからポロリ初夏の色

クラス会昔の私が走り出す

食器棚夏の器に入れ替る

けんかしてせまい家なかはしとはし

タンゴ聞き切りぬき整理雨の午後

大阪市 尾崎 黄紅

老妻病んで六十年の恩返し
顔よりも肚を選んだおかげです
軍服の写真お守り袋です
故郷が古里になり亡父母になり
芸ひとつなくて老人会の隅

大阪市 寺井 弘子

指切りを信じた青いレモンの日
プライドが邪魔して弾むプレゼント
掃除機に追い立てられてする散歩
団塊の世代マスコミ煽り立て
生き過ぎてだんだん重くなる命

大阪市 平嶋 美智子

青空は万の微笑をふり注ぐ
青空に心の奥を見透かされ
青空は時に大鈍振りかざす
トントんと打てばカラカラ鳴る頭
スマートな祝辞はんまの拍手わく

大阪市 岩崎 玲子

子が帰る知らせで急にメニュー増え
鍋釜が今日も味方で腕が鳴る
子の帰省手作りならべ母の幸
キッチンはいつも話の花が咲く
明日あしたとお掃除あとの換気扇

大阪市 伏見 雅明

一年の期待を込めてロゼを抜く
清水の舞台飛び下りまだ迷う
順風に紛れ慢心忍び寄る
不器用にわが生き方を押し通す
正論に有無を言わせぬ多数決

池田市 多田 契子

負け組と言われ格差の烙印を
なごやかに精進落し或る覚悟
新物の筍店に得意顔
びつたりの天気予報の雨はよし
ナツメロが思い出話つれてくる

泉佐野市 稲葉 洋

春眠を五分刻みにして起床
薫風のこれも故人か千の風
定めなき世で桜にも夜半の風
思い出はときに未練を呼び戻す
母さんを独占出来た傘一つ

泉佐野市 備後 三代子

かばわれてゆるりおもむく花月夜
朝まだき社のさくらひとり占め
あれやこれ昔ひととく宵ざくら
追憶を風に託した花吹雪
生きること死ぬこと描く花吹雪

岸和田市 中岡香代

エースにはエースの苦勞付き纏う

そっくりの電話の聲は父と兄

体当たりしてもへいちゃら父の胸

日当たりへ私と猫のひなたぼこ

理想像なくて虚ろの少年期

岸和田市 坂口英雄

目と鼻が春になったと花粉症

老いという言葉は無用趣味仲間

以心伝心言葉はいらん老い二人

イージス艦税金だから買う兵器

プロ野球海の向こうも気にかかる

堺市 羽田野洋介

道草する姿見えない通学路

いつの世も突出すると憎まれる

ええ歳してなんて今さら言われても

探してたキイが出てきた衣替え

喜ばしいニュースは小さく隅っこに

堺市 荻野像山

口重い夫に負けた四月馬鹿

せっかちの転ぶ姿はダイビング

難儀して飾ってさっさ仕舞う雛

桜見る人の無心な鼻の穴

いい人に出会おうと背中しゃんとする

吹田市 二宮栄子

大連れて公園デビュー花の下

とんちんかんが集うてはしゃぐ花の下

満面の笑みがこぼれるランドセル

船旅に童にもどる波しぶき

おままごとおしゃまなママがパパ叱る

吹田市 藏田光子

安全な明日を信じて船に乗る

霧囲気の全てをのんで目をつむる

立ち仕事足の負担をかばいつつ

挨拶がちよっと長びく立ち話

私の夢かなえて欲しい子へバトン

高槻市 笠原乃りこ

カンパイ世迷い言の花の下

人のために使うこの世の持ち時間

定年後見栄と面子を捨てて楽

千の風が纏わり付いて監視する

陶芸へ不器用な指夢を捏ね

高槻市 安田忠子

うっかりとはまってしまう落し穴

穴うめるバズルで脳の活性化

針の穴上手に通す老いた母

春一番約束反古にしてしまう

日本いま桜をめぐる平和あり

豊中市 谷川 勇治

花吹雪浴びて春愁深くなる
言い勝って舌に残った苦い味
虹の橋渡ればそこが未来です
関東煮どの具も生かす汁の芸
小さい手飴玉一つくれました

豊中市 荒巻 夢

生きる意味知らないけれど命燃え
憎いのも深い縁と知りました
人生は長距離走だまだ負けぬ
星明かり幾光年を今見てる
風吹けば散りゆくままに桜花

豊中市 松尾 美智代

花見行くやつぱり桜さびしいな
リビングから見える桜にありがとう
映画見てこんな世界もあるんだな
脱皮して世間の風が身に沁みる
朝一番コトコトコトは母の音

寝屋川市 北田 ただよし

コンパスをやめてまんまる描いてみる
下り坂左右の振子を締め直す
五億年安らぐことのないゲノム
正義とや常に犠牲の無辜の民
拙速な水かけ論にある怯懦

羽曳野市 森下一知

ぬるま湯に浸かる鱗の型崩れ
でこぼこの道に鍛えた土踏まず
亡父の影酒の臭いが離れない
女房のストレスが咲く植木鉢
店じまいセール擬態を繰り返す

羽曳野市 永田 章司

ペコちゃんの再出発に重いつけ
老夫婦会話はいらぬツートカー
行った気になって楽しむ地図旅行
孫の守り楽しむはずが疲れはて
能登が揺れ安全地帯無きを知る

羽曳野市 吉村 久仁雄

道迷うばかりで墓地はまだ遠い
諦めてみると世の面白い
回る寿司ならばまとまる三世代
言い訳の長さに嘘を見抜かれる
長生きへ出世払いはずせにおく

枚方市 小林 わこ

桜満開夢を見ました初デート
祝い日がまた一つ増え小豆煮る
小筆持つほんの一字添えたくて
幸せになる切符を持って駅に立つ
生きてゆく縮図呑みこむターミナル

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

春がすみ上着片手にさくら路
旅立ちをさくらの送る無人駅
贅沢もしないで母は傘になり
人生は戻れないから前を向く
原爆を受けた証を語り告ぐ

箕面市 寺 井 柳 童

釘煮煮る主役は夫お隣りも
雨上がる今朝は黄砂か花曇り
ちびっ子の騒ぐ声ききほつとする
大臣の資質に格差主義主張
終電車煮込みうどんが待つ我が家

八尾市 脇 俊 子

人恋し埋めても逃げる孤独感
善悪を拡大鏡で見る勇氣
咳払い存在価値をインプット
合格の声を待つ春の風
ひと呼吸吞むと怒りが溶けていく

八尾市 赤 木 妙 子

食べる人いて組板のはずむ音
スプーン一杯添える笑顔のかくし味
隠すから嘘が真実になる怖さ
蹴りたい時に小石どこにも見当らぬ
八起きめはすべてを許す一里塚

八尾市 田 邊 浩 三

定年後庭の半分菜園へ
味噌汁の分葱を摘みにベランダへ
あと一本明日を約束するパワー
唇がお迎えにゆく父の酒
黙黙とジグソーパズル惚け防止

八尾市 寺 川 はじむ

さりげなく張って効き目の予防線
攻めこそが防衛と今日も老いにムチ
笑い過ぎかな門になかなかこない福
流行へ世辞を並べる試着室
浮き沈みしながらチャンス待つトンボ

八尾市 前 田 紀 雄

不祥事より花の開花を待ってます
開幕の裏金詫びる始球式
臨界に怒りと不安限界に
花満開税は雷のままで良い
ピカピカの夢一杯のランドセル

八尾市 西 川 義 明

初孫を抱く懐の温かさ
オイとしか呼ばぬ夫だが思いやり
こみ入った話熱燗冷めたまま
風邪気味で想うは母の玉子酒
正論のパワーに山が動き出す

八尾市 中島春江

追いついてみてもつまらぬ散歩道

百均と御座候よ年金は

平凡に生きて八十路の茶が旨い
なるほどね親の躰がよくわかり
愛犬の目も口ほどにものを言い

大阪府 高木道子

美しい国へ無粋な黄砂舞う

春なのにマスク美人が群れて出る
一途さに周り見えないちぎれ雲
黄砂故春のポエムが弾まない
百均でこんなに買える物がある

京都市 西村益子

親の子や今で十分ありがとう
アバウトなスローライフに向い風
仏壇に吉報告げるリン弾む
愚痴吐ける友と一緒に登山靴
三角点にきのうの喧嘩置き下山

尾張旭市 三浦きぬ

福招くにはちと足りぬ徳の数
シンブルに老後を暮らす筈は夢
よくもまあ要領悪いまま生きて
奥の手を出すタイミングまた逃す
亡父の名呼べば少うし若返る

北名古屋 片岡文男

ユニホーム着ると歩幅が広くなり
年金を所得といつて税を掛け

歩道橋渡って膝に調子聞く
はくの夢進化したのか軽くなる
ピツと鳴り家中探す赤ランプ

浜松市 中田尚

肩書きに独り芝居の絵がさむい
負けん気がまず走り出す交差点
地下道を出ればいつしか異邦人
校門をくぐると未知の広い海
野の花の風読みすぎて不仕合わせ

佐渡市 高野不二

口ごもる電話の孫の声がわり
いい事は何もなかった合併後
当選後さわいだほどによくならず
金を買え油を買えと来る電話
花は早く咲いても給料日は来ない

横浜市 中尾哲代

口だけは息災ですと便りする
買わないと損だと思ふセール品
子育てを忘れた頃に孫の世話
逆風に耐えるシングルママの意地
高ければ旨いと思うメニュー表

横浜市 金森 徳三

草加市 飯土井 健夫

異常気象二月三月入れ変わる

大リーグ観にアメリカへ行く格差

上海のくしゃみ咳き込む兜町

すべり止め入学金が惜しくなり

便利さを熟せず老いの箍ゆるむ

東京都 井上 つよし

褒められた事は大きく書く日記

旧悪を肴に宴盛り上がり

軽い嘘独り歩きで尾ひれつき

見えみえの悲しい嘘に乗ってやり

駆け込んだ大樹の下も雨が漏り

昭島市 野口 忠

おふくろに逢いたくなつて豆腐買う

遺産など喧嘩の種は蒔かぬ父

ジーンズを繕い親はむくれられ

曇りのち晴れて木漏れ日仲直り

宝物やはり貴方と言われたい

立川市 柏野 遊花

フリーズドライに鮮度があるとコマーシャル

どの今も大事鮮度をフリーズに

愛と哀同居している胸の襞

裏返すと優しい味になることは

スローライフに嵌っています味に彩

明治には日本人だという誇り

百までを生きる決意の自己管理

九十七歩く姿は千鳥足

汗かいたお蔭年金当てにせず

やる気さえあれば活気はついて来る

取手市 葛西 清

ひねくれて針目通らぬ糸がいる

鉛筆をくわえて思案迷い出す

お小言の前にトイレに入つとく

力ない父のお叱り気にかかる

盆栽が泣き出しているハサミ下手

札幌市 三浦 強一

ループタイきらりと老春の門出

文化とはこれかテレビの馬鹿騒ぎ

産む機械だったか五男五女の母

投げられた球はともかく受けてみる

縄のれん一期一会が盛り上がり

札幌市 小沢 淳

ハッスルし口が滑った生む機械

仕合せが次々来ると恐くなる

初一念努力を運は裏切らず

親子でも越すに越せない川がある

もう止めた何度も聞いた捨て台詞

河内長野市 木太久 正一

四十年庭の青葉に癒される
愛犬が吠えて散歩をせがんでる
犬飼ってカレンダーみな犬の絵に
桜散るまた一年を一步ずつ

米子市 小塩 智加恵

明るさがそれぞれ違う三姉妹
鯛サヨリ日本海より春の幸
犬猫もマナー学んで売られてる
朝掘りの筍糠と届けられ

富田林市 古田 千華

叱られても安心したか児は睡り
ふた親を保育の児より羨けたい
道端に咲く雑草にある規律
はかなげなコスモス芯はたくましい

府中市 藤岡 ヒデコ

社会人一年生はくいしばる
新年度脱皮の孫に追い風を
今年またさくらの頃をのうのと
出世払いとても便利なニッポン語

宝塚市 河津 寅次郎

失恋の受け皿今も横にいる
両親の悪いところでも元氣
漢字文化に横文字好きのお節介
暇だから役務で納付したい税

門真市 矢阪英雄

機械から流れる汗は人の倍
汗流し団塊世代揃い踏み
定年の記念時計は胎内
お互いに心破らず手でぬくめ

奈良市 尾畑 なを江

自己流の家事でなんとかやって来た
過去問えばいつそ二十歳に戻りたい
葉が繁り花の盛りはすぐ忘れ
なめらかな話の流れ虚と実と

府中市 馬場 利子

もつれ糸解けたらほっと胸の音
たとえばの話が空気を薄くする
生き恥をケラケラ笑う影法師
ガムを噛み痛む歯の位置たしかめる

尼崎市 桑原 東園

寝静まる街駆け抜ける救急車
お淑やか和服姿で待つ車
老ゆるとも胸には今も育つ夢
雛祭り唄のリズムに歩も弾む

栃木市 岡野 すみれ

心配が消えて一度に来た眠氣
ライバルの視線冷たく突刺さり
地味であれ真面目であれと蟻の訓
御先祖の御霊に合わす小さな手

加東市 黒崎 美紗子

ドッコイショ気合で頼む膝小僧
春つれて来たが黄砂は嫌われる
店内の客にも流行あるらしい
紙風船昔はあつた置き薬

尾道市 木曾 一徳

野を焼いて母は火消しの水を持ち
春耕し坤に命を呼び起こす
春田打ち棚田は鎌を待ちいたり
種袋振って音色を聞きわけ

宝塚市 丸山 孔一

店仕舞い言いつつセール長過ぎる
新緑の燃える若さに身を委ね
時の風吹いても消せぬ胸の火は
大丈夫まだ踏ん張れる力ある

大阪府 若月 祐作

嘘八百詰めた袋がもれ出した
内閣に御意見番が見当らぬ
古希迎えときめき覚え背を伸ばす
初恋の人を探してどないする

三木市 広瀬 房江

季は巡り宿根草が目を醒ます
ふくよかなお尻に敷かれいる平和
首たてに振って世話役忙しい
シンビジューム咲かせ玄関夢の園

安来市 原 煩惱児

その昔語り続ける祖父の背な
快方に向かえば欲が湧いて来る
ほっとして歩む故郷の並木道
平和だな丸い遊びの輪の中に

和歌山市 根田 よしこ

化粧する老母はきちんと生きて
むかしから菓子よりオマケ人気ある
辛い時青い空見て野良しごと
桜散るまた来年のゆめ包み

松江市 相見 柳歩

君に合うガラスの靴を探します
恋愛の方程式は解きにくい
ゆるい球君にヒットをプレゼン
前世でも海を見ていた君と僕

大阪府 田浦 實

花吹雪必死に生きる艶姿
春爛漫若い緑にタッチする
毎日が連休これは修行です
社寺巡る見えぬ力が背中押す

枚方市 小川 良吉

穴掘って埋めたい過去数知れず
穴ぼこも無い道補修年度末
思春期に穴があくほど観たシネマ
高金利甘いエサ食い墓穴掘る

唐津市 岩崎 實

具象より抽象半ばの絵を好む
さらけ出し互いにむつむ出合いの場
こだわって後はすんなりまだいかず
さっぱりといかぬ繰り言重ねおり

高知県 いの 静 草

ストレスも掬いようではない仲間
正義感捨てたら余計胃に悪い
大きくはなれない孫を抱く財布
学ぶよりお返しせねばならぬ時期

府中市 岩本 雅代

桜咲き春陽が誘う舟の旅
春フアッション可愛子猫もワンチャンも
バラ祭り心のケアー眼の保養
絵手紙の上手な友に癒される

雲南市 福岡 博利

丹田を鍛えに行こう歯科の椅子
立ち話腰をおろして待つとする
長生きは不義理で通すことにする
パンザイを知らない人がやりたがる

鳥取市 谷岡 清子

春が来たと歌って一人雛を抱く
しあわせと太陽眺む寝たきりが
桜餅ほぼる夫はにんまりと
なにもかも許して楽な日々暮らす

鳥取市 近藤 秋星

最高の花見千本桜かな
老人ホームの花見はいつも団子無い
千本桜から臨む湖山池が霞み
葉桜になるのは早い恋に似て

倉吉市 前田 喜美子

八十路来ていまだ川柳山のほり
生か死か祈る集中治療室
三回忌五人姉妹の里がえり
法螺吹きの話半分軽く聞く

境港市 遠藤 トミ子

八十路こえ赤信号に目をみはる
庭の赤い実皆待つてる鳥たちよ
五羽もいるつばめの子らは大口だ
鳥かえる旅の話をききたいな

境港市 中井 虎尾

税務署で数字の弱さ証明す
つまづいた石にごめんとお人好し
雨あがり石のくぼみに春の空
ボーとした仲間が増える春が好き

鳥取県 岡村 孝明

トップ達ゆるめば裾野あくびする
子ら育ち我が家もやっと夜が明ける
クラス会ふる里唄い出る涙
人知れぬ奉仕に天が恵みくれ

鳥取県 岡 本 幸 枝

かけらから歴史をたどる考古学
彼に出す手紙かく手が震えた日
満一歳餅背負わせて神棚へ
母さんのマナー受け継ぎ今日嫁ぐ

鳥取県 飯 野 菖 子

ざりざりに生きていますよ幸せに
新人の胸に吹く風春の風
満足は家族の無事で終る日々
人生の終着駅は百歳だ

鳥取県 北 村 稔

日本国毎日どこかわびする
学問は就職のためではないよ
携帯の運転事故に情はない
無口でも金婚式が来ましたね

和歌山市 坂 部 かずみ

プランターも色とりどりの花の宴
筍に掘り起こされた母の味
騒がしい世を離れても歯は痛む
肝心な所で霞むボールペン

和歌山市 山 田 侃 太

パソコンで作る名刺が軽すぎる
一品をつけて弾んでくる会話
思春期の息子不機嫌すぎないか
反省会ジョークが滑る日の重さ

紀の川市 木 村 徑 子

喝采の舞台夢みるデザイン画
びったりのデザイン正札が不満
縦野のはがきの好きな蛙の子
宙と海夢ふくらます双子ちゃん

奈良市 阿 部 茶 々

世界中身振り手振りで通じ合い
桜島時に私も噴火する
はんなりと薄墨桜理想なり
やれ嬉し無事に今年も桜見て

神戸市 武 田 恵 美 子

いにしえの水着をきたが足止り
三代目ルックスかわり美女美男
これ以上ちぢみたくない朝の伸び
人生もたそがれになり気がせわし

尼崎市 小 池 幸 子

振り返り恥ずる事のみ多い過去
垣根越し隣の花の美しさ
巣立つ子を見送る母の苦労性
喜んでばかりいられぬ長寿国

尼崎市 加 川 靖 真

雁渡るベースメーカー先頭に
田の蛙空と水とを両睨み
みおつくし知らぬ世代が通う店
コンビニの灯り若者さそう顔

加東市 岩 本 美緒子

友と旅誘いさそわれ楽しんで
いいお湯に酔うて蹟く老い哀し
集中のひと輪牡丹の画
春爛漫余白の画帖持つて行く

篠山市 永 井 かほる

いろいろなやんだあげく独りもの
案内をうけてぬくもりクラス会
五人会食べて笑つてふき出した
奥二本入れ歯忘れて舌をかむ

三田市 上 垣 キヨミ

満開の桜に妬ける雨と風
心配が安心になり泣き笑い
満面の笑顔が帰るランドセル
布団干す母のにおいと温もりが

大阪市 平 井 露 芳

保険証見せて何う月初め
ウォーキングブアと言うのもありまっせ
美味しいとテレビ言うけど美味しいの
母の日におふくろさんが歌えない

大阪市 吉 川 弘 泰

顔ほども化粧をしない肌の艶
教えてる漢字の意味に教えられ
転勤の通知で友となごり酒
背に若葉弁当開く滝の音

大阪市 吉 田 富 美

さくらんぼかえらぬ昔童歌
病む足をかばう日数に梅雨が来る
消しゴムで消せない過去は忘れよう
句会には亡夫の時計が一緒です

大阪市 吉 内 福 世

曾孫で家族が元氣春満ちる
咲く花も自然に捨てず先おくり
ふと掛けた電話よろこぶ友の声
息子きて囲む膳には酒弾む

大阪市 澤 田 定 子

光る物羽織れば犬も嬉しそう
マジシャンの手の内見せぬ裏の技
いつとなく味覚似てくる老い二人
花一杯道筋通り帰路につく

大阪市 太 田 としお

戌歳の妻は匂いを逃がさない
妻よりもDNAを信じてる
神童ともてはやされた五歳まで
お隣の人もヴィトンで氣を害す

泉大津市 助 川 和 美

桜咲く笑顔こぼれる子等来たり
箸置きを添えて茶漬けもご馳走に
ワイドショーおかずにひとり昼ごはん
子を守る横断歩道かわい手

茨木市 島田 誠一

習練の汗は再起を裏切らず
活け造り目線が会うて鈍る箸
不人氣に鈍感力の防護壁
踏まれても反骨の旗また立てる

河内長野市 黒岩 靖博

黒猫のタンゴで踊る老夫婦
昨日まで泣いていた娘がハネムーン
リビングの特別席は猫がしめ
真実は雑音の中ただ一つ

河内長野市 宮守 正博

百均で当座のものはみな揃う
びんびんと生きてころりと逝きたいな
芋と麦昔は食った今は飲む
吹けばとぶ年金だけがたよりです

河内長野市 内海 綾乃

白菜やキャベツ泣いてる温暖化
桜の下でオニギリいい食べたいな
春日和夫と二人で土筆つむ
社長は頭を下げる役目かな

岸和田市 多田 郁子

幼子の手を引くはずが手を引かれ
幼子に戻れと魔法かけたいな
川の字がくずれて来たよ子の成長
同年年デスマスいらぬ気楽やね

岸和田市 米富 淳風

明るさに幸せだつて寄つてくる
姿見の私に私ギョツとする
そよ風に花になりたい時もある
片言にお国訛りが愛らしい

岸和田市 原 みつよし

妻と見た桜を一人眺めてる
宝くじ占いさんが何故買わぬ
裏金はもうありません表むき
納豆もいつの間にやら忘れてる

高槻市 植地 勇

笑うより泣きたい時が多く有り
もういやと歩いてくれず笑う膝
ちらちらに花見の気持ち待ちきれず
タバコ吸い我が家からも追い出され

豊中市 源田 啓生

七人の敵に備えて漫画読む
春愁を払い落した桜散る
木の舟か泥の舟かは乗るまでは
いかなごの釘が小さい瀬戸の海

羽曳野市 松本 静子

不揃いの野菜で作る夕餉かな
孫達の姿形で自我を見る
ひたひたと何か心にしみてくる
古里の鮎泳ぐ川恋しいな

羽曳野市 仲谷 真一

あの人がいるだけなのに座がなごむ

円山の弁当の上桜散る

知恩院でつかい鐘に驚いた

地獄耳内緒話もできません

東大阪市 佐藤 美はる

ひとひらを盃に浮べて宵一人

思いきり泣いて笑っている夕日

国訛りとうに忘れてまちの貌

萩焼きの白にうつろう午後の翳

枚方市 坂本 ミヨノ

リハビリを一步一步と膝守り

カラオケで顔触れ揃う守る椅子

蛇の目傘珍らし覗く若き人

禁酒です梅酒ならばと妻やさし

藤井寺市 吉田 喜代子

キャンパスにシルバー集う新学期

青い空雲も桜とする会話

ダンディーも介護やさしい街の中

何人にも後援会に入る義理

箕面市 広島 巴子

お花見のお誘い全てお受けする

歯痛には老若男女区別なく

ダイエット歯医者通いでできました

山の辺の土筆古代のロマン味

八尾市 笹倉 ひろし

辛抱が染いた嫁と義母の仲

み仏の慈悲に包まれ今がある

銀髪が素敵に似合う中之島

颯爽と走ってみたい補助タイヤ

八尾市 田中 トシエ

コーヒ党朝のリズムを整える

身内でも知らない過去を知る他人

便利さに慣れて不便がまた増える

ほっとする話にみんな飢えている

大阪府 畑中 節子

嫁ぐ日の嬉し涙は世界一

出合わない友が気になる散歩道

雨降れば畑忘れて指を折り

春のプヨ油断の腕や畑仕事

大阪府 西川 冷子

石燈籠引き立て役に花植える

誕生日気遣いだけを要求す

老いたれど我が勘生きる正念場

花ゴザに座ればまたも花が咲く

大阪府 小栢 こずえ

出来の良い隣の畑見本です

散る花が涙に見える花が散る

疲れたが遊んだ後は黙っとく

孫捨てた小物拾って使うくせ

藤沢市 加藤 スズコ

手を借りて歩む喜び大地踏む
八十路越えまさかのさかの車椅子
おしめりで桜安堵の車椅子
老いて春愛の絆の中にいる

(前月分)

草加市 飯土井 健夫

汗が好き努力重ねて老いたのし
努力して耐えて汗には光るもの
授かった妻を守って五十年
雑学と努力を積んで社のトップ
信念で歩く明治の顔の艶

鳥取市 近藤 秋星

菜の花の天婦羅春を食べました
これ春よ何回冬に逆戻り
暖冬のままで終えぬ冬の意地
携帯を持たなくなつて死にはせぬ

日時 6月26日(火) 13時

場所 銀座区民館(地下鉄東銀座③出口)

宿題 「おまけ」「タイミンク」「どうせ」

各題2句「自由吟」一句

欠席投句

6月23日必着 播本充子宛

〒193 0832 八王子市散田町2-31-3

温故知新

大阪市 北川 春巢

妻は酒医者は煙草をやめという
お酒でも出せと病人気をつかい

岡山県 大森風來子

十代で嫁いだ母で苦勞性
十代に占領された焼鳥屋

大阪市 麻生 梨里

都会の哀愁階上喫茶もたそがれる
光るものつけそれが女の総てとは

大阪市 西森 花村

巻物のように秋刀魚を猫くわえ
はだか一貫ぬすつと猫はたくましく

堺市 八木摩太郎

水にさえ金がかかるかと里の母
音沙汰も無きシベリアへ踏むミシン

「川柳雑誌」麻生路郎主宰
三三〇号(昭和二十九年一月号)

みぞの塔柳川
6月句会

第22回 国民文化祭・とくしま2007

～ 渦 藍 踊り 文化ふれあう阿波の里 ～

応募受付 平成19年4月1日(日)～6月30日(土)

(当日消印有効)

作品 未発表作品 一人各題二句

応募料 一人千円

●但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方、及び小・中・高校生は無料

応募先 〒770-8571 徳島市幸町2-5

徳島市文化振興課内

第22回国民文化祭 文化祭「川柳」係

郵便振込口座 01690-5-93369

加入者名 第22回国民文化祭徳島市実行委員会

応募方法

●所定の応募用紙に必要事項を記入

●郵便振替払込受領証又はその写しを添えて応募してください。

(事前投句の部)

(高校生・一般の部)

「未来」長谷川酔月

「眉」久崎 田甫

(小・中学生の部)

「未来」赤井 花城

「自由吟」堀井 勉

「渦」板尾 岳人

「やすらぎ」荻原美和子

「たぬき」駒木 一枝

大会日時 平成19年10月28日(日) 10時30分～16時
会場 徳島県教育会館大ホール

(当日投句の部) (未発表作品 一人各題二句)

「遍路」平田 朝子 「徳」進藤すぎの

「わくわく」島田 駱舟

第二次選者

磯野いさむ 今川 乱魚 定本 広文

西出 楓楽 山倉 洋子

賞 (予定)

文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞

徳島県知事賞 他

発表

入選作品は作品集として刊行し、応募者全員に無料配布します。(小・中・高校生は入選者)

問い合わせ先と募集要項依頼先

〒770-8571 徳島市幸町2-5

徳島市文化振興課内

第22回国民文化祭実行委員会事務局宛

TEL 〇八八-六二一-五二七八

FAX 〇八八-六二四-二二八一

主催者

文化庁・徳島県・徳島県教育委員会・徳島市・
(社)全日本川柳協会・徳島県川柳作家連盟 他

愛染帖

新家 完司 選

さてどこへ片づけたのか日章旗
三田市 堀 正和

〔評〕美しい国の美しい旗に対して失礼であるが、距離感はその程度のもの。そして、「その程度の距離感」がベストだと思ふのだが……

西宮市 緒方美津子
職退いて駅の桜が美しい

〔評〕季節を楽しむ余裕もなく通勤電車に揉まれていた日々。あのがんばりがあつたからこそ、今、しみじみ花を愛でることが出来る。

茨木市 藤井 正雄
子と呼んでいるのに犬が駆けて来る

〔評〕走りつこでは負けないぞと、素っ飛んで来る大。家族と一緒にいるときの犬は本当に嬉しそうだ。明るい笑顔と情景が見える。

和歌山市 古久保和子
注射器を持つとにつこりする主治医

〔評〕注射するのが好きなので笑うのか？患者を怖がらせないようにニツコリするのか？それとも単なる癖？気味の悪い医者である。

紀の川市 木村 惺子
アクションはまだロボットに負けてない

〔評〕かなり緩慢な動きになりつつあるのは、自分でも分かっている。が、ロボットなんかには比べると、まだまだマシンである。

枚方市 伊達 郁夫
譲られた席を仲間で譲り合う

〔評〕ありがたく素直に座るのが、譲ってくれた人に対する礼儀なのだが……。このような場合、いちばん気の弱い者が座ることになる。

大阪市 井丸 昌紀
丸顔で純情そうに見える僕

〔評〕確かに、丸顔で童顔の人は純情そうに見える。が、本人が「純情そうに見える」と言っているのだから、「見えるだけ」なのだ。

橿原市 安土 理恵
手料理が欲しけりや味は問わぬこと

〔評〕というのが奥様方の言い分。かなり聞き直ったお言葉だが、おっしゃる通り、少々味のバラツキは我慢しなければならぬ。

堺市 矢倉 五月
デバ地下で買って赤絵の皿を出す

〔評〕いくら手料理が一番でも、三百六十五日では奥様もくたびれる。たまにはこのような手抜きで楽をしても罰はあたらない。

池田市 上嶋 幸奎
眠そうに走る四月のバスに乗る
ヨイイドンもう差がついている四月

京都市 都倉 求芽
夕飯はもやしのひげをとってから

横濱市 金森 徳三
古い二人トイレが二つ欲しくなり

唐津市 市丸 晴翠
堪忍の色紙が読めぬ三代目

大阪市 小谷 集一
悟ってはいません耐えているのです

箕面市 広島 巴子
我ながらしょんぼりしてる医者通い

東京都 清原 悦子
無添加の空気を吸いに旅に出る

厚切りのパンを焼いてる日曜日
三田市 北野 哲男

古里は北斗の下の薬の屋根
荒神さんまだ健在な台所
鳥取市 福西 茶子

菌舞を守る軍艦にくたらし
生意気を叱るパワーを溜めておく
大阪市 岩崎 公誠

デザインに存在感のお仏壇
個人差はあると言うけど年は寄る
大阪市 岩崎 公誠

独り暮らし淋しいものと決めてはる
ご近所と打ち解けている春花壇
尼崎市 長浜 美籠

整理したので探し物ばかりする
遊ぶことならふんだんに知恵出せる
堺市 奥 時雄

尼崎市 春城 武庫坊

桜満開青空が呼ぶ酒が呼ぶ
頂いた草餅しみる春の味

鳥取県 羽津川公乃

わたしよりお酒愛するダンナサマ
遠くても今日はポイント五倍の日

八尾市 田邊 浩三

カルチャーの開講式に並ぶ杖
御百度をプールの中で踏んでます

シドニー 坂上りのり子

引つ越されちよつと立ち寄るとこが消え
過ぎたことジワリと触れて探る友

弘前市 福士 慕情

筆順を間違えたとは判らぬ字
五つ星俺には縁のないホテル

寝屋川市 籠島 恵子

朝はいい少し元気になっている
家内安全なんて大きな願いごと

豊中市 谷川 勇治

我が墓は小さい石で名もいらぬ
眠ります明日のことは神さんに

八尾市 生嶋ますみ

日本のバラより欲しいのは誠意
パソコンは買ったが多分飾り物

松原市 玉置 重人

ガードマン女性トイレものぞきこむ
尼崎市 春城 年代

大正のうしろ姿が小さくなる

寝屋川市 岡本 勲
信号を守ると会社遅刻する

春キャベツ食べ頃ですと膨らんだ
松江市 松浦登志子

ていねいに生きて睡眠不足気味
東大阪市 谷口 義

壺ふたつ仲良く並ぶ春や春
和歌山市 木本 朱夏

品格と言えば書棚の広辞苑
札幌市 三浦 強一

肩書きを掻き集めてるおじいさん
八王子市 播本 充子

敬遠のレベルをちよつとだけ下げる
倉吉市 梶谷 和郎

持てぬほど満足あつてまだ足りぬ
酔う前に言いたいことは言っておく

くしゃみしても何処かが痛い老いはじめ
八尾市 高杉 千歩

白地に赤く ハーモニカそつと吹く
大阪市 前 たもつ

物忘れ言うてるうちは大丈夫
三回忘恩師に夢で喝もらう

休肝日要らぬ日本酒一〇〇CC
豊中市 安藤寿美子

腹立てた時は老人パワー出る
河内長野市 坂上 淳司

美しい国爺ちゃんが雪降ろし
断層の上危ないと言われても

岸和田市 井伊 東吉
完全に散るまで待とう花掃除
玉葱もタオルも元氣無い泉州

さくらさくら咲いて子殺し親殺し
寝屋川市 太田とし子

赤ちゃんを連れて嬉しや転入者
海南市 三宅 保州

初老とは四十歳という字引
物真似が一番うまいのは鏡

戦争に負けた記念のさくら咲く
鳥取市 土橋 螢

髪染めて何処かへ連れてゆけという
豊中市 吉田あずき

ほんのりと酔えばこの世もいい彩だ
嘘のないやすらぎくれる豆ごはん

人妻になつたらハグをしてくれる
弘前市 高瀬 霜石

葉桜になつても年金はこない
香南市 桑名 孝雄

揚げ足取りの政治を苦笑する鳶馬
暗証番号呆けのテストを受けている

つい思う己もとより善人と
交野市 田岡 九好

下校バトまあこれはそのダンデイズム
八王子市 川名 洋子

好きですと言わせてしまおうサンダラス
海南市 小谷 小雪

口説かれてみたいこんな星月夜

大和郡山市 坊農 柳弘
空焚きの風呂釜笑う倦怠期

神戸市 山田婦美子
亡き父も母も出てくる春の夢

大阪市 津守 柳伸
メモとペンゴロゴロさせて閃かず

米子市 政岡日枝子
ひらめいた言葉がふつと出てこない

枚方市 海老池 洋
混んでも美人の方のレジへゆく

橿原市 居谷真理子
酔いましょう同じ世界へ行きましょう

八尾市 吉村 一風
邪魔な石うまく生かすも老いの知恵

倉吉市 松本よしえ
こみ入った話出来ない留守電話

豊中市 水野 黒兎
とりあえずワインと主張バリ帰り

八尾市 宮崎シマ子
気を張って眼だけ優しく生きて行こ

西宮市 藤本 直
寒戻りクシヤミで風を怒鳴りつけ

大阪市 三浦千津子
ご意見は役立てますと思慮深い

尼崎市 山田 耕治
男性が足りませんのと言ってくる

鳥取県 山下 節子
ピリでもいい合格通知ちゃんと来る

大阪市 小泉ひさ乃
ギャンブルの楽しさ知らず終りそう

大阪市 太田としお
設計図だけで終ったマイホーム

鳥取市 有沢せつ子
選挙カー去って静かなお茶になる

奈良市 矢野 良一
春つらら散歩がてらに知事選挙

堺市 山本 半銭
お誘いに二日続いた花むしろ

西宮市 牧淵富喜子
火葬場の庭のさくらが咲いていた

鳥取県 佐伯 やえ
花見どき口紅さくら色にする

堺市 村上 玄也
CMにぶつ切りされて見る名画

唐津市 山口 高明
西部劇見ているような事件事故

奈良県 渡辺 富子
自転車であの日の恋に会いに行く

尼崎市 田辺 鹿太
ゴキブリを追う妻の目の怖いこと

倉吉市 野口 節子
日帰りの旅で老骨リフレッシュ

日立市 加藤 権悟
親睦の句会いよいよ夜の部へ

神戸市 田中 章子
なるようになるさダンスに誘われて

姫路市 古川 奮水
ペンだこの誇りを削るキーボード

高知県 いの 静草
飼い主がいるので睨むだけにする

泉佐野市 稲葉 洋
この平和何を犠牲に立っている

唐津市 坂本 蜂朗
若い日の写真を孫がババと言う

米子市 中井 ゆき
今現在幸せですと息を吸う

和歌山市 喜田 准一
男でも皺が気になる顎と首

高槻市 富田 美義
人間の知恵が公害まで育て

鳥取市 倉益 一瑤
温暖化海の中でも大さわぎ

和歌山市 楠見 章子
箸は右リモコンひだり忙しない

高槻市 傍島 克治
勝ち目なし女系家族の多数決

松江市 三島 淞丘
恙無い一日でした風呂洗う

羽曳野市 吉川 寿美
所在なさベッドの上のいろはには

和歌山市 坂部かずみ
一寝入りしてから明日を考える

大阪市 森田 明子
一眠りしたら迷いが消えていた

鹿兒島市 五反田粧子
松風の音に出あった山の駅

米子市 白根 ふみ
応援歌うたい続けてさくら咲く

藤井寺市 高田美代子
ニートなどやめよと桜バツと咲き

和歌山県 森下よりこ
廃校の庭にことさら桜花

豊中市 神野宇乃子
花冷えに熱爛たのむ緋もうせん

鳥取市 土橋 睦子
スカーフを軽く結んで花見する

堺市 加島 由一
ダービーも今日の運勢見て決める

豊中市 松尾美智代
献血をするとすつきりする体

羽曳野市 吉村久仁雄
山間の村に生まれて魚好き

大阪市 岩崎 玲子
母眠るふる里いつも味方です

八尾市 田中トシエ
連休に帰らない子へよもぎ餅

唐津市 岩崎 實
嫁かぬ娘の力を借りて老いてゆく

紀の川市 辻内 次根
死んだ気になると視界が広くなる

大阪市 渡部さと美
こけた自転車こしついでに五六台

鳥取市 夏目 一粋
トランプで証明される記憶力

高槻市 佐甲 昭二
消しゴムで消せる程度の悩みです

三田市 石原 慶子
石段を登る時には数かぞえ

弘前市 高橋 岳水
いざという時はそつぽを向く他人

藤井寺市 若松 雅枝
大笑いしたら肩凝りふつ飛んだ

大阪府 澤田 和重
遺言書作ったことは子に内緒

唐津市 久保 正剣
役員に妻の名がある小企業

鳥取市 岸本 孝子
永田町へ弱者の声は遠すぎる

大阪市 古今堂蕉子
何億の中に縁ある一握り

今治市 塩路よしみ
陽炎に錆びた路線がなつかしい

大阪市 板東 倫子
整形の顔競い合うコンテスト

羽曳野市 森下 一知
金魚鉢夜店の華を泳がせる

鳥取県 竹信 昭彦
もついいかタイヤ交換する四月

尼崎市 小池 幸子
春が来た何か植えてと土が呼ぶ

吹田市 太田 昭
ぐい呑みが今日一日の愚痴を聞く

大阪市 星野きらり
セレナーデ石焼き手が邪魔をする

高槻市 左右田泰雄
からつぽの財布虫干しして昼寝

三田市 上垣キヨミ
即席の茶漬けがうまい法事済む

八尾市 梅原 莊治
スタートで逆方向に走る孫

大阪市 柴本ばつは
もつちよつと肩幅ほしい男前

河内長野市 針生 和代
寒くない冬が春風邪連れて来た

尼崎市 加川 靖真
鮎すくい泥を知らない踊りの手

東かがわ市 川崎ひかり
備長炭で焼くとウナギに箔がつく

西宮市 坪井 孝一
微笑を好意とすぐに変えるボク

吹田市 大谷 篤子
深呼吸今日はピンクで生きてみる

鳥取県 谷口 次男
玄関で泣きべそかいたランドセル

藤井寺市 鴨谷瑠美子
鞆まで角がまあるくなってきた

和泉市 横山 捷也
春色のワゴンセールに戻り寒

誹風柳多留——一篇研究 22

増田 忠彦・山口 由昭
小栗 清吾・伊吹 和男

山田 昭夫
清 博 美

144 まなばしをうしろへ下けてのそく也

増田 屋敷の宴に出向いた料理人の仕ぐさを詠んだ句。

まなばしを後ろ手にして宴席の様子をうかがっている。膳の進み具合を見て、次の料理の段取りを考えるのであろう。

料理人一ツ出してハ観いて見 二12
まなばしをうしろへ下けて助言する

—これは将棋をのぞく料理人。

山口 賛。今のレストランでもありそうなことだ。

清 賛。

145 かん馬東西にはせたる御本はら

増田 格式の武家の正室に嫡子が誕生した。下屋敷などでの出産であろうか。おめでたい知らせを持って、殿様や親類縁者のもとへ使者が汗馬を馳せる。

「汗馬東西に馳せる」は文句取りだろうか、戦記物口調だけのことか。

安産の御使者ハ家中での乗り人 七35
小栗 賛。「汗馬東西に馳せ違ひ……」は、『太平記』巻第二十六へ四条縄手合戦事付上

山討死事への文句取。

清 賛。

146 明日ふありと思ふ心てすはらひ

増田 浪士討ち入り前夜の吉良家の煤払いを呼んだ句。

江戸の煤払いが師走十三日を定日としたことによるもので、家人たちはもちろん、明日はない身とは思ひもしなかった。

「明日ありと思う……」は詠嘆歌の常套句だが、「明日ありと思う心の仇桜夜半に風の吹かぬものは」(親鸞上人絵伝)が膾炙していたか。

あくる日は夜討ちとしらすす、を取 六5

山口 賛。法然上人の歌と聞いています。小栗 賛。「伝 親鸞上人 出典未詳」らしい。

清 賛。

147 こふく店所くへつるして手をふかせ

増田 越後屋に代表される呉服大店の、江戸の町における宣伝の様子を詠むもの。

市中の寺社の手洗場には、店名を染め抜いた手拭いをつるさせてもらっていた。参詣者はその店名入りの手拭いで手をふくことになる。

小栗 いわゆる「納手拭」のことで、そのような事があったのだとは思いますが、証拠をあげ得ず。

伊吹 同右。「納手拭」の項目は、『日本国語大辞典』にあるものの、呉服店についての記

述はない。

山田 礎賛。呉服屋についての記述はないけれど、願主が呉服屋であっても、いっこうに差し障りはないでしょう。なにしろ、店名入りの傘を発明した連中です。利用するのは何でも利用したと思います。

清 賛。

148 何かきくべしに御ぞうをおくへよひ

増田 おぞうは、草履取、共の者の愛称である。

「何かを聞きたすべし」と考えた奥方が、亭主の外出に従った供の者を呼びつけて色々聞きたす。

うそをやとひつはたかれる草り取

明四に三

さうり取りなぜかくしやると呵られる

三四七

小栗 賛。「何か聞くべし」は落着かぬので、文句取かとも思うが、思いつかず。

清 賛。

149 品川へしと狼毎夜出る

増田 猪と狼は、猪は猪肉を好んで食したと

する薩摩武士のあだ名。

狼は一般に破戒墮落の僧侶をいうが、ここでは増上寺の僧。

品川の遊所には、毎晩決って猪と異名を取る薩摩武士とオオカミの異名を持つ破戒僧、すなわち増上寺の坊主がまかり出る。品川は地の利からこの両者が大のお得意さんであった。

狼の化ケを衣て芝かくれ

三九八

赤大ハくいなんなよと女郎い、

明八義六

山口 賛。

品川の客にんへんのあるとなし

明七松二

清 賛。

150 いたわしやむす子てうしのそつに成

増田 銚子の帥は、帥は本来、古代令制下の大宰府の長官をいう。菅原道真が遠流のようにこの位に追われたことから、勘当で銚子に追いやられた放蕩息子に諷す趣向。

死の意の卒にも利かせるものか。

いたわしいことに、放蕩息子はとうとう銚子に預けられて、その地の帥になりはてたというのである。

とら息子ついに銚子の権の帥

八二五

山口 勘当を「いたわしや」と大袈裟に言っ

たまでで「卒」までは考えなくていいのではないか。

小栗 同右。大宰府のきかせだけ。

清 賛。

151 暑い事隣の宝かぞへたり

増田 なんとも暑いことだ、隣家の土用干しの品々までを数えるようなことになった。このように土用干しの句とするのが素直な解と思いますが、あえて別解を。

熱帯夜で眠れないままに、「お金持ちが一蔵建てた、二蔵建てた」と眠る呪いを唱えているうちに、とうとうお隣の宝を数え上げてしまった。

たからくらべを娘がする暑い事

一四一三

寐そびれた夜ハ金をため蔵を建

一〇二三九

山口 素直に前半に賛。

小栗 前半賛。「暑い事」は土用干しを示唆するだけで、物理的に暑いことがいいたいわけではない。

伊吹 同右。「隣の宝をかぞえる」は「何の効果もなく、やくにも立たないことをする。隣の宝」(「日国」)の文句取。

清 賛。これも文句取ですか。

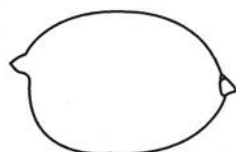
共選欄

檸檬

檸檬

抄

(薰風書、カットとも)



「デザイン」 川上 大輪 選

デザインは二の次サイズ探す服
 デザインが妻と異なる定年後
 バリコレはどうあれ母の躰糸
 デザインで買つて支柱の足りぬ家
 白鳥のようにモデルが飛来する
 デザインがあつてズボンに穴を開け
 バリコレのデザイン街で見かけない
 借景を春がデザインしてくれる
 デザインの通りにいかぬ夫婦仲
 デザインは古いが母の形見分け
 デザインが狂う余生の低金利
 A型のデザインだらう伸び縮み
 大胆なデザイン歳を忘れよう
 終章のデザインふつと考える
 デザインよりもモデルの顔に見とれてる
 デザインをくるくる変える春が好き

堺市	羽曳野市	海南市	西宮市	黒石市	大阪市	大阪市	和歌山市	川西市	和歌山市	堺市	島取市	西宮市	京都市	京都市
矢倉	森下	三宅	亀岡	相馬	前	寺井	榎原	西内	福本	萩野	牛尾	吉田	西口いわゑ	三宅
五月	一知	保州	哲子	一花	たもつ	弘子	公子	朋月	英子	像山	緑良	弘子	満子	宏子

「デザイン」 松本文子 選

サヨナラのデザインが未だ画けない
 デザインが滲む人柄さりげなく
 デザインの通りにいかぬ夫婦仲
 かたくなに蜘蛛幾何学を守り抜く
 ジーンズの穴もデザインなのですね
 残る道デザインピンピンコロリ型
 デザインは古いが母の形見分け
 マネキンに着せれば似合うデザインだ
 脚長のデザイン僕に見せつける
 デザインの君とモナリザ見比べる
 任したと言うデザインで揉めている
 美しい国のデザイン描けぬまま
 納得のゆくデザインで締めくくる
 デザインは良いがお金がいりません
 大胆なデザイン歳を忘れよう
 デザインにつられて買って持て余す

西宮市	米子市	川西市	西子市	鳥取県	尼崎市	和歌山市	高石市	鳥取市	松江市	兵庫県	札幌市	静岡県	三田市	鳥取市	米子市
秋元	白根	西内	黒田	山下	軸丸	福本	浅野	岸本	相見	大谷幸次郎	小沢	蘭田	堀	吉田	木村富美子
てる	ふみ	朋月	茂代	節子	勝巳	英子	房子	宏章	柳歩	淳	淳	猿香	正和	弘子	

妻の顔神のデザインだと思ふ

青空に雲は一流デザイナー

デザインにスリーサイズを喰われる

人生のデザイン夢のまだ途中

デザイン画描いては消している未来

デザインが変わり牛乳よく売れる

スポーツカー速度違反をする形

五十年かけてデザインした夫

デザインを皆右向きにする総理

神様の設計ミスかきのご雲

デザインはバリで中味は田舎風

デザイナー泣かせわたしのほうです

天へ天へとデザインされて行く都会

デザインはどうあれ椅子を手に入れる

花の下わが人生を素描する

デザインはいいが骨抜きでは困る

丸・四角・三角 どれも父の顔

ベコちゃんのデザインちよつと変えてみる

デザインにちよつとうるさい田の案山子

秀句

デザインは派手だが匂うサロンプス

デザインのままで居眠りしてる画布

懸命にデザインしても蛙の子

軸吟

僕の顔デザインすれば丸と点

東広島市 福島 万年

八王子市 川名 洋子

富田林市 中井 アキ

箕面市 出口セツ子

鳥取市 永原 昌鼓

神戸市 田中 章子

紀の川市 辻内 次根

寝屋川市 太田とし子

宇都市 平田 実男

東かがわ市 川崎ひかり

大阪府 小栢こずえ

枚方市 寺川 弘一

豊中市 吉田あずき

和歌山市 武本 碧

富田林市 古田 千華

鳥取市 上田 俊路

弘前市 高瀬 霜石

富田林市 片岡智恵子

東かがわ市 清川 玲子

池田市 北出 北朗

茨木市 藤井 正雄

唐津市 樋口 輝夫

納得の形へ粘土捏ねている

デザインがやつと決まった五月晴

あれ削りこれを減らした設計図

仮縫いのままで遺影になりました

デザインを変えたら急に売れ出した

一人歩きをしたがつているデザイン画

ウインクで心デザインしてる春

デザインのままで実らぬまつりごと

丸・四角・三角 どれも父の顔

デザインに負けない若さ欲しかなり

人生のデザイン変わる高齢化

ガラス張りの高層ビルで日焼けする

破れてる事に美学があるなんて

ダブダブのデザインがよい予定表

人生のデザイン夢のまだ途中

デザインはよいがボタンが苦しそう

デザインに飛びついたのがミスだった

喝采のデザインを着て風邪を引く

シンプルな赤いポストにほつとする

秀句

デザインの原点をみる日章旗

それなりのデザインがあるゴミ袋

森英恵の水着一枚持っている

軸吟

カレンダーのイノシシじつと耐えている

八王子市 播本 充子

雲南市 菅田かつ子

愛知県 早川 盛夫

海南市 三宅 保州

藤井寺市 若松 雅枝

米子市 政岡日枝子

海南市 小谷 小雪

吹田市 穴吹 尚士

弘前市 高瀬 霜石

大阪市 升成 好

交野市 田岡 九好

シドニー 坂上のり子

豊中市 吉田あずき

藤井寺市 太田扶美代

箕面市 出口セツ子

高槻市 佐甲 昭二

和歌山市 細川 稚代

黒石市 相馬 一花

寝屋川市 森 茜

鳥取市 有沢せつ子

和泉市 西岡 洛醉

東大阪市 谷口 義

午後

前 たもつ選



ゆつたりと句集ひもとく雨の午後
夕刊を待ち罹災地の画像追う
午後三時動物園もお八つ時
放課後はクラブの子等の声はずむ
ばあちゃんが生に還る昼ドラマ
大根の花真つ白へ昼の月
暇背負い肩が凝ります長い午後
集金屋西陽の陰でメモ整理
午後からの薬服用すく忘れ
好きなこと出来る午後です有り難い
格安のツアー出発遅い午後
半ドンのハチ公前が懐かしい
医者通い済ませば午後は自由なり
午後からは駒半値にするという
午後三時きつちりおなかすいてくる
息抜きは実験 午後の化学室
月曜の午後算数に疲れはて
暇な午後妻が仕掛けて来る喧嘩
保育士もほっと昼寝の顔のぞき
始まりは二人を染めたサンセット
主婦の仮面はずして午後から自分流
洗濯を入れる微妙なタイミング

重人 銀波 高栄 伊津志 ぼつは 実 東吉 福世 淳司 徳三 日の出 章子 順風 四郎 准一 かつ子 早人 喜子 宣子

午後からは予定があるのルンルン
胸に棲む虫が起きた午後六時
ボク留守番妻は午後からフラダンス
句も出来て貧乏ゆすりして午後
ジীবンのママさんに会う昼下がり
気まぐれな噂が集う午後のお茶
丸いポストを抱きにゆく午後三時
まだらボケ午後の紅茶に溶けてゆく
午後からの遅刻生き方まで問われ
人生の午後に翼が欲しくなり
呑み助だった亡父と呑みたい昼の酒
朝刊を読んでないのに来た夕刊
休園日キリン親子の昼さがり
一言をまだ悔やんでる昼下がり
思索する時間をくれた午後の雨
佳 夜の部へ家族にカレー炊いてきた
五時間目君も眠いかお月さん
コーヒーから熟女の午後は燃えてくる
プランコもまどろむ保育園の午後
午後三時幽体離脱したくなる
人 結び目がやつと解けた午後の風
地 雨の午後煮豆ふつくら炊き上がる
天 カリヨンはきつちり三時いい平和
軸 おおらかな午後はわたしのためにある

賢子 雄一 忠一 志洋 あずま 一 粹 政勝 遠野 幸雀 みつこ 叔子 扶美代 岳水 千里 昌紀 美紗子 充子 霜石 愛論 雅枝 修

遺伝子

中村 金祥選



親から子子から孫へと私の強さ
遺伝子を操作の向こう不気味です
遺伝子が迷路で悩むニューハーフ
遺伝子がどうあれ父に似て頑固
髭は濃く頭は薄いDNA
人という遺伝子持った摩訶不思議
遺伝子の作用が蛙は川のはる
狂わずに生きる遺伝子持っている
バカという遺伝子もらい苦労する
DNAたとえば先は知れている
負け組の遺伝子継いでオチコボレ
ご先祖は足軽だったそのまんま
正直な遺伝子二十から禿げる
遺伝子を組み替えられたかも知れぬ
遺伝子をしつかり継いでいる頑固
クロンはいや貴男がふたりいるなんて
遺伝子を組み換え神を驚かす
遺伝子の命するままの嘘ざらい
遺伝子をいじればいつかくる異変
整形をDNAが見逃がさず
遺伝子が尾骨に残り月に吠え
ビリの子に無理させるなどDNA

圭一郎 章子 幹子 敏子 孝一 小 實 正剣 日の出 志千代 クックバラ 可住 次男 賢子 淑子 岳水 四郎 水笑 勝視 明子 雅枝

初歩教室

題一傘

三宅保州

私の川柳観から(四)

☆穿ちのない句は報告、説明句に陥りやすい。
☆説明句、報告句の域を出ないと上達は望めない。説明や報告の事実を作者はどう思うかを詠むことのいわゆる「そこから詠むこと」を会得すると佳句が生まれるものである。

☆説明句、報告句が必ずしもすべて悪いのではない。説明、報告だけの「そうですか」という平凡さ、感動のなさが駄目なのである。説明、報告的な句でも、見つけの良さ、表現の良さ、意外性などがあつて、感動や共感を呼ぶ句もある。

☆川柳に最も必要なものは「作者の心」だと思ふ。言い換えれば、句の中に自分の存在感のある句を心掛けることである。

☆作者が説明や解説をしないと句意がわからないような句は如何かと思ふ。そのこと(発想等)にあまりのめり込みすぎると、ひとりよがりの落とし穴に陥ることがある。

【同想句】

同想句では「相合い傘」の句が非常に多かった。そのうちの十八句を掲げます。いつも言うように、相合い傘という第一発想を捨てるか、余程すばらしい発想と表現の相合い傘にしないと佳句になり難いものです。

傘マーク並べて書いた名は流れ

古づくえ相合傘を彫った跡

落書きの相合傘に恋仇

落書きのあいあい傘の君と僕

相合い傘共に歩んで四十年

差しかける傘に微笑み返す仲

相合の傘で歩いた紫陽花寺

相合傘胸の鼓動がつぶれそう

ぬれたって嬉しい二人相合傘

一つ傘濡れてもいいの二人なら

相合傘互いに譲り合い濡れる

傘のもと二人肩よせむつまじく

相傘をにぎるふたりに向かい風

相合の傘も疲れて低く差す

相合傘の相手を選ぶ背の高さ

次の三句は同想でも比較的良い句です。

寄り添えぬ相合傘を畳む恋

だれかさんと誰かとわかる傘の仲

初雪も相合傘の上でとけ

【添削・批評句】

次の三句は字足らず又は字余りです。

原 厄介だ亡父の傘捨てがたい 健柳

添 どうしても捨てられませんか亡父の傘

原 忘れ傘来たら渡す客がいる 百豆子

添 傘を忘れても取りには来ない客

原 傘しずく落して車中の人となる 光子

添 傘のしずく落とし車中の人となる

次の二句は誤字脱字に注意して下さい。

原 ニート族親の傘きて暮らして 靖博

添 ニート族親の傘きて暮らして

原 春雨は相合い傘が似つて 靖博

添 春雨は相合い傘が似合つて

次の句は送り仮名に注意して下さい。

原 蛇の目傘覗きかれ悦つに雨よ降れ ミヨノ

添 蛇の目傘覗かれ悦に入っている

原 傘広げ色とりどりの花が咲く ヒロ

説明に終わらず作者の思いなどを詠みたい。

原 肩を寄せ傘も持たずに半世紀 俊子

添 傘の中肩寄せ合つて共白髪

原 傘のうしろしばし二人の世界です 冷子

添 二人だけの世界に浸る傘の中

原 傘持たずママが車で駅へ行く 藤朗

添 傘持たずママがクルマでお出迎え

原 傘持たすが雨降らなかつたばやかる 綾乃

添 降らなかつたばやきを傘も聞かされる

原 ジャンプ傘人の事など気にもせず 萌

添 他人のことなど気にもせぬジャンプ傘
 原 人の傘当てるに程甘くない アヤ子
 添 当てるにほど甘くない他人の傘
 原 幼ない日新しい傘うれしくて トミ子
 添 新しい傘も嬉しい新入児
 原 人情の傘が欲しいよ涙雨 美智代
 添 人情の傘さしかける涙雨
 原 傘の下母の涙を忘れぬ 雅代
 添 傘の下で涙隠していた母よ
 原 子らの事故窓ある傘で防いでる 孝明
 添 窓のある傘で子の事故防ぎたい
 原 蛇の目傘ほとんど芝居で見くらいい 秋星
 添 お芝居で見ただけになり蛇の目傘
 原 雨上がり傘杖となる坂の道 畑節子
 添 坂道の傘杖となる雨上がり
 原 ジャンボ傘雨が上がると杖にする みち代
 添 雨が上がると杖にするジャンボ傘
 原 父さんのかさはすぶりをまわっている 尚
 添 また傘で素振りしているおとうさん
 原 初月給買つてわくわく赤い傘 夢
 添 赤い傘初月給で買いました
 原 予報など気にせず傘を持ち歩き 河洋子
 添 天気予報どうあれ傘を持ち歩く
 【少し工夫すると佳くなる句】
 原 年金の傘で二人が濡れている 幹子
 添 年金の傘が二人に小さすぎ

原 地藏さん黄色い傘に笑いかけ 貞月
 添 お地藏も黄色い傘に笑いかけ
 原 UVカット黒い日傘になじめない 房枝
 添 流行の黒い日傘になじめない
 原 こだわりの傘立て目だつ所へおく 那珂子
 添 こだわりの傘は傘立てには置かぬ
 原 信楽の傘立てドントいばつてゐる きぬ子
 添 信楽の傘立てでんと威張つてゐる
 原 ひとつ傘のお情けからは這いだせぬ (付)信子
 添 お情けのひとつ傘から這い出せぬ
 原 から傘はこうもりに無い人情味 章司
 添 こうもりに無いから傘の人情味
 原 俄雨報知新聞傘にする としお
 添 新聞をかざして走る俄か雨
 原 傘マーク予報外れの日本晴 善江
 添 傘マーク外れて嬉し日本晴れ
 原 傘買つて予報毎日気にかかり 玲子
 添 傘買った途端に晴天が続く
 原 百円で雨傘になり杖になり 道子
 【佳句】
 信念のない外交に破れ傘 たん吉
 核の傘当てるに反核唱えてる クックバラ
 気がつけば地球を被う核の傘 孔一
 異常気象地球にかけ傘がない 徑子
 絵日傘でおどけてみせる猿回し 映子
 雨止めば傘ほど邪魔な物はない 像山

俄雨傘持ちながら走る人 清
 折りたたみ隠して入る彼の傘 賢治
 雨上り女系家族の傘の花 麗
 葬列へ遠慮している赤い傘 美紗子
 ソプラノで蛙が歌う連の傘 弘泰
 赤い傘あたりのものになつてくる 柳歩
 杖になり日除けにもなる愛の傘 浩三
 もう少し傘になつて欲しい父 すみれ
 悠々自適傘など持ったことがない イセ
 拗ねた子に傘さしかける親心 (付)節子
 さしかける傘の角度にある主張 わこ
 ゼロからのスタート傘をさしかける 次根
 骨密度どうあれ傘になるつもり 起世子
 【今月の推せん句】
 傘立てが爪弾きする折り畳み 河津寅次郎
 「爪弾きする」が言い得て妙ですね。
 居酒屋に置き傘してゐるおとうさん 谷川勇治
 傘までキープしてゐるとは。見つけの良い句。
 傘持つとたたら踏み出す芝居好き 岡本昇
 イヨーツ成駒屋―はたまた音羽屋―ですか。
 傘被る月に手回し急かされる 吉村幸
 まさに「手回しせねば雨が降る」着想拔群。
 【私の句】
 文句ひとつ言わずに濡れてくれる傘
 結局はもとの二人の傘になり
 (登録済の方には役員が添削して返送します。)

秀句鑑賞

同人吟 遠山可住

—5月号から

気分だけ美人にさせた美人の湯

平田実男

美人の湯で売る歴史ある古い温泉があります。男性は普通の温泉気分が済みますが女性はそのゆきません。ゆつくり足の爪先まで磨いて、上がつてからも湯気の余韻に浸る至福の刻。老体と言わず気分だけが味噌です。二番にいと前後がよく見える

西口いわあ

先頭は後が見えません。一番には後をふり向く余裕があります。この余裕、実は大変な位置で時に先頭の代役をしなければならず、常以後の声に耳を傾け心を配り、そして名が出ない。これがこなされる人はそう居ません。アルプスの水で長生きするつもり

神夏磯典子

コービー、ジュースからお茶が売れるようになって日本人も変わったなあと思っていたら今度は水。そしていよいよ外国の水が入って来る時代。貧しくてお茶が飲めなかった水呑百姓のご先祖が見たらおったまげます。

結婚が就職だった若かった

榎本日の出

大和撫子は内助の功がその仕事、嫁入り即就職でした。夫に仕え、内職をしながら姑に仕え子を育てて来ました。若かったとは言

無責任なことしてくれる多数決

徳山みつこ

多数決が民主主義の基本であることには間違いないものの上の方の顔色を伺ったり、党派の流れに逆らえないとなれば、個性のない頭数でのゴリ押しになります。多数決の裏にひそむ怖さを知る庶民の目が光ります。

効いてるか試しに薬やめてみる

三宅保州

きれいな粒剤を並べて数えている老体が見えます。みんな同じような暮し振りだなど思いました。病との闘いにも余裕が生まれてくる不真面目さが句の味わい、薬を半分に減らして回復したという現実を私も聞いています。試してみる不信任感が心憎いのです。

欠点を出して仲間にもう

倉益一瑤

良い顔をしていては悪友達の餌食になるだけ。欠点を出すとは大変な勇気としたたかさ、いやこれはもう小さな子供の世界でなく、大人へ成長している私かも知れません。

あなたの健康はあなたの食べもので決まるの通り最近のテレビも新聞広告も健康食時代、サプリメントが幅を効かせています。その上牛乳は百害あつて一利なし、なんて本がベストセラーになったりして本物がわからなくなつて来ました。それは飽食時代と何とか症候群の因果関係なのかもしれません。

私は大正生まれで農家育ち、古老から山から手ぶらで帰るな、田んぼへは手ぶらで行くな、という農家の基本の一つを教えられて来ました。山へ行ったら落葉の一籠、山草の一束でも持って帰れ、田んぼへ行く時はそのおみやげや台所から出る残渣、灰の一握りも田んぼへ持って行けという事で、生産の地力作りの心得であり、それは日本に米が余るなんて夢の夢の時代の農民魂でした。

川柳の方は皆さんの秀句を見ていたただけの老化頭脳になりましたが、土作りの基本と同じように平言俗語、ズバリ、チクリ、ニコリ、ホロリ、五七五のリズムに乗ってナルホドとうなずける句に拍手を送ります。

得て妙。

熱いもの抱いてひとりの手を上げる

岩 佐 ダン吉

この句は前述の無責任……多数決の句の正に逆を行く強靱な個性派です。こんな人がいてくれると世の中捨てたものじゃなくうれしくなつて来ます。

一日中家に居るのに毘を剃り

矢 倉 五 月

一読思わず頬がゆるむ。豆秋張りの軽快なリズムが何とも素敵、あちこちから拍手が聞こえそうです。

さりげない心遣いがむつかしい

森 茜

心遣いとはこういうものだよと教えてくれる句。全く同感で相手が気付いてくれようがくれまいが関係なく、さりげなく出来るのは大変なこと、人の心をわが心と出来る推量、わたしもそんな人になりたい。

忘れたらあかと年忌やつてくる

海老池 洋

にっちもさっちも行かなくなつたら、ご先祖の墓参りをしなさい。そこから運が開けるのが仏教の教え、ご先祖も気を遣います。

転んだら多分起してくれるやろ

太 田 扶 代

他人事ならず、一抹の不安と期待と……。

一本杉無口な父の姿だな

山 本 宏 至

一本杉の雄大と孤独、父の背を見るような男が凜然と立っています。作者もまた無口。

喉仏にいかなこの春通過する

春 城 武庫坊

春を告げる句の味覚。お店によつてそれぞれの味付けがあり、お得意の店のこれを口にしなければ春が来ません。通過するのは正に実感。

表札に名前並んで一人住む

北 野 哲 男

別に魂胆があるわけではありません。家族一同が並んでから三十年も四十年の間、それは忘れたのでもなく、わざと置いたものでもない。絆のようなものが今一人になると何とも心強いのです。

母米寿聞かれもしない年齢を言う

秋 元 てる

私の近所にもそんな人が居て何かにつけて、もう八十八や八十八やが口ぐせです。それが病人でなく万歩計の元気な人であるところが面白い。実感句の強さです。

生き残るためチャレンジの門くぐる

松 原 寿 子

人生いくつになつても歳相応に挑戦したい

ものが生れるものです。寿命という未知の世界を人間らしく全うするためにチャレンジの門をたたく。じっくり味わいたい句。

見て歩くだけにしておく春の服

佐 藤 治 代

春がビタリと決つて動きません。男では詠めないし、女性でも若過ぎたは覗けない詩情。こんな味わい方が春にあったとは脱帽です。

裸婦の絵に少し質問したくなる

高 橋 宏 臣

ピカソがわからなくて絵などわかるものかと言われれば、ハイと下がるしかない。けれどもどうもわからない裸婦もいらつしやいます。どんな裸婦さんか余韻の中で「質問」がビタリと決りました。

不揃いの野菜他人と思えない

高 瀬 霜 石

品種改良の技術が進んで同じ品種の種子とは言え、美事に揃つた野菜達が店頭を飾ります。消費者の皆さんは美しく揃つた姿しか見られませんが、それは選別という険しい過程を通過した姿で、出荷出来ない不出来、不揃いの何パーセントかが廃棄されています。

我が子と同じ思いで育てた野菜達への思いが都会の台所へと伝えてくれますように、他人と思えない野菜達も生きています。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 5月号から

中井 ゆき

理想図を少し外れた現在地

藤岡 ヒデコ

私も終章近くになって、ふと今自分の立っている場所を見たような気がしました。やっぱり少しずれた場所です。

家の中までとても明るい月夜です

森 下 よりこ

一人の部屋の明るさに目覚めてお月様の力におどろき、そしてまた安心して眠りました。

春つらら柱時計も遅れがち

稲葉 洋

うららかな春日、柱時計もそして私も、ゆつたりのんびりと。

順番に咲くカサブランカの律儀

柏野 遊花

少しお高いけど最後のつばみまで開く、長持すると仏壇にお供えして来ましたが、それが律儀とはホントに香り高い律儀な花。

ゆつくりと悲しんでから立ち上がる

森田 明子

若い頃は悲しんでなんかいられないと、でも今ならゆつくり悲しんで、ゆつくり歩きだすでしょうね。

今日からはいや明日からダイエツト

中井 萌

同感です、ホントに同感、でももうおそい。

牡丹鍋干支の今年は食べにくい

多田 契子

そうです私は食べにくいです。やさしい息子が亥年生れの年男、来年も再来年も、食べにくいでしょう。

鶴を折る心配を折る指の冷え

乾 春雄

リリカルでせつなさ一杯つたわって来る好きな句です。その頃の指先の冷たさを思い出しました。

平均寿命今日から人の分を生き

高野 不二

少し長生きしたかなと、ふと思うことがありますが人の分まで生かされている。生きていると思つて、少し大きな息をしてくらすこ

とにしました。さてどなたとどなたの分を頂いて生きますか。

おみやげに駅弁買って旅わけ

遠藤 那珂子

思い出の駅弁をおみやげに旅の話をする。話す方も聞く方も、胸をわくわくさせて、いい旅がさらにすばらしい旅になって、また旅に出たくなりますね。

人違いしたがにつこりしてくれる

堀 富美子

こんなときホツとしますね、私もよく人違いしますが、そのばつの悪さをにつこりされたらうれしいですね、世の中に暖かい風が吹いているように……。

有難う毎日言える幸がある

大久保 伸子

ありがとうと言うと、心も体も軽くなります。ありがとうと口に出すのは、平和にあたかく、くらしいられるから花にでも風にもありがとう、大好きな言葉です。

逃げないで遊んでいてよ庭雀

安達 厚

毎日雀の来るのを待っています。アツ来た来たと窓に身をよせる、パツと散つて終う、なんにもしないのに、唯見てるだけなのに、すずめさん。

■各地句会だより

川柳塔すみよし川柳会

岩崎公誠

大阪市24区の中でも有数の人口約16万人が住む住吉区は、大阪市の最南部に位置、大和川をへだてて堺市北区と隣接している。

この住吉に、川柳塔すみよし川柳会は平成18年6月11日、産声をあげて発足したばかりのほやほやで小粒の勉強会である。これから目指すところは着実に力をつけ各川柳会に負けないレベルの活動をしたいと考えている。

昨年の春、住吉区在住の鶴田遠野、古今堂蕉子、岩崎公誠と阿倍野区在住の榎本舞夢は近在の有志が、地元の住吉大社会館で顔合せして発足の諸打合せを持った。

川柳を作って楽しい会にしたい。全くの新人を仲間に加えたい。一般の方が気軽に入る会でありたい。さらに若い人に入って貰いたい……いろんな面から意見を出しあい、一般の人に広く呼びかけることを模索。「川柳をはじめませんか？」というタイトルのちらしを作成した。さてどこで配布するか……誰に渡すと効果的なのか……。人出のあるイベント

はないのか？

その結果、住吉区万代池公園周辺で5月25日、26日に開催の伝統行事「帝塚山音楽祭」に便乗して、来場する人や通行する人たちに配布することにした。この音楽祭は10年以上も続いている。コミュニティイベントで音楽をメインにフリーマーケットやバザール、そして各国の踊りなどで賑やかに繰りひろげられる。遠野、日の出、萌、蕉子、公誠、舞夢さんに遠路から応援の江見見清さんも加わっ



3月句会にて前列左から3人目、奥田先生、西口先生と

て「ちらし」を一日間多くの人々に手渡した。質問のあった人、興味のあるような人には旧号川柳塔誌を贈呈し、ノートに住所・名前・電話番号などを記入して貰い……案内のはがきをすぐに出せるようにした。案内はがきは蕉子さんの力作で成果につながっている。第1回から川柳の基本を学ぶということで有識の方々に講師としてお願いして、初心者へのわかりやすい講話をいただき、実作・選考を通じ勉強を続けている。これまでに長浜美籠さん、西出楓楽さん、前たもつ氏、川端一歩氏、奥田みつ子さんなどに懇切に講話していただいた。

18年10月の句会から手づくりの「川柳塔すみよし」を毎月発刊している。

新メンバーの一句。

《宿題・父》

西出 楓楽選

父親の顔で息子が子を叱る
文子
役者似の父も今では好々爺
和子
正月はすき焼の鍋父仕切る
明江
事故に遭い何も言わずに逝つた父
幸子
父譲りの下戸でいつも送り役
定子
わがきもかくれて見てる怖い父
功子
19年6月でやと満1歳。よちよち歩きを
はじめたばかりであるが、川柳塔・麻生路郎
先生の終焉の地住吉で川柳の生命を燃やし続
けたと考えている。皆さまの暖かいご支援、
ご指導を心から願っている。

■句集鑑賞

西出楓楽著

『天秤座』

仁部四郎

こんなに立派な句集の紹介が私にできるの
かと思ひながら、女人薫風の『天秤座』を一
気に読み通して、気にかかった句を書き出し
たら三十五句になった。木津川先生の序文は
忘れてしまうことにして、この稿に挑戦する。

字余りと字足らずウマの合う夫婦

ドラマなど持たぬ夫婦にある歴史

金婚式まではあと三年あまりある。私がず
っと「字余り」で「字足らず」である。いわ
ゆる共稼ぎが長かったせいか、ドラマの脚
本など考えるくせがつかずに今まではいる。

この二句、よくある型の句ではあるのだろ
うが、夫婦の片割れの私の姿を鏡に晒させる
句として読んだ。診察券は五枚持つていて、
妻より四枚多い。確率的には、私が先に死ぬ

が、その時、謝辞がすんなり言えるだろうか。

遮断機を上げたが誰も通らない

石になるくらいの芸はもっている

教員が私の職業だったのだが、学校社会だ
ってタテ社会である。管理職になれば、生徒
向けの遮断機の操作は間接的になり、教職員
向けには直接的になる。適当に操るのは大い
なる苦勞で、やや馴れた頃には定年になる。

往来も自由なら、言論も自由な社会で学校

もあるはずないと、高校生の頃から経験則
で知っていた。おかげで、デモシカ教員も

「石になる芸」を身につけたのである。

女の声が近頃大きすぎないか

男にも駆け込み寺がいる文化

一流の下つ端になることにしよう

「大きすぎる」と思うのは、男も、駆け込
み寺を探しているからだろう。「女賢しくて
牛売り損なう」という俚諺を知らないか、な
どとタンカをきると、大臣の座はともかく主
夫の座を失う時代で、選挙人口だって女上位
だし、ヤケクソでついでに言えば、日本で一
番偉い神様は天照大神で女神である。それ
も、男には、一流の下つ端になるという秘策
があるというものだ。時にはモノが言える。

湧き水がうまい地球を信じよう

地球の裏側へ命中する弾を発明して喜ぶ愚

かさはいつ卒業するつもりだろう。

吃水線あたりにおいてある白紙

人間なり、荷物なりの重量で吃水線は上下
する。その時白紙はどう動くのか。そもそも
「あたり」とはどういうことで、「白紙」では
なくて「危険」という文字が記されているは
ずではなかったか。一寸法師の舟にも吃水線
があり、笹舟にもあるのか。トリスをストレ
ートでやりながら謎に挑む句。

経済も人情もいまシユガレス

「シユガレス」とは「甘味に欠ける」と
いうことだろうか。「ブラック」ということ
だろうか。そうだとすると、「経済」は
モノの流れ、ヒトの流れ、カネの流れのこと
だろうか。要するにこの句は、現代は世知
辛い世の中だということを主題にしているら
しい。ホリエモン現象以前の句かどうかが分
明ではないが、乾燥性がおもしろい句。

日の丸にグッドデザイン賞上げる

私は、昭和二十年に国民学校を卒業したか
ら、修身も経験したし、いわゆる戦後民
主主義の効用も知っているつもりである。旗
日だからとて国旗を出すことはいないが、日
の丸は、国旗としてもいい旗だと思う。この句
には100%賛成である。

清婉にして清徹な句集である。

■句集紹介

『天秤座』

西出 楓楽著

木 本 朱 夏

楓楽さんは才女である。それも机上の空論をもてあそぶ口先だけの才女ではない。現実をしっかりと把握して、目配り、気配りの心遣いを見せる行動的でおおらかな女性である。

京うまれのなにわ女で現実派

句集の冒頭に据えられたこの一句こそは、楓楽さんそのものである。

川柳塔理事長として、また薫風先生のもとをうけた「朝日新聞なにわ柳壇選者」として、八面六臂の活躍をされている楓楽さんは京女というよりは、大阪の女という印象が強い。彼女自身、大阪の水がしっとり肌に馴染んでいることを、実感しているのではないか。

楓楽さんは天秤座の生まれという。句集のあとがきに「天秤座は正義の神アストライアの持つ天秤の皿が二つあるように、パートナ

ーが重要な人生上の価値を占めるのだそうです。片方は私が乗り、もう片方にしっかりと川柳が乗って……」と書かれている。

私の見るところ、天秤の皿の一つには京女の顔、もう一つにはなにわ女の顔、この二つが微妙にバランスを保って、楓楽さんを形成しているのではないか、と思う。

句集『天秤座』は「風の私語」「幸福の絵」「晴のち晴」「針のない時計」「魯山人の皿」の五章からなる。序文は本誌「川柳塔の川柳讃歌」でお馴染みの木津川計氏である。

パーゲンを回れば終る妻の乱

円満にきました主権在妻で

妻ですもの裏金と使途不明金

白を白く干してたしかな妻の位置

妻として時には受ける変化球

以上の作品は第一章「風の私語」に収められているが、疑いようもなく幸せな妻の素顔が明るくユーモアたっぷりに詠まれている。

楓楽さんは家族の絆を大切にしている人である。句集のどこを聞いても、善き嫁、善き妻、善き母、そして善き姑であり、善き祖母である楓楽さんがニコニコと笑っている。

姑が今居たらと梅の塩加減

作業着の似合ふ夫で従いでゆく

爪丸く切り初孫に会いに行く

ちから水たっぷりくれる家族たち

えんどうを剥く楽しさを知っている母であり妻でない身の置きどころ

俳人・日野草城は「川柳はうなづかせる文学である。古くから穿ちが川柳の本質だといはれて来たのは、この意味である」(原文のまま)と主宰誌「青玄」で述べている。

楓楽さんの川柳には頷かせるものが多い。また、情緒に溺れることなく、いつも冷静沈着なまなざしで、時にシニカルに、時にウィットに富んだ作品を生み出すパワーは、天秤座の女神のなせる技であろうか。

絆などペーパーナイフでも切れる

安っぽいヒューマニズムで靴が減る

踊ってるお方へ笛を吹いて上げ

問題は中味おともたいたいやきも

こひびとと書くとしんそこ溺れそう

ラブゲーム男が勝てるはずがない女ですもの女みる目は持っている

先ごろ亡くなった時実新子さんは、「適当に不幸せなほうが良い句ができる」と書いていたことを思い出す。

一点の翳りもない月のように幸せな楓楽さんは、見事に新子説を覆して、素晴らしく芳しい果実の数々を生み出して見せた。

川柳塔の未来を担う楓楽さんの、第一句集『天秤座』と広大無辺な前途に乾杯!

魯山人の皿おらかにいのち盛る

第31回 全日本川柳2007年栃木大会

日時 平成十九年六月十日(日) 午前十時開場
会場 鬼怒川温泉あさや コンベンションホール華厳

〒321-2598 日光市鬼怒川温泉滝813

TEL 0288 (77) 1111

宿題 第一部締め切りました

第二部(当日投句) 十一時十分締切

「刻む」 久保田 元 紀選

「蔵」 小金沢 綏子選

「少ない」 金子 美知子選

各題二句当日配布の句箋に記入

第二次選者 塩見 草映・斎藤 大雄・西来 みわ

田中 新一・佐藤 美文

参加費 四、〇〇〇円(昼食、記念品含む)

表彰 文部科学大臣賞・参議院議長賞・川柳大賞

大会賞 ジュニア部門は賞状とメダルを予定

お問い合わせ先

〒321-0201 栃木県壬生町安塚924-10

川俣秀夫方 日川協栃木大会事務局 宛

TEL 080 (1037) 8980

FAX 0282 (86) 1755

*

(社)全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ

全日本川柳栃木大会実行委員長 高梨 宗路

全日本川柳栃木大会実行委員長代行 吉本 瘦児

第4回「河童」川柳誌上全国大会

応募期間 7月1日～9月30日
課題 「河童」2句(新作に限る)
発表 11月3日
選者 (敬称略)

札幌川柳社(北海道)	斉藤 大雄
おかじょうき川柳社(青森)	北野 岸柳
川柳人社(岩手)	佐藤 岳俊
明日香川柳社(埼玉)	てじま 晩秋
川柳研究社(東京)	西来 みわ
NHK学園(神奈川)	大木 俊秀
川柳えんぴつ社(富山)	脇坂 正夢
川柳塔社(大阪)	西出 楓楽
光川柳会(山口)	早川 双鳥
川柳くろがね吟社(福岡)	古谷龍太郎

投句料 1000円 用紙 便箋大、縦書き
投句先 〒028-0516 遠野市穀町6-17
鈴木 南水(TEL0198-62-4843)

「各地句会だより」掲載について

川柳塔社の小集句会で、紹介・アピールをご希望の会は川柳塔社事務所まで原稿をお送り下さい。

会の様子、または会員の集合写真を必ず添付して下さい。

なお、掲載順・添削については編集部に一任願います。

内容—会の特色・行事・これからの予定など自由

行数—たて20字×54行(400字詰原稿用紙2枚と14行)

大塚国際美術館

閑人閑話

(故) 田中正坊

かねてから行きたいと思っていた大塚国際美術館を訪れることができた。大塚製薬グループが、創立七十五周年記念事業として徳島県鳴門市に設立した地上二階・地下三階の建物で、付近の景観にマッチし、日本最大の展示スペースを持っている。

古代遺跡や教会などの壁画を環境空間ごとに再現した環境展示、古代から現代に至る西洋美術の変遷が理解できる系統展示、人間にとって根源的かつ普遍的な主題など、時代を超えて古今の画家たちが描いた代表的な作品によるテーマ展示によって並べられた一〇〇〇点を上回る作品群に圧倒させられる。

しかもこれらは、大企業や企業主のコレクションで構成された美術館と違って原画は一点もなく、すべて陶板による複製品だが、話は三十年前にさかのぼる。

この美術館のある鳴門公園一帯は白砂青松

の地で、美しい砂に恵まれている。当時、大塚グループの社長をしていた大塚正士氏（初代館長の元へ、技術部長の末弟と技術課長が訪れ、机上に一握りの砂を盛り上げた。これは紀伊水道に面する海岸の砂で、大阪・神戸に運んで建設資材として販売しているが、これをタイルにすれば価値のある商品ができるということから、工場内に炉を築き、タイルの製造を始めた。

やがて技術の開発によって、一メートル大のタイルができるようになり、信楽焼きで知られる滋賀県信楽町の陶器会社と合併したところ、石油ショックでビル建設が全面停止となった。そこで陶板に絵を描く美術陶板の製作に転換した。尾形光琳「燕子花」を試作したところ、この大きな絵が陶板数枚でできることが分かり、さらにミロやピカソを含む名画を原寸大に複製する美術陶板の開発に成功した。そこで当時、東京大学副学長であった青柳青規氏ら七人を絵画選定委員に委嘱し、ヨーロッパ各地の美術館に収蔵されている名画を各種資料から探索し、門外不出のピカソ「ゲルニカ」も陶板に仕上げ、有名な「最後の晩餐」は、修復前と修復後の二枚に記録することに成功した。

なにしろ数が多いので、私がかつて現地あるいは日本の美術展で見たものだけでも、ダ

ヴィンチ「モナ・リザ」、ドガ「踊り子」、レインブラントの「夜警」解剖学講義、ミレーの「晩鐘」「落ち穂拾い」、ドラクロワ「自由の女神」、モネの「睡蓮」、ムンクの「叫び」、フェルメール「青いターバンの少女」、ゴッホ「ひまわり」がなつかしかったし、ループル美術館で見た大作「皇帝ナポレオン一世の戴冠」には、今さらながら目を見張った。

これらはすべて原画から色の分解・転写紙に印刷・陶板に転写・焼成→レタタッチ→焼成→検品という工程を通じて陶板画となるもので、油彩は油彩、水彩は水彩そのままに仕上がり、原画と区別ができず、手で触れることもできる。継ぎ目は、日本の襖（ふすま）絵のことを思えば気にならない。もとより模造は模造だからこれを観覧することによって名画を観賞することにはならないが、まず、この陶板画を見てから原画が日本を訪れた際、あるいは現地で実物に接すれば、観賞がより効果的になると思われる。

アクセスは、JR大阪駅から大阪駅から高速で約三時間で専用駐車場があり、渋滞がなければ現地でゆっくり観賞しても日帰りができる。入館料は一般三、一五〇円と安く、この美術館観賞のためのバスツアーもある。

（正坊さんは5月8日に亡くなりました。ご冥福をお祈りします。）

本社五月句会

五月七日(月) 午後五時半
アウイーナ大阪

日も長くなつての句会、出席者の出足も幾分早い。一一名の参加。

始めに、四月に亡くなつた石川侃流洞氏のご冥福を祈り一分間の黙祷をささげる。

今年は西尾某三代目主幹の十三回忌にあたりに、ご縁の深かつた津守柳伸さんが某氏ご健在の頃のエピソード等を語る。有名な

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

は、二十二歳の時の作というお話しに驚く。

豪放な逸話の数々に川柳華華しい時代を垣間見た気がする。お話の途中には「夢追い酒」の歌が披露されたり楽しいお話だった。最後は某氏のメッセージでもある、和顔愛語で仲良くしていこうと結ばれた。

恵子記

月間賞は堺市の河内月子さんに輝く

(司会は一昭・美龍)(協取り一月子・久千代)

(受付一義・扶美代)(清記・富美子)

席題「五月」 北野 哲男選

栞忌を偲ぶよすがの水鶏庵
ゆうつな五月もうすぐ誕生日
武者人形戦が好きなのわけでない
九条を護つて欲しい紙兜
公園に子供のいないこどもの日
五月晴れ竹の子料理招かれる
風薫る五月を恨む多事多難
穴あきパンツ五月の風が通りぬけ
早乙女に代わりいかつい動力機
我が家五人五月ばかりの誕生日
五月の空ちまきのような雲三つ
五月晴れよそこに女は喪服着る
変わり者なので五月の雨が好き
連休が終れば旅に出るつもり
風薫るそろそろビールうまくなる
五月から酒絶つつもり早や七日
三枚におし団塊初かつお
真夏日も霜の予報もある五月
爽やかな五月が好きで日本好き
みつばちもパワー全開する五月
少年老い易くすでもう五月
五月吉日縁故疎開を脱走す
お局の値踏みが済んだ一ヶ月
少子化の空七匹の鯉のぼり
鯉戦鯉のぼりが強く見え
川に舞う鯉のぼりなら増えている
年金で鰯の如き鯉のぼり

保 保 紀 森 紀 瑠 卓 淳 章 義 房 夕 千 弘 一 憲 千 順 朝 耕 天 郁 泰 千 修 幸 雀

鯉のぼり地球の裏で泳いでる
五月晴れ物干し台は満艦飾
五月病縁なし僕の決めた道
葛蒲湯につかり呑気に老い二人
連休にとつと疲れの出た財布
佳
さあ五月とは言えアテがあるじゃなし
それぞれのみどりたたえている新茶
渋滞のニュース毎年家でみる
千の風若葉の艶と響き合う
葛蒲湯に髪まで匂う母と娘と
人
五月雨に傘が一つで足りる仲
地
五月晴れとにかくスニーカー履いてみる
天
五月晴れ女らしい事はもう言わぬ
軸
子供の日大きな靴を履いて来る
兼題「いとしい」 坂東 倫子選

麗 んげ ダン吉 舞 尚 士
いさお 雅 文 耕 治 美代子 ばっは 鐘 造 年須美 扶美代 喜 子 螢 幸 雀 黒 兎 見 清 満 作 篤 子 代

世を劫ねて愛しいものは無いという
 病癒えわたししがわたし抱きしめる
 患えばそほ降る雨もいとおしい
 サークスの象の律儀がいとおしい
 老いてきた俺が何ともいとおしい
 安らかな寝息にいとしいひとの横
 いとおしい言葉にふれる春の風
 知と哀があつて人間にいとらしい
 いとおしいと思うお方はみな故人
 思慕追慕勿忘草が咲いている
 丸くなる妻の背中をいととしむ
 叱り過ぎいととしつゝのる子の寝顔
 ひと晩であづけた母をつれもどす
 鳴き砂がじつと抱いてる白い貝
 二幕目のなかつた恋をいととしむ
 ひとまわり小さくなつた母いとし
 傷だらけにされた九条いとしいね
 腹帯へ芽生える想い掌に包む
 忘れてた植え替へちやんと芽が出てた
 いとしが憎い日もある反抗期
 捨て猫がいとしい僕も親なし子
 無茶をした子ほいとしい親心
 いとしと想うが苦労させてみる
 歳月を重ねいとしくなる絆
 いとしい子だからわざとにつき放す

佳

美代子 紀乃 美智子 哲子 保子 萬的 哲子 房子 扶美代 篤子 千里 耕治 孝一 正雄 耕治 丹吉 寿子 月子 尚士 正雄 淳子 義子 能子 楓子 潤子 尚士 希久子

いとしさを握り潰して父の徹
 いとしかつた女に手綱握られる
 人
 ばくの名を忘れた母へ子守唄
 騙されてくれるあんたがいとらしい
 天
 いとおしい妻よどちらか喪主になる
 軸
 散る花がいとしい夜半の春風
 兼題 「艶」 水野 黒兎選
 色と艶この頃猫に負けてきた
 美人だがちと艶消しの河内弁
 艶っぽいお誘い添えた請求書
 ゴキブリの色艶見事とも言える
 年輪が枯れた演技に艶添える
 顔の艶ほめて病人見舞う朝
 嘘少し混ぜた話が艶を出す
 ニス塗つた艶で何やら嘘っぽい
 潮風に漁師の貌が光っている
 艶き甲斐を見つけたらしい声の艶
 艶っぽい話も混ぜた回顧録
 むかし鳴らした人の背中に艶がある
 社交上手なおんながみせるイヤリング
 衣食住足りて声にも艶がでる
 檜舞台鍛え抜かれた声の艶
 艶っぽい話もなくてやがて夏
 片手でもコツ心得た艶ぶきん

森子 天笑 幸雀 千代 洋 義 扶美代 朱夏 寿子 ばっは みつ子 昌紀 求芽

ぐい呑みの色艶熟れて窯開き
 辻褄を合わすと艶が消えてくる
 夕焼けへボール蹴る子の頬の艶
 手間かけて花にも負けぬ土の艶
 肌の艶ほめられ年を言わされる
 艶っぽい声が耳朶撫でに来る
 艶のある心でいたい種をまく
 艶消しに余裕がにじむ燻し銀
 ふたりして磨き艶出すもの忘れ
 艶やかな衣装の奥に棲む魔物
 苦勞した母には喜寿の艶がある
 古書店で歴史の艶を読みふける
 戦せぬ国九条が艶っぽい
 艶っぽい人だ斜めに座つて
 艶めいた女ころに蛇を抱く
 佳
 艶種も尽きて女は雨季に入る
 逆転があるかも知れぬ肌の艶
 艶話ひとつは欲しい昼の月
 精一杯生きて白寿の顔の艶
 残り火の余熱が冷めぬ頬の艶
 人
 エプロンを脱いで女の艶を着る
 地
 帯しゆるる解いたと祖父の艶話
 天
 艶のある声だ米寿の佐渡おけさ
 軸
 カラオケで体調を知る声の艶

美代子 美義 美智子 哲子 求芽 耕治 俣子 朝子 三四郎 公誠 満作 昭 丹吉 千恵子 夕胡 房子 義 幸雀 扶美代 集一 郁夫 恭昌 太郎

池森子選

良一 倫子 朱夏 年須美 賢卓 弥生 求芽 瑠美子 美智子 太一郎 哲清 章久 泰子 月子 寿子 扶美代 哲男 寿彦 則彦 三喜夫 尚土 憲太郎 柳右子 千一 集一

佳

人

柿の木を一本残す生家跡
(志)千代

地 氏素性月のえくほの中にある 美代子

天
木から木へ飛んでたわたくしのルーツ 天 笑

軸 シルクハットと軍手が両親のルーツ

兼題 「励ます」 井伊 東吉選

未知の力信じていると励まされ
新米を励ますたびにくすり服み

庸 佑
憲太郎

新米の教師励ます落ちこぼれ
雅明
青右

好 羅漢像励ますように叱るよう
ばつは 肩 仵

弘風
観音に背中押される集印帳

美義孝一

快方の兆し戻ります七分強

頑張れの言葉が辛くなるベッド
励まねば絶滅しそう日本人

励ますと言うには金が無さすぎる 天 森
励ましかいじめか分からんようになり 天 笑

失敗は俺にもあつたと酌いでやり
はげまされはげます仲のよい仲間
遠野 春蘭

悔しさへ父は黙って注いでくれ
たどたどしい老母のメールが背を押す

幸 恭
雀 昌

少子化へ励ますように鯉のぼり
励ましより少し休みなさいと言う
朱夏
ダン吉

一陣の風に山道励まされ
励まされバラがまぶしい更年期
かりん 愛論

予想外の力引き出す褒め上手
励ましを受けて飛び出すランドセル舞
深雪 夢

辛抱たい母の一言あればこそ
何よりの励ましでしたその笑顔

順子
修

励まされ煙草をやめて無為の日々
励まして起きて寝る迄叩く尻

蕉子
章久

陰ながら励ますと言う赤い舌
突き放す励まし方も知っている
ア郁
キ夫

どっこいしょ奮い立たしている傘寿
朝子
頑張らなくていいよいと肩を抱く
ルイ子

箱根の山歌い二人で越す峠
行つて来たつた一言父の声

おしやれして励ましに行くことはない
義
あんただれ言われた父に励まされ
きよし

卓
頭長れとママのお腹を就っている
佳

ばつは
玄也

邊廂の言葉曰々しい左邊

励ましてくれるが援助してくれず
化粧とや自分励ます魔法です

人

またあした頑張れ星が煌いた

地

ばろかすに言う励ましは温い友

天

寝たきりの母を励ます旬の味

軸

ベテランは野次を激励だと思ふ

兼題 「味方」

河内

天笑選

天 笑
いわゑ

美代子

楓 楽

いさお

先頭を走り味方に狙われる

死ぬまでは酒を味方につけておく

買って来た味方は金でまた買われ

百歳の味方神さま仏さま

純感力味方一〇〇まで生きてやる

白旗をあげて味方にしてもらい

味方でも敵でもない逃げられる

素うどんを味方につけた唐辛子

味方だと信じた妻が横を向く

杖めがね補聴器味方老いの青春

一人でも味方が居ればそれでよし

もう味方ひとりも居ない元氣出そ

年賀状出さないけれど味方です

相槌は打つが味方と限らない

年金法味方の妻を遠ざける

きびだんご食べてしまえば出ていった

味方も敵も戦争なんかしたくない

敵味方越えて地球を守りたい

朝子

ふりこ

(志) 千代

三四郎

萬の義

反対の意見も持っている味方
頼むのは私味方はありません

弾除けになってあげたい人がいる

夫まだわたし味方と思ってる

いじめられた頃の味方で今日も友

についている時は風まで味方する

札束が俺の味方を連れて行く

にぎりめしみんな味方の顔で食べ

すべて割り勘安心できる味方です

味方から味方へ漏れる内緒のこと

美しい星に生まれて敵味方

人情に脆く味方に騙される

欲張って味方に尻尾向けられる

味方からドミノ倒しに合わされる

丈夫な歯老いの暮らしに味方する

母と妻どちらに味方しても修羅

飼猫はボクを味方と認めない

佳

歓迎会みんな味方の顔で吞む

おいしいもん食べなあんとい妻だ

味方ではないなお世辞が多すぎる

最大の味方の妻が小うるさい

人

最強の敵で味方妻という

地

好物をいっぱい作り待つ味方

天

本当の味方か酒でテストする

軸

面構え味方にはしいサムライだ

アキ

ダン吉

美代子

恭昌

玄風

玄也

愛論

楓楽

弘一

集一

尚士

きよし

柳伸

美籠

年須美

いさお

公誠

利昭

ばつは

良一

ふりこ

卓

朝子

河内月子

川柳文学賞設立

(社)全日本川柳協会

個人句集を顕彰し作家育成と川柳の
地位向上を目指す

対象句集 二〇〇七年一月一日から十二月
三十一日の刊行(合同句集、遺
句集を含まず)

応募法 自薦他薦により申請書(日川協
書式)を提出

審査員 大野風柳(委員長) 斉藤大雄・
大木俊秀・久保田半蔵門・林
えり子

発表 表 二〇〇八年六月 日川協全国大会
副賞 十万円

第62回尼崎文芸祭作品募集

雑詠 一人一句 応募ハガキまたは官製
ハガキ

締切 6月8日必着

発表・表彰 10月28日

応募先 〒660 881 尼崎市昭和通2-7-16
尼崎市総合文化センター文化課

選者 美籠・鹿太・文擴・全彦・いわゑ



毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

サークル檸檬

吉田あずき報

キャンブファイヤー囲む歌声笑い声
はち切れる笑顔行き交うキャンブ村
夕映えのテントあしたは登頂だ
今の世の風が読めない老眼鏡
行列の出来るテントのたこやき屋
温暖化明日の風が肌寒い
添いとげた妻が奇行も棺に入れ
いい朝だいつもと違う陽が昇る
喪の家のテントによぎる逝つた人
テント張り家族の絆組み立てる
青春日記あちこちにある袋綴じ
どのテントもカレーが匂う山開き
騙すよりだまされるのが性に合う
雨よ風よ青いテントにやさしくね
城の緑に溶け込んだよう青テント

ローズ川柳会

山崎

君子報

老いたるか正義感より手の温み
亡き夫の鞆に秘めたメッセージ

さくらさくら一番先に咲く古木
少しずつ忘れて丸くなつてくる
花言葉バラは世界を駆けめぐる
旅帰りの海の匂いのする鞆
えんぴつと夢の世界に翔んでる
桜便りが午後の眠気をつれて来る
招かざる黄砂が花をおびえさす
マイバッグ女の武器は入れてある
青信号春のせてゆくランドセル

和歌山三幸川柳会

喜田

准一報

甘い点つけてやる気を起こさせる
甘い香に毒が潜んでいた不覚
ブラックになつて久しいベアカップ
なあ息子お前も嫁に甘いもの
はんの少し塩を入れると甘くなる
決断へ揺さぶりをかける甘い声
甘言がいつももうろろする会社
憎めば憎むほど狂い出す時計
憎しみに愛も臆にさせる老い
背中にも目があるような憎い咳
憎さ増すその百倍の愛の果て
よく弾む毬がときどき憎くなる
愛憎の間で揺れる胡蝶蘭
悪役が今日はクイズの解答者
産む機械御免で済まぬ雪だるま
雪不足儲け話がとけてゆく
風花が舞つて二人は熱くなる
お日様へ汗流してる雪だるま

哲子
トミエ
孝一
美龍
いね
武庫坊
年子
義子
君子

当代
公子
みね
保州
八重子
義雄
宏夫
町子
起世子
登美代
朱夏
桂香
孝義
一歩
かずみ
イセ
純子

句読点打つつかのように忘れ雪
雪の道子野重吉とすれ違つ
温暖化身震いしてる雪女
雪深凍こころは燃える百度石
日の丸に伏せ字の傷が疼き出す
修正液で消したい自分史の伏せ字
核心に触れると脅えだす伏せ字
謎深くさせて伏せ字の喝咽聞く
導火線の付いた伏せ字を抱いている
伏せ字から手も出る足も見えてくる
貧しくて悪を憎んではかりいる
肝心な箇所は伏せ字の週刊誌

川柳塔みぞくち

小西雄々報

百花繚乱花回廊は人酔わす
長寿国定年からの返り咲き
定年へ天下りとはひどすぎる
定年へ働き蜂の群れを去り
老い先も一花咲かすバワー持つ
菜の花も咲いて伯爵路気も和む
食べ切れず煙の野菜花が咲く
定年の男にきつい向い風
定年もなくて長閑な農の日
早咲きの花へ妬心の風が吹く
定年へ母の励ます便り来る

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

取敢えず世話になる身は軽くする
三世代生きた証しの太い幹

賢
いさむ

章子
昇
孝子
幹子
徑子
美枝子
幸
和子
美子
次根
准一
敦子
雅子
信雄
知恵子
和代
久子
弘子
鈴枝
豊枝
静江
雄々

大難を逃がれ先祖に手を合わす
御免ねが言えず気まずい日が続き
遠慮げに春が行った来たりする
お隣のいさかいキツト倦怠期
転んでも只では起きぬ奴もいる
草餅も搗いて世紀の春祝う
起立してお迎え踏絵怖いから
新札が孫の吉報待っている
陽にカザス節くれだった大きな手
輪の中に居ても孤独な席もある

竹原川柳会

時広

一路報

よしみ 八重子 寿々女 かがり 放 任 あきら ひかり 初 恵 貞 月 蘭 幸 淑 子 輝 恵 栄 恵 規 代 慶 子 節 生 静 風 節 夫 房 枝 太 虚 比 呂 子 史 子 千 枝 半 徳

悠悠の中味ほんとはどんな色
悠悠とマンボウになる終い風呂
満願成就月悠悠と登る
水平線今悠悠と父の船
青空に悠悠とんび春描く
悠悠閑閑湯吞が二つ出してある

川柳東大阪同好会 森下 愛論報

奥さんと呼ばれ定年ない仕事
主婦のケチ平安名所で浪費癖
主婦の膝借りて楽しい花の宴
好景気何処にと怒る一庶民
怒るたび父のめがねの度が狂う
まだ怒ってるな大根が辛い
代理母産んだ子を恋しがる
出産を母が娘の代理する
いつだって代理で罪をかぶる役
古里の言葉と母の手がぬくい
過疎の地の人情厚い住心地
懐がぬくい目尻笑い出す
相続に兄弟の糸絡みみだす
張りつめた糸へそっぱを向く夫婦
七色の糸で明日の夢を見る
満面のぬくい笑顔に毘がある

高槻川柳サークル卯の花 瀧本きよし報

赤ちゃんの転ぶ動作はやわらかい
廻るのを止めると転げる老いの独楽
よく転げる私を笑うカタカナ語

笹 舟 敬 子 幸 子 笑 子 汎 美 一 路 良 子 シマ子 太 一 章 久 雅 文 穩 夫 風 子 八 郎 朝 子 和 子 三 重 子 克 己 秀 夫 湖 風 賢 子 愛 論 祐 作 郁 夫 活 恵

佳句地十選 (5月号から) 伊勢田

古棉迎え最後の恋と紅をひく
遠くから進軍喇叭らしき音
神様のくれた十指で読む点字
イラクにも憲法九条届けた
主人褒め子供褒めてる嘘上手
見舞客みんな不思議に嘘を言い
拍手して褒めてやめさす聞き上手
一腕を母とまあるく食べる幸
帶きりり何があっても通す意地
我慢してやがては千の風になる

転けた手が土の温みを感じ取る
クレヨン黒が仕上げたババの髭
わたくしを欺きたくて濃化粧
濃く咲くと他人の庭に嫁がせる
馬鹿になる事だと生きた知恵が言う
肝心な時にはいつも妻の知恵
いやな事耳に栓する知恵を持つ
この歳で悪知恵浮ぶときがある
ばあちゃんの知恵は家族を丸くする
息子よりママが tricky の不合格
折角のわての火照に気が付かぬ
今日はあななどとなと妻が言う
がつくりの肩に無言の手が温い
美しい国をめざして四苦八苦
星条旗の星になるかも日本国

穀 祐 作 尚 士 六 点 紀 雄 克 美 和 子 清 帆 順 風 理 菜 石 花 葉 子 宏 章 昭 石 舟 泰 雄 孝 一 治 三 郎 美 龍 宵 草 武 義 公 子 義 一 萬 的

美しい国に並んだ青テント
団塊に国を支えてきた誇り
土壇場を救った妻の広い守備
止められた酒なめられただけ夕餉待つ
パンの耳捨てて文化を語りあう
ブルジョアと錯覚させたイミテーション
似た人を見過した日のわだかまり
音もなく寄り添ってくる千の風
楽しいことだけ引出しに今日終る
石油さえないけりや紛争無からうに
耳もとで迷う心をくすぐられ
向かい風わたりしひとりには吹かぬ

岸和田川柳会

土橋

房枝報

当確があまりに早くしらけ寝る
棄権して文句ばかり言うてはる
洪滞の先頭走る選挙カー
正解を掴みきれない日の虚ろ
情念の女を捨ててから虚ろ
好景気虚ろにひびくフリーター
正論を吐くから強い風当り
虚ろから目覚めた蝶が脱皮する
独り居て虚ろに過ぐす時が好き
盆梅の虚ろな幹の先に花
虚ろから凍と芽を出す屋久の杉
輝ける球児虚ろにする大人
虚ろなる心払った千の風
千の風虚ろなわたし慰めに
空つばのところが愛に飢えている

尚士 幸雀 庸佑 照子 重人 典子 昭二 比ろ志 乃りこ 勲弘 秀夫 求芽
ゆい ダン吉 香代 さち子 みね 泰弘 准一 守 淳子 幸子 寿海 淳風 東吉 当代 夕胡

悩む子がやっと開いた胸の内
世界中核廃絶が当り前
くじ運はあなたを当てて使い切る
オープン仲がずれたす出世道
オープン花輪ライバル名をならべ
年金をオープンにして支え合う
オープンなわりに本音は出さぬ人
オープン価格分かつたようわからな
リストラの肋に刺さる虫の声
蛙蛇いじくりまわした少年期
鈍感力備えいじりに耐えている
消え去った片方の眉いじり過ぎ
いじるほど日本の国が変になる
いじつてはこわして伸びる発明家

川柳ふうもん吟社

夏目

一粒報

生か死か分からず明日の種を蒔く
魔法だと思つていても面白い
生か死か病魔に勝つて蘇り
ぼろかすに叱る親父の眼に涙
母の乳房は抜群生きてゆくエキス
嘘ついていると一日淋しいね
ぼろかすの人生だつて花は咲く
子を五人育てエキスが五つある
生き抜いて死なず毛頭意に置かず
家計簿に魔法かけたら黒になる
ぼろかすに言いつつ本音惚れている
禍いを生み出す口がよく滑り
生か死か友の年賀が届かない

俊昭 笑司 芳子 洋 植代 和美 珠子 保州 仁緑 岩夫 弘子 ふみよ 房枝 蛙城
一京 勝 洋々 孝男 一瑤 金洋 金祥 無限 志緒 稔 清信 あしび 穀

ぼろかすに言つてもウチの嫁が一
断崖絶壁生か死考える
残るは妻だと決めていた誤算
人間は生は難かし死は易し
太陽の魔法が怖い雪おんな
果議選何か魔法はないかしら
乙女の日防空壕で戦いた
寝つけない筈に魔法かけてみる
ニコチンのエキス体に毒を巻く
エキス飲みきれない嘘をつき通す
生か死か迷い基石を打っている
魔法瓶二人の努力冷やさない
詐欺という魔法がこの世狂わせる
マジックと判つているが魔法だよ
いつか魔法が効かなくなった子の育ち
生か死か神のみぞ知る癌手術
逆鱗に触れ生か死を彷徨える

むらくも川柳会

毛利

爛漫の花がぼんぼり離さない
ぼんぼりに勇氣を貰う里の春
ぼんぼりで桜の精がたわむれる
夜さくらへ赤いぼんぼり恋模様
ぼんぼりもちよつぱり化粧の花の朝
ぼんぼりの下ではじける笑い声
ぼんぼりに店の繁昌願ひ込め
右左揺れてぼんぼり風に乗る
夜桜にさそわれぼんぼりともる道
満開の花引立てるぼんぼりが

かをる 雅女 美恵子 清帆 昌鼓 かおる 春名 善夫 益子 諏訪男 圭一郎 義徳 茂登子 宗明 美雪 由美子 一粹 幸報 幸報 蘭水 克子 信夫 惠美子 彰 美保 定子 幸 ます美 英男

ばんぼりのまわりで乱舞花の精
ばんぼりで夜桜さらに艶を出す
ばんぼりに涙の染みあたとがある
ばんぼりで引き立つ友の薄化粧
ばんぼりが雨は無情と言っていた
ばんぼりにせかれ桜開きだす
ばんぼりに誘われ花に逢いにくる
ばんぼりを点けて童謡口ずさむ
夜桜のばんぼりととても褒め上手

川柳塔唐津

仁部

四郎報

夢うつつ振り向け老いの日向ぼっこ

晴翠

絶筆の句が出来ません死ねません

勝視

達ちゃん新聞第7号で卒業す

實

企業努力寺も霊園広げて

正剣

冬の午後縁でまどろむ小さい幸

蜂朗

作者不詳だから身に染む千の風

水笑

もともとはPTAは法ざらい

四郎

嫁姑忘れ上手で仲がいい

輝夫

街中も独り歩きが怖い夜

高明

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

美しい国の船出は多事多難

富美子

アキシヨンの手始めという咳払い

大輪

筋書きを幾つも持っている若さ

輝子

新芽から命の風が吹いてくる

夕胡

若い気でいるのに手足付いてこぬ

英子

若いうちの苦勞を今は感謝する

豊太

若さとは真つ白な道進むだけ

順子

魅力的なマニフェストだ一票を
白の魅力白に勝つ色見当らず
じつくりと醸す魅力のいぶし銀
健康は土の魅力と手を繋ぐ
魅力的なナースまばゆい回復期
昭和史に魅力の笑顔植木節
幾多の苦難越えてまあるい石になる
引き出しに過去のコントが溢れてる
ひと言の多い姑にもあるぬくみ
団塊の海を泳いできたピエロ
物忘れ多いがそれも年の功
削除キーばかりを押している西日
口数の多い割りには骨がない
入学へ多感な春を謳歌する
シンブルに生きて多くを語らない
監督が演じてみせる酔ったふり
アキシヨンの遅い男は酔で絞める
アキシオンをおこす女の赤い靴
気の弱さ隠すアキシオン派手になる
中国のアキシオンだらう黄砂舞う
アキシオンを真似たお釣りが医者通い
アキシヨンの最たるものは仁王様
アキシオンへ気付けてくれる君が好き

三男
紀子
克子
和子
さち子
和香
登美代
徑子
稚代
朱夏
あきこ
利治
寿子
よりこ
三喜夫
准一
裕美
紀久子
小雪
佐一
保州
怜

西宮北口川柳会

黒田

能子報

長生さも試練と思うさくら散る

富喜子

ケセラセラ貴男まかせの虫媒花

萬的

野辺に咲く花に詩情を貰う春

折杭

造花まで春だの顔をする

求芽

花の頃たった一人に愛されて
葉の花と桜が映える無人駅
主役にはなれない花が香くわしい
火の玉の回廊駆けるお水取り
用意どん校舎の廊下拭き掃除
立たされた廊下の思い出だけ残り
真つ直ぐな廊下にうかと油断する
試す気で甘い言葉をかけてくる
追試験いつもの顔が揃ってる
犬の知恵試してみても犬でした
風任せ愚直に暮らす老いの試歩
郷愁に浸る大学芋の味
肉じゃがを老母へ頼んだ里帰り
腰まげて頑張る祖母の背に学ぶ
芋焼酎飲んで一曲田原坂
会席に袴を正した芋もある
親分になれと親芋食わされし
子育てのポテトサラダがよく笑う
この辺で泣いて相手の出方待つ
遠い国の民話聞かせてお月様
下萌ゆるこんな草にも名のありし
長寿とは残されること計報手に
何回も蹴られつ放しの石もあり
光つる指貫祖母の金メダル
スーパで似たもの夫婦肩を寄せ
積み上げた絆すべてを許し合う

直
正和
わこ
安一
歳子
晴美
光久
江美
いたる
順子
曙蝶
千代
哲男
五月
比志
嘉代子
松煙
紀乃
美代子
哲子
春蘭
二英
奮水
耕治
美籠

はたる川柳同好会

水野

黒兎報

余生まだガンの話を好きな人

契子

話す度縫目がどこかはころびる
 ここだけの話が少し食い違ふ
 どうぞとは言わないうままに黄砂降る
 びつたりと合うのに話纏まらず
 言いよと少し残したわだかまり
 四月には多くの未来跳ねまわる
 花明り寄り添い歩くツーショット
 未来行き銀河鉄道待つてます
 ジーパンが脱げず人呼ぶ試着室
 その日暮らし未来指向と言われても
 ささやかれば二ですとお断り
 びつたりとスーツ姿の目立つ春
 アメちゃんどうぞ午後の電車があたにかい
 国の未来気になりうかと死ねません
 けれん味のない訥弁はお人柄

川柳クラブわたの花

山本

宏至報

レジ袋使わぬ工夫する私
 あこがれのスターの親にあこがれる
 派手な服装相応の苦労働
 日記帳書けば火種の元もめる
 五円玉チラシを追った日の遠く
 飼い主によい犬だけど気が弱い
 旨い漬物があつてごはんがよく進む
 ウォーキング老いのパワりの源に
 妻の性格がガリリと変る一墨側
 色褪せた手帳の端に残る過去
 六年間夢追いかけたランドセル
 旅立ちの日の青空よ胸弾む

宇乃子 見清 桂子 美智代 久子 黒兎 柳童 勇治 幹治 信男 長一 禮子 春代 肋骨 勝

八寿子 克美 愛子 孝子 和子 ますみ ミツ子 君江 耀一 民 知佐子 美代子

実績で手術したがる若い医師
 光と闇があるから人は安らげる
 定年後妻のパワーに押し切られ
 信号待ち出来ぬ夫と日暮す
 お役人借金上手お手のもの
 色男逃げ足だけはパワーあり
 握手され握り返すもシヤクの種
 お庭番雇いでいるぞ週刊誌
 おれよりもご馳走食っているペット
 舟唄を聴いてあの日の酒を恋う
 知らぬ振り忘れたふりも老いの知恵
 許せたら肩のこりなぞ尻の河童
 リベンジへパワー溜めてる力瘤
 万歩計歩幅広げる春の靴
 若い人いつも心に軽い恋
 微笑につい滑らした口悔やむ
 木漏れ日の中は私の小宇宙
 合格の日から日記は白いまま

尼崎尾浜川柳会

山田

耕治報

食卓の匂をひと口足るを知る
 いそいと羨糸切る宮参り
 年金があるから小遣い足りている
 螺旋階段秘密を抱いてそつと降り
 足らぬと二人で埋めて生きて来た
 運それは心の中に出番待つ
 戦中を思えばすべて足りてます
 振れた糸氣長に解す妻がいる
 農に生き名刺を持たず足りている

莊治 博子 俊子 たえこ 正春 浩三 幸枝 晴美 宏 美はる 欣子 ふりこ 義明 いつふみ 宏至 はじむ 妙子 一風

紀乃 桃花 江美 全彦 靖真 宏一 亀与子 よし子 美代子

自分史へ辞書を枕に寝てしま
 飲み足りぬ顔にお開き言う役目
 余るほどもう薬をもて余す
 年輪は見せず桜は咲き誇る
 お祝い靴が大地を踏みしめる
 羨糸袖も通さず逝つたひと
 姿見の指図を受けて旅支度
 言い訳はなかった自分褒めてやる
 満開のさくらの下で聞く計報
 物足りる暮しが心癒せさせる
 爛漫の桜に日本の心問う
 糸切れた風に自由な空はない
 差し向い居心地もよし蒼膳

八尾市民川柳会

宮西

弥生報

頂いた想定外の熨斗袋
 パワー抱き自己目標へ汗を積む
 気配りの影を味方にして生きる
 煩惱を打つ警策の芽えた音
 新調のスーツ駆け込む春の駅
 煙突のけむりに化けた下心
 黙々とむすび類張る熟婦り
 新人にさん付けをする学歴差
 もくもくと稽古重ねて大銀杏
 するすると胸にとけこむほめ言葉
 花びらの一枚ことにある祈り
 新人は新人同士カタカナ語
 下心捨てた男が光らない
 合掌の指折つてる下心

里江 耕治 五月 勝巳 イサミ 昭三 正治 孝一 朋月 きよし 義芳 比ろ志 美籠

ますみ 秋雄 欣之 はじむ あかり 浩三 耀一 いさお 宏至 加央里 柳伸 扶美代 一風

もくもくの汗が実る日くるだろう
能登の地にもくもく動むボランティア
天の青押しあげる花の色
路の臺ほろろ揚げて誕生日
震災の村へ今年も来たツバメ
春風に乘る自転車は宇宙まで
タンポポの綿毛にもある下心
満開の場所取り走る初仕事
黙々と働く父で背がぬくい
ふるさととは心なく開け放し
呱呱の声聞くまで折る親ごころ

川柳花の輪

妻谷 重風報

女の子ままと母になりたがり
レモンティー一つで熟女よくはしゃぐ
ばあちゃんも雛を飾って春を待つ
よく笑う女にかわる里帰り
生まれ落ちた時から女演じてる
税重く財布は軽く心泣く
税金をあの手この手がムダ使い
免税店土産探しててちつてる
好きな金有ったら有るで相続税
申告に高い入れ歯が活きてくる
税金で自然破壊が進められ

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

任されたものの財布が軽すぎる
患うて夫婦の味が滲みでる
嫁の味日毎になれていく同居

ダン吉 泰子 薫 やすの 重風 音成 隆盛 勉一 ミヨノ 一笑 善栄 隆子 加津子 ますみ シマ子

目刺しの香一人の午後の小さき幸
担任を選べないから塾流行る
任せとき子が頼もしくなってくる
任せたら解けた話がまたもつれ
口いっぱい春がひろがる木の芽和え
人まかせ一番危険な老の日

大原川柳社

山本 玉恵報

黒卒の母に今でも叱られる
生涯で笑い三分で以下地獄
春揃う指から二月漏れていた
まつ黒いカラスが無実だと叫ぶ
柳友のはげまし孤独忘れさす
大正の殻が脱けない傷ぐすり
真直な道でなかつた足の跡
かたくなな心ひらいて妥協する
温暖化開花ばかりを急ぎ立てる
蛇口より出口の広い年金で
集会所渦巻いている理想論
合格の花があちこち咲きほこり
暖冬へ良い事はかりはないようだ
冬ごもり羽の手入れをしています
黒豆で休耕田が息をつき
数の無い帽子をまたも置き忘れ
腹黒い人に釣られてつい喋り
貧しくも正直者の自負がある
有難や妻の怒りに煙草止め
美味そうに父が吸うてる長キセル
黒い服これも道具と持たす母

あすき 烈 能子 喜美子 慶子 香住 敏夫 さちこ 地佳平 はじ芽 南花 妻子 辰江 悦子 喜美子 巴子 美佐子 みさえ たつ子 あすなろ エミ子 己吉子 静子 絹子 恵湖 とめの 文代

一服の思案で明日の策を練る
黒板に女独りの予定表
白黒のけじめに母の呆け上手

川柳ささやま

遠山 可住報

ライバルが懐かしくなる歳となり
理想像勝手に決めて焦ってる
ライバルに飲ませる酒にうそがない
もう少し生きる理想を追ってみる
ありがたいライバル友は小山椒
法律で何かと辞書に聞いてみる
愛燦々理想の夢の設計図
親と子で右往左往の理想論
現実と理想の中で生きてます
料理メモロボロボロになり宝もの
夢いっぱい女の理想皿に盛る
生涯のライバル姑も女偏
六法で愛と恋との後始末
おしどりと呼ばれて欲も言うとなぜ
アルバムに遠い理想が燃えたまま

川柳塔なら

坊農 柳弘報

小言ではないと前置きして小言
おおごとなる前ですわありがとう
おだやかな母の寝息の守子唄
朝ドラを観ないと事が始まらぬ
慣れている靴で転んだ雪の道
過ぎし日の恋の形見をししおどし
天を指す指が途中で曲がり出す

あやこ 夏子 玉恵 純子 二英 文子 美紗子 美緒子 靖子 多美子 開子 照代 かほる つや子 富美 哲男 芳郎 可住 ささ恵 美佐女 美はる 蘭香 春雄 ふりこ 茂雄

もてますどんな人にも合う花瓶
天衣無縫両手ひろげて呱呱の声
小遣いを貰いに小言聞きに行く
言うまいと決めた小言を言う涙
コンパクトたんで小言まだつづき
物差しで上手に背中搔いてはる
お小言を聞きながら飲む只の酒
妻の小言BGMにして眠る
世渡りの下手な夫へ出る小言
不機嫌な花に小言を撒いている
大声を出してストレス天へ吐く
平凡に慣れて吃水線下げる
賞罰の無い身で天と対話する
耳ふたつどちらも聞いてない小言
父からの返事でしょうか風花よ
天に手を伸ばすみどり児の命
介護する母は天女のように眠る
旅立ちの蒼天に置く願いごと
慣れるって怖いじわじわ朱に染まる
汗流せ母の小言が快い
とつくりの数と並べている小言
幸せの風を運んでくる花瓶
天からの子守歌だよ千の風

川柳塔鹿野みか月

土橋

博一 積子 利昭 六助 千梢 完次 真理子 富子 道子 一風 洋子 國治 隆盛 孝子 のりこ 美千子 弥生 和夫 朝子 ダン吉 理恵 秋雄 恭昌 螢報

災いはからくりがあり避けられぬ
まだ少し頭脳カラクリ作動する
天才の脳の手にも神の手にあり花の園
からくりの糸がもつれた一億円
春よろこんでカラクリの爪をとぐ
相撲とりからくり上手 上手投げ
からくりがわからないから面白い
ふる里へからくりはなし母が居る
春雷を後手にして花咲かす
水平に浮かぶからくり蟹気楼
からくりで儲けた金はすぐ消える
年金のカラクリ解けば腹が立つ
合併のからくり値上げばかりする
何ひとつからくりもない良いくらし
からくりの茶坊主の顔無表情
愛のからくり母の笑顔にとてもゆく
からくりの裏をかいいてる生きてる
からくりはどうあれ母の背を習う
からくりを背負う正直者の背な
生意氣を通して人の役に立ち
からくりか臍のあたりが賑やか
生意氣な顔を洗った四月馬鹿

川柳茶ばしら

板山まみ子報

はるお 諷人 永子 睦子 実満 富久江 久枝 房子 くに子 孔美子 節子 弘子 茶子 公子 武子 幸枝 彩子 和子 宣子 きみ子 盛桜 保子 菊乃 螢

辛抱を説けば時代の差と言われ
気がつけばはや息子にも初白髪
弱音はくこと覚えれば楽なのに
わかあゆ川柳会 松本はるみ報
いろいろなドラマもあつて旅の空
腕ぐみを解いてゆつくりだす答え
わたしにも休暇がほしいとお母さん
ちびっ子の芝居に小銭はたきこみ
子には子の親には親の旅日記
旅先で拾った恋をどうしよう
主義主張あるのかトンボの目が光る
立ち話もういいだろう流れ星
長旅へ真つ直ぐゆけと道祖神

長柳会

村上直樹報

秀水 かつ子 まみ子 かつ子 ちよえ 伸子 聖子 はるみ 恵美子 好栄 博利 清泉 直樹 武男 ヒロ 靖博 輝子 たけし 靖子 史 不二雄 幸雄 マサ 美代子 明子

満月が私の邪心照らし出す
親も子も年金少しやせてきた
春雨にしっかりと濡れて風邪をひく
半世紀照る日曇る日勤め終え
照る月と花びら盃に受けて呑む
美人立つ照葉に映える寺の庭
ちちははの教えが照らす水たまり
照れかくしきつと好きだと思つてる
母の墓碑照らす夕日に千の風
金婚に照る日曇る日長い道
年金が年金看る長寿国
残照に映える夫婦のつづら折り
腕白の鉢を逃げる猫のひげ
年金に感謝春呼ぶ花を買う
言い訳を半分飲んだ風の向き

川柳塔きやらばく

福代

天雀報

敬二 正美 正博 正一 淳司 もこ 富美子 よしお 英美 正子 和代 三和子 けい子 芳野 和子

月は樹に遠くに見えるわが故郷
ありがたやまたこの足で墓参り
暖冬といえお水取りまで冴え返す
川柳の浅瀬で群れているメダカ
法螺貝は時どきウソの音を出す
色々の愛に恵まれ生きてきた
合併で市内に熊やししが出る
ける石が私に返る時もある
手をひらく運命線も皺の中
三月十日時実新子星になる
れんげ菜の花新子の旅へ終りくる

かわはら川柳会

上田

俊路報

瑞枝 やえ ふみ 蘭 すみゑ 天雀 章江 那珂子 日枝子 千代 田鶴 俊路 好道 静子 雅子 泰良 登生 寿子 悦子 余吏子 茜報 博泉 弘一 ちち子 麗

旅立ちの春を惜しんで桜咲く
風になんかならないずっと君の側
後になり先にもなつて流し雛
歳月が癒しになつてくれました
ではまたと別れてすぐに来るメール
拉致という哀しい別れ許せない
お別れは新たな道の始発駅
お別れの握手涙が離さない
これからと元気に四肢をふむ傘寿
力士みな人には言えない野心もつ
八百長が無いはず無いと割り切るう
番付表郷土力士の虫めがね
相撲取り育てた母をふと思う
梅満開友のやさしい誘い来る
誘われて見たい人には誘われず
俺に似てすぐ迷走をするソフト
幸せのひとつに朝のお味噌汁
単身の夫はゴミの中で住み
目線合わせ慕熱の心聞かせる
爪切りながら開花予報を聞いている
本棚に少年になる森がある
フアイト出せと朝日に活を入れられる
いい朝だ昨日と違う陽が昇る
猫抱いて凍る話を聞いている
寝て寝てまた寝る気叩き込む

はびきの市民川柳会

徳山みつこ報

一炊 利昭 とし子 茜 ただし かすみ 朝子 ルイ子 鈍甲 薫 勇太郎 柳弘 恵子 高栄 仁清 弘風 一風 寿男 庸佑 妻子 郁夫 洋 たもつ 典子 修

脳ミソがだんだん減つて軽くなり
大臣の軽い返事で頼りない

一壺 敏

選挙戦軽い口調のマニエースト
思いきり笑って体軽くする

ひたひたと同時通訳遅れまじ
有頂天ひたと迫る黒い影

ひたひたとライバル迫る恐怖感
お水取りひたひた冬が舞い戻り

ひたひたと地球温暖進んでる
頂上の椅子にひたひた迫る音

ひたひたの愛の雫を溜めてゆく
ひたひたと心に沁みる母の声

景色などどうでもいいたグルメ族
グルメ街軽い財布ではじかれる

グルメめぐり行き着く先は妻の味
グルメツアー男の客はボク一人

グルメよりやっぱり母の塩かげん
四季の舌鈍感にした養殖魚

福耳のままで終わった平社員
補聴器を切った雑音から逃れ

聞く耳を持たぬ男の向こう傷
耳だけは酔わずに聞いていた酒席

母だけはだませなかった地獄耳
いい噂されているのか耳痒い

都合よい耳で時々遠くなる
耳くそにこだましている妻の愚痴

聞き上手の耳はいつでも笑ってる
耳掃除したら聞こえる神の声

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

桜見の客は酒のみしゃべるだけ

久仁子

みつこ

猿 沓

志 洋

章 司

美 喜

真 一

重 人

アヤ子

りつこ

かつみ

喜久子

耕 策

いさお

扶美代

惠 勇

一 知

庸 佑

泰 子

六 点

悦 子

ヨシ枝

美代子

進

ダン吉

光 男

南大阪川柳会

吉川

寿美報

父の墓彼岸桜は山の墓地
手拍子へ見事に咲いて散るさくら
花吹雪老いた夫婦のしあわせ度
お花見に人も黄砂も雪もくる
春風心残して散る桜
咲きそめの桜哀れや春風
新学期校舎目掛けて吹く黄砂
地下街で右往左往の雀見た
句作りに辞典頼りにひとひねり
何かしら牛歩の列に並んでる
人生の付録の中にあるぬく味
三日めも本日休診貼った儘
傷ついた過去を忘れるのも老いか
物の無い時代を生きて来た自信
夢語るとき少年の目に戻る

南大阪川柳会

吉川

寿美報

しづ子

芳 子

年 代

勝 巳

幸 子

純

東 園

矢 薫

忠

ユキ子

寛 之

和 子

武庫坊

守 弘

宏 一

人気者同窓会で今も活き
商人はばちばちだんねとする揉み手
背の曲りばちばち席を譲られる
はちばちと嘘のメッキが剥がれ出す
試歩の足春の大地を踏みしめる
咲くらしい予想で組んだスケジュール
京おんならしくと仕込む舞扇
聞き役の位置で貉が居るらしい
輪島塗り転けてすまぬ震度6
振り上げた拳言ひ訳探してる
感嘆詞連発させるシャボン玉
噂とは怖いウイリスかも知れぬ
胸の内探る小石を投げてみる
気象庁の予報笑っている桜
これ以上叱ると僕は酸化する
視野広く持とうか千の風になり
裏の裏のぞいてからのアレギー
好き勝手食べほうだいのエコ知らず
人気出て少し裾野を広げます

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

式次第妥協はしない鬼瓦
ちぐはぐに胸のぼたんを掛け違え
お互いに誘い合ってる梯子酒
点滅に進むよりない人生路
言い訳もやっぱり聞いてあげないと
ちぐはぐになってたまるか関白ぞ
街に疲れくへ帰って来たニート
神のいたずら入学式に散る桜

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

豊中もくせい川柳会

江見 見清報

風となり帰る故郷や過疎の村
とありえず平和でいいな通り抜け
金婚式とうに済ませて今一人

不器用なお人でお辞儀だけの役
愛します軽く言うてる結婚式

葬式はケチつておけと言つてある
新製品使ひこなせぬ戦中派

新しいものは好きだが手は出さぬ
白粉の匂いが取れぬ帰り道

新鮮に聞こえた夫のありがどう
がなばつて新聞配達母も子も

帰省の子お義理で来たか花も見ず
昔から鈍感力は冴えてゐる

セレモニ―流れる月日塞き止める
年毎に夫婦仲良く子に還る

介護ロボ温い手だつたら頼みたい
うぐいすの初音嬉しい里帰り

古稀の恋噛みしめながら酒を飲む
日々新たな心持たしさくら散る

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

若い日へ帰れる駅が一つある
美 義

高知川柳社

川竹

松風報

暮らし上手余裕を持つて趣味に生き
甘い夢追うほど余裕ない生活

金を貸す余裕ないのに頼られる
日日好日心ゆつたり五七五

年金で余裕ないのに趣味に凝り
横綱が余裕の笑みで受ける賞

馬鹿になり切れば心に出た余裕
みどり

馬鹿になり切れば心に出た余裕
みどり

馬鹿になり切れば心に出た余裕
みどり

馬鹿になり切れば心に出た余裕
みどり

久太郎

寅次郎

タミ

見清

勇治

寿美子

知香子

肋骨

則彦

(矢)五月

都代子

満寿巳

尚士

夢

美智代

玲子

巴子

早人

比ろ志

美 義

美 義

美 義

美 義

美 義

美 義

美 義

美 義

美 義

四万十の恵みたつぷり川漁師
産声にたつぷり母性満ちてくる
充電がたつぷり出来た里帰り
楽あれば苦あり昔の付けが来る
楽な方へ方へ自然と足が向く
楽勝と思う気持が足すくう
楽園に見える隣の青い芝
金はなし借金もなし身も軽い
上役が帰り楽しい酒になり
楽ばかり求めた結果ゴミの山

川柳大阪

長井

善純報

どないです国づくりより人づくり
どないやとマस्कしたまま風邪見舞
どないしよう使いきれない遺産わけ
焦るなど手足ゆつくり動いてる
おひな様かたづけ焦る適齢期
百歳は笑う焦つたことはいない
焦らずに四月来るのを待つている
焦つたら身体を壊すタイエット
焦らずに北との協議アメとムチ
長寿国焦ることないまだ八十路
回るなよゴールは今に見えてくる
回答は一間五秒の一分間

先生も親も焦らず反抗期
焦る背を妻の笑顔が助け舟
階段の途中で発車ベルが鳴る
成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

成るようになる人生を焦るまい
ゆつくりと焦らず生きている私

美智恵

良雄

京子

功

幸子

まき子

てるみ

美々

松風

和江

信醉

章久

美籠

喜楽

花笑

笑風

利昭

一步

彦太

五月

青道

珠生

鉄心

洛醉

まつお

朝子

芳香

持ち味のびりりと利いた友と飲む
地方選ゆつたり花見出来ません
菜の花を見たい所にビルが建ち
はつとけばやがて芽を出す悪の知恵
筋道を立てて一言ありがとう
凡人で不平不満がたんとある
平凡で金は無いけどある笑い
戦争を知らずに来れた九条で
平凡か非凡か神の道しるべ
平凡かと言うがあの目は侮れぬ
平凡も非凡の一つかも知れぬ
平凡に過しましようとかボクの影
平凡でも家族の笑顔ありがたい

すみよし川柳会

岩崎

公誠報

気が付けば母とおんなじ丸い背な
大人への一歩を刻むワンルーム
百均で部屋の模様を変えました
性格は正反対の双生児
シンクロの手足躍動すばらしい
似てはしい所は似ずには育ち
この部屋で二人の一步踏み出した
億稼く右腕も元はもみじの手
彼岸きてよく似た顔が勢揃い
部屋ごとのテレビに家族ひきさかれ
幼な子の小さいその手夢つかむ
すれちがい他人の空似でおいかける
吹く風もマシユマロに似た春が好き
喜ばす術心得る似顔絵師

喜ばす術心得る似顔絵師

喜ばす術心得る似顔絵師

喜ばす術心得る似顔絵師

喜ばす術心得る似顔絵師

喜ばす術心得る似顔絵師

喜ばす術心得る似顔絵師

喜ばす術心得る似顔絵師

喜ばす術心得る似顔絵師

喜ばす術心得る似顔絵師

喜ばす術心得る似顔絵師

喜ばす術心得る似顔絵師

喜ばす術心得る似顔絵師

喜ばす術心得る似顔絵師

隆司

紀雄

福世

功

柳弘

川童

いっふみ

勝弘

ひろゑ

ダン吉

東吉

孝一

善純

萌

かりん

日の出

桃花

舞夢

伸子

文香

定子

ヒロ

裕之

明江

幸子

篤子

いわゑ

てのひらに今の私をのせてみる
声ひばり姿小百合に似る自慢
部屋中央玉座にすわる人一人
手作りの愛がこばれて倦怠期

いずも川柳会

佐藤

治代報

消えぬよう油性インクで太く書く
愛情もこむら返りがある明日
ワルツなら軽いムードで踊れそう
残雪へあまくささやく銀の雨
ムードには遠く梅漬けラッキョ漬け
油切れ咳き込んでゐる発動機
隙間から人情少し顔を出し
結局は油切れだと医者が言う
名曲のムードに酔ってアンコール
終着の駅で油を確かめる
たてまえへちらちら本音のぞかせる
判てますちらちら視線感じます
銀色のネジが少し弛みがち
銀行で忘れ傘する雨上がり
お情けをかけて下さいお月さま
ちらちらと無情の風に桜散る
心臓の回りで散っているさくら
情熱を音に託して打つ太鼓
ほんわかとムードに酔っているワイン
手で掬う水も情けも洩れやすい
ほんとは何もなかった銀の匙
車座になるとムードが盛り上がる
あちこちへ無駄な油を売り歩く

みつ子
公誠
蕉子
遠野

たえこ
祐次
佳子
富恵
桂子
徳子
敬子
治代
テル子
美江子
左え
左余
歌子
多輝子
喜子
多賀子
寿美
玲子
多喜
博子
すみこ
満江
浜丘

情けの海おぼれてばかり泳げない
油絵の裸婦にも欲しい陽の匂い
むらさきのムードに弱い花水木
ちらちらと横目でみてる好きな人
銀座まで餌を探しに来たカラス
零れるほどのムードで魚泳がせる
ちらちらに神さえ雲を踏みはずす

城北川柳会

小谷

集一報

改革にいつもはだかる予算枠
助け合う枠から出ない夫婦独楽
賞味期限枠外にある小さな字
型枠に子供をはめる親のエゴ
そこそこの暮しが好きな目玉焼き
生き馬の目を抜く核が虚勢張る
ガミガミとすぐ怒鳴るのは老化です
興奮のつばに落ちるのは目惚れ
アメリカの言う方だけに向いている
レーダーが予知する妻の低気圧
知らぬ事知らずに喜んで幸せだ
病院で年末年始冬ごもり
年毎に診察券の数ふえる
酔眼に花も女も美しい
サスペンス追うと俄になる時計
百人の教師に勝る父の背な
雑念がよきつて経は上の空
好きな子をもう見つけてる保育園
嵐来ると聞いて見に行く夕桜
幸せな時間を過す無駄遣い

蘭水
房子
美佐子
さみえ
茂美
文子
ちかし

東吉
千里
典子
集一
ひさ乃
昭
あやめ
朝子
正
明子
昭子
高栄
萬的
順三
達子
睦子
志華子
郁夫
倫子
とし子

ケイタイの絵文字日本語食い荒らす
やんわりと目惚れ話聞かされる
何不自由なしに明日も予約する
生物学的父と決った訳でなし
手を振って歩けば影も元氣いい
明日逢えることだけ思い床に就く
わが頭に今日の日にけを問うて起き
すつびんで勝負してまず健康美
親の夢詰めた鮑が重すぎる
日溜りをじっと待ってた鬼瓦

翠洋会

谷口

義報

人生ってほんのうとうとする間
真夜中は月もうとうとするだろう
うとうとどこでも寝る老母達者
うとうととぐつすり混じる春電車
うとうとと暮らしてゴール忘れてる
風聞にきき耳立てるすねのきす
風に立つ少年夢を追う瞳
子の立つては景色がまた変り
頂点に立つ欲びと孤独感
乗るとすぐ立つてくれたは茶髪の子
立ってたら使われるので座ってる
凶弾に倒れてもなお正義立つ
何もかも見えなくなつて立ちつくす
変り身の早さ立ったり座ったり
ウズウズと出番待ってる夏の風
豆御飯満面の笑み帰国の子
花冷えにしばしストロブ仕舞えない

弘風
麗
千歩
ただし
美智子
ルイ子
たもつ
利明
はじめ
修
楓楽
志華子
桃花
さと美
千梢
久峰
集一
すみ子
正雄
茶々
蕉子
昭
日の出
千歩
捷也
絹子
春

札束に埋れよるこぶ白昼夢
運命の糸は細いが続いてる
寒戻り鼻水一つ春の雨
浮気して関白の座を滑り落ち
千の風春爛漫の薫風忌
産声に大物描く親こころ
黒幕の大物がいる水田町
大物は頷くだけで事がすみ
おぼろ酔いお小言ならば明日にして
不揃いの皿に盛られてる個性

川柳さんだ 北野 哲男報

舞夢 水昇 れんげ 尚士 満作 照子 恭昌 義理 美龍
千代子 和代 歳子 修子 章子 雅司 藤朗 朋月 キヨミ 光久 忠 順子 哲男 美紗子 宣子 好文 二英

誰にでも笑顔をくれる赤ん坊
大臣賞喜寿の祝に花添える

川柳塔まつえ吟社

三島

沁丘報

(長)哲夫 正和

ばかばかとうっかり用事思い出し
ばかばかの陽ざし終らぬ立ち話

許し合いばかばかと和む嫁姑
ばかばかとしてはおれぬ定年だ

ばかばかとさせる氣にするいい話
ばかばかと人出を誘う木次土手

宴のあと昔の恋とすれ違ふ
宴さなかな天下国家が動きだす

眠まれる宴の中のウーロン茶
桜の下新人社員隠し芸

同窓の宴会白髪なつかしむ
宴会と言つては足がよそへ行く

やさしい笑顔向けるナースの束ね髪
髪飾り想い出に買う京の旅

久方に母を見舞つて髪を梳く
逢つて足るただそれだけの髪洗う

しなやかに髪をあなただけの好みとす
呑気でもせつかちであれ髪はのび

キャンパスをはみ出す孫の絵が温い
絵に描いて自分の姿確かめる

母と娘が楽しく語る絵かき帳
絵に描いた餅を食ふ二度重子

拙い絵も落款捺してはととする
まっ白な紙へ絵の具がびりり出す

朝霧が旅を囲んだハイウエー

博子 蘭

みち子 房子 畔

スズコ 柳歩

札子 小生

蘭水 静恵

知恵子 和歌子

紫晃 日出子

邦代 邦代

幸 幸

ちえこ 多賀子

政子 政子

たけし 幸子

鉤括弧で囲むわたしのテリトリー
手で囲むローソクの火は立ち上がる
さくらさくら花の下から火を囲む
鬼さんを囲む團児のわらべ歌
塀囲む家に悩みあるらしい

岩美川柳会

石谷美恵子報

軽い口一生無駄にすることも
軽はずみに言つた言葉がはね返る

軽快に運ぶ一万歩のリズム
重くもあり軽くもあるかわがいのち

軽い口うつかりはまる落とし穴
沈黙も軽いジョークで座が和む

泣き言や弱音を吐かず軽くゆく
びったりと似合う喪服を持っている

影だけはびったり添っている日暮れ
割れ鍋にとじ蓋人は似合いと言う

宣告にびったりやめた酒タバコ
びったりと夫に頼られ肩が凝る

水増しの光熱水費請求書
昨日は小雪今日は春告げ鳥が鳴く

鳥獣が乱開発に鳴いている
指かまへ平目の影に胸が鳴る

山海の珍珠に喉の奥が鳴る
満たされて海鳴りまでも心地よい

鶯が鳴けば私も春になる
貧乏神に学んだ知恵はてんこ盛り

学問をした子が親を捨てている

多喜 桂子 茂美 注湖

睦子 茶子 孝男

和枝 節子 葛子

清帆 完司

一京 雅女

和子 和子

蟹 蟹

はるお 圭一郎

重忠 重忠

忠良 公乃

公乃 公乃

一子 一子

蟹郎 蟹郎

金次郎はどは学問していない
不器用で盗んで学ぶことは無理
幼子のふとした仕草から学ぶ
学ぶことない番組が幅きかせ
晩学の森を彷徨う錆びた脳

吉川柳会

竹信

照彦報

ハードルが高すぎ国がノイローゼ
高すぎる子育て医療費生活費
高々とオリンピックの金メダル
高いところめがけて低い鼻が折れ
視聴率高いにこしたことはない
減っていく余生駆り立てられている
返すあてないが妻には借りがある
夜校に少しみだらに駆け抜ける
刈る髪が少しになれど同料金
ゴミ砂漠を和製ジープが駆け抜ける
稲の穂が垂れて顔出すヒエを刈る
減反に哀しくなる草刈機
稲刈る手母がいちばん輝く時
終の日の写真笑ったのを選ぶ
戦友会物語者達の顔写真
セピア色亡母の写真は温かい
内視鏡きれいに写り足軽し
電話機で写真を写す摩訶不思議
一枚の写真に惚れて嫁に来る
恩師らと写真同窓五十年
ヨコ文字が日本語闇に閉じ込める
病去り光とした闇の中

きみ子 一粒 幸枝 幸安 美恵子 次男 萩江 貞子 康子 瑞子 玲子 玲坊 睦子 由紀子 満 祐子 前喜美子 勝誉 かつみ 重忠 龍枝 日出子 鬼一 醉芙蓉 小生 風露 和子

びちゃびちゃとネコが水のむ闇の中
停電に臉を閉じて死んだ振り
悪人のまにに闇から救われる
闇夜道ひたひた音がついて来る
闇よりも怖い女の嫉妬心
暗闇に稲妻走り目もくらむ
闇の世を照らす小さな灯となろう
青写真何度描いてちげ起し

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

身の丈まで妻のプランに押し切られ
レモン一滴入れて憎しみ和らげる
抽出しに紙風船の夢ひとつ
指をさし僕を処刑した貴女
運動会風船尻にパンと割り
アメリカと北朝鮮の心理戦
心配そうな心理見ている聴診器
相合傘ふたりの心理試してる
ワタクシの心理見抜けぬレントゲン
温泉に籠って僕を消す話
風船より平和の使徒であるように
紫陽花が便宜を図る薄曇り
なにかある急に優しくなった妻
絶対に顔にはださぬ図りごと
機械化を図って消えた田植え唄
反乱を企む赤い唐辛子

岬川柳会

八十田洞庵報

波乱越え阿吽で生きる共白髪

石花菜 和枝 螢 京子 悠子 美津恵 常代 照彦 柳子 ヒサ子 成柳 一呑 てる 隼人 順風 花匠 然人 岳水 花峯 慕情 一花 五楽庵 和香

思い込みの垣根はずして嫁姑
戦場で看護婦歌う子守うた
つきあいを嫌う垣根の商い家
古い同士話す食事の現代化
接写して驚く花の美しさ
亡き夫の墓前で歌う千の風
内気だったあの子にや嫁も子もあるに
国会の波乱さえた美人妻
後からそっと支える温み
人情に触れる垣根に癒される
古傷に触れて戻らぬ仲となり
バラバラの友がつどいて面白い
見え隠れ覗いて見たい垣根ある
卯の花の垣根で葉笛鳴らした日
ひと波乱あつて窓の灯そっと消え
仲の良い夫婦バラバラにて浄土

富柳会

池

森子報

虎落猫親爺の千の風だろ
即答をガラスの底で泳がせる
即発の地雷を抱いた青春譜
傷心の即効薬に愛一字
すでもう答でているホワイデー
咲ききれず夢半分の落ち椿
蛇口全開春の息吹がまといつく
火の粉降る半分春になる修二会
糸口を辿って千の風と遇う
ごめんねの糸口そこにあつたのに

年子 廣作 蛙城 悦子 茂平 房枝 和美 桜琴 珠子 令子 洋子 富美子 洞庵 叔子 淳司 和子 一慧 鐘造 千華 紅紫朗 あかり 浩子 扶美代 冬虹

即答を迫られ舌が纏れ出す

なになわ登即席題は宇宙食

定年まで待つていました半分こ

花便り心の窓を開け放す

箸一膳茶碗一つの水の音

眠れない時計の中を泳ぐ亡母

難儀やな私の膝で遊ぶ鬼

マイペース歩ける靴が欲を言う

ひな祭り亡母の手元が目に見え

後半もがんならからと亀の足

その昔俺もお前も塗りの箸

糸口が見えて時計が動き出す

糸口に迷つて冬の野を走る

即身成仏DNAなりそのまんま

電話からもつれた糸の端が見え

糸口を手繰ればころないわたし

重すぎる愛へ即答避けておく

喜びも悲しいことも解く涙

言い訳の苦味を漱ぐ寒の水

寒がりの笑みを桜が温める

川柳塔打吹

野口

節子報

茫然と幸せ食べている老花

呆然と三途の川の向う岸

窓割られタンス荒らされ立ちつくす

無い無い無いとくも財布がない

伸び出した赤芽に英気もらつて

悪友が入ると伸びる梯子酒

隆彦

欣之

まりこ

澄子

彦次

登子

朋代

佳代

弘子

深雪

七朗

アキ

鬼焼

哲史

伸雄

奏子

信子

宏至

萩乃

森子

螢

幸子

清

公恵

善江

重忠

伸びる芽をまたちよん切った夜盗虫

背が伸びて踏み台代り使われる

背は縮むのによく伸びる髪と爪

猫のあくびは体が二倍ほど伸びる

あのひとの高さにいつかなる背伸び

先頭が鉢巻しめてワッショイショ

先頭はいや三歩下がってついて行く

先頭を走らす孫へ捲き戻し

先頭に目立ちたがり屋居るものだ

職退いて先頭の椅子ねらつて

先頭に飛び出し鼠取りに遭う

先頭を母の歩幅で歩く朝

百足競争の先頭が転んだ

先頭のおつちよこちよいが戦死する

露払い次も蔓も踏み倒す

穏やかな川面に鴨の親子連れ

鳥のよう着の身着のまま生きたいな

桜咲く孔雀負けじと羽ひろげ

鳥のよう羽搏きながら津軽越え

うぐいすが鳴いて鉄打つ手がはずむ

巣づくりの燕無駄口たたかない

夜の出会い鳥目の男に惚れられる

ジャズよりもオーケストラより鳥の声

鳥の囀り今日も私は生きて

堺川柳会

河内

月子報

雑種ですどんなところで生きられる

言い訳をしない貴方に負けました

さくら

義人

富恵

照彦

芳光

美ツ千

慎元

紀美恵

玲子

満

陸子

和枝

美知江

石花菜

完司

京子

龍枝

滋

孝恵

和子

美美子

玲坊

みち子

克枝

節子

苦の種と思わず見てやるニート

姑さんの耳近くなり遠くなり

種時けば生えたと決めていた不覚

耳掃除してくれる人欲しくなり

種なしのアケビは作れないものか

妹に勝たを譲ったお兄ちゃん

たんぼの綿毛嬉しい風を呼び

負けくせがつくと二の足ばかり踏み

にここと火種をいつも持ち歩き

耳栓をすり抜けてくる妻の愚痴

私には耳うちさねぬまだだった

時々留守電にする孤独癖

ハウスより露地の情が好きな種

さり気ない振りして耳はピンと立て

金婚へ種と仕掛けはございます

耳寄りな話が好きで元気で

恋の花咲かせる種を蒔いている

耳うちのひそひそ話をよく育ち

いやなこと聞かない耳で平和です

なまけ癖いつも自分に負けている

のら猫にミイチャン種をもろたら

誰が種まいたか知っているカラス

父ちゃんの留守母ちゃんがコップ酒

母の鉢ニートの種を育ててた

止めないでるんるん気分恋心

もめます種か畑か産む機械

参考になりましたとは負け惜しみ

六畳に四人暮らしは語り種

ルイ子

半銭

像山

日の出

時雄

八千代

朋月

恵勇

梓

玄也

千代

泰子

りつえ

雅明

かりん

冬虹

倅子

公誠

舞夢

萌

楓

五月

鐘造

潤子

伸子

としお

好

唯教

第12回「鶴 彬」川柳大賞作品募集

石川県かほく市出身の氏の業績を顕彰して全国から川柳を広く募集いたします。

応募規定 未発表句(現代を風刺または「命」を読み込んだ川柳)用紙自由

封書にて投句料同封。住所、氏名、年齢、職業、性別、電話番号明記。作品使用権は主催者に帰属します。

投句料 一〇〇〇円

応募期間 6月1日～8月3日

応募先 〒929-1193 石川県かほく市浜北ハ6-1

かほく市七塚庁舎生涯学習課内

第12回「鶴彬川柳大賞」公募係

☎ 076-283-7137

あかつき川柳会

とき 7月13日(金) 14時開場

会場 北区民センター

(地下鉄扇町2号B出口)
兼題 太陽・時計・猫 時事吟
投句先 〒599-0232 阪南市箱作

1586-14-102

森村 美花

第13回 五呂八川柳祭全国誌上大会 題と選者

「波」

辻 嬉久子(京都府)
浅利猪一郎(愛知県)
木本 朱夏(和歌山県)
高津戸 明(北海道)

「雑詠」

前田 一石(岡山県)
古俣 麻子(神奈川県)
古谷 恭一(高知県)
加藤かずこ(北海道)

投句料 一〇〇〇円 2句詠

規定用紙または便箋に〒住所氏名・☎

締切 七月三十一日(消印有効)

投句先 〒047-0021 小樽市入船2-23-3

斎藤はる香

TEL・FAX (0134) 25-5468

いわし川柳誌上大会

課題 「いわし」(新作2句連記)

投句料 1000円 句に同封

応募用紙 縦書き便箋可、住所氏名明記

締切 6月30日消印有効

賞品 特選5句生魚など1万円相当

準特選10句・秀句80句(賞品有)

応募先 〒288-0055 銚子市陣屋町1の17

名雪 凜々宛

☎・FAX 0479-22-0518

第8回 生駒市民川柳大会

日時 7月15日(日) 12時20分開場

会場 生駒市芸術会館(未楽来)

(近鉄生駒駅400m)

電話 0743-74-1101

お話し 露の五郎兵衛

事前投句 「つけ」

はがきで1句

宿題 「鳴る」

「稲妻」

「叩く」

「ソフト」

「だから」

13時30分

出句締切

参加費 1500円

(発表誌呈、出席者に限る)

〒630-0246

生駒市西松ヶ丘2-20

電話 0743-74-1101

FAX 0743-74-1220

お問い合わせ 吉川 卓方

電話 0743-74-6019

呈賞 市長賞他

主宰 生駒市他

柳界展望

告発の紙一枚が立ちあがる
木本 朱夏
○明日香川柳社創刊12周年記念全国誌上川柳大会の本社同人の成績は次の通り。
へ入賞

歌い終えた花がしずかに目を閉じる 木本 朱夏
不揃いのにぎりめしから歌になる 稲葉 冬葉
○第27回ときせん賞(19年4月号発表)の準ときせん賞 うちの子を叱ってくれてありがとう 田中 章子
○「怒り」の川柳コンクール2006年(応募1365句)に同人の次の句が優秀賞を獲得。
負担増また書き直す遺言 村上 直樹
▽御芳志御礼△
○小島蘭幸副主幹(竹原市)から退職記念に金一封拝受。
○西出楓楽理事長(大阪市)から句集発刊を記念して金一封拝受。

▼御供養拝受▲
村上ミツ子さん(同人・八尾市)から御主人七回忌の供養として金一封拝受。
▼計 報▲
●田中正坊氏(参予・豊中市)5月8日病気の為逝去86歳。11日加納会館で行われた葬儀にはみつ子副主幹 楓楽理事長他柳人数数参列。追悼文次号。
●石川侃流洞氏(同人・小野田市)、4月13日逝去91歳
▽柳人動向△
○「川柳讃歌」を執筆いただいている本津川計先生は7月8日(日)松原市民会館に於て「一人語りの長谷川伸劇場」二回目の公演をされる。要申込み。「NHKラジオ深夜便の集い」
▽訂正とお詫び△
五月号11三頁目次15行目、(ひとことノ小川注湖)↓(ひとことノ根岸方子)

新同人紹介

西村益子
求芽・たもつ・楓楽推薦

三浦きぬ
みつ子・楓楽・てる・朱夏推薦

119頁新同人、池原天馬氏の郵便番号689-0557。
4-689-0514
119頁2段、20行目「華音」六・号ノ「華音」六号
常任理事会115月7日(月)出席19名①第13回川柳塔まつりについて②特別常任理事会の開催について③川柳塔誌選者交替の件(檸檬抄)
○今後新しく勉強会を立ち上げられる方へ「川柳しませんか」20部差し上げます。事務所へ申出て下さい。

お知らせ

○川柳塔事務所移転のお知らせ
〒543-0052 大阪市天王寺区大道1-14-17-201 電話06-6779-3490 6月21日から業務開始。
○今後新しく勉強会を立ち上げられる方へ「川柳しませんか」20部差し上げます。事務所へ申出て下さい。

○第7回春はくろほこ川柳大会は4月1日、倉吉市で88名が出席して行われた。同人の秀句は次の通り。
自分史のどこにも並ぶ影がある。 鈴木 公弘
海岸で聞く流木の放浪記 石谷美恵子
百の窓百のドラマを写し出す 両川 無限
もののふの無念を知っている桜 鈴木 公弘
正装を解くと乳房の深呼吸 山本 玉恵
吸
○旭川原流川柳社創立二十一周年記念、第一回全国誌上大会で木本朱夏さん(常任理事・和歌山市)は総合一位を獲得した。
(特選)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
岸 和 田 川 柳 会	16日(土)午後2時締め切り 鮎・挑む・うようよ・カロリー	岸和田市福祉センター 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉
川 柳 ねやがわ	17日(日)午後1時半締め切り 専門・回復・家賃・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 藤 井 寺	17日(日)午後2時15分締め切り 薔薇・ビール	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	17日(日)午後1時半締め切り 添う・一寸・手頃	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	18日(月)午後1時半締め切り 守る・広告・カット・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川 柳 さ ん だ	19日(火)午後1時より 雲・勝手・忘れる・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553-12 北野哲男
高槻川柳 サークル 卵 の 花	21日(木)午後1時半締め切り 若い・視野・ちゃっかり・雲 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-0826 高槻市寿町3-28-13 神野節子
川柳クラブ わたの花	22日(金)午前9時半から 雨・地図・バランス・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
和 歌 山 三 川 柳 会	23日(土)午後1時から 動く・答え・サイズ	勤労者総合センター4F 会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子
東大阪市 川 柳 同 好 会	23日(土)午後6時から 限度・パン・捨てる・雨	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	24日(日)午後2時締め切り 好き・どきどき・メール 「菌」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうも 社 吟	24日(日)午後2時締め切り コスト・がっくり・若作り	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2-632 田中かをる
川 柳 塔 みぞくち	25日(月)午後8時から がっかり・重い・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
南 大 阪 川 柳 会	25日(月)午後6時から イベント・半額・揺れる みっちり	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京 都 塔 の 会	25日(月)午後2時締め切り あやふや・濁る・直通	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

6 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	1 日(金)午後 2 時締め切り 時計・招く・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎 3 F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代
城 北 川 柳 会	2 日(土)午後 1 時半締め切り 小銭・消す・びくびく・自由吟	旭区老人福祉センター 3 F 地下鉄千林大宮駅 3 番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮 4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	2 日(土)午後 2 時締め切り 各・モデル・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ 200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町 4-1-10 池 森子
倉 吉 川 柳 会	2 日(土)午後 2 時締め切り 銀座・飯 かく(掻く・書く・欠く・描く・斯く)	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿 2072-17 谷口次男
川 柳 塔 みちのく	3 日(日) 20 周年 記念川柳大会	4 月号 128 頁参照 〒036-0161 平川市杉館宮元 53-1 小寺花峯
川 柳 塔 唐 津	4 日(月)午後 1 時半から 器・プール・傷	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田 1517-13 宗 水笑
川 柳 塔 な ら	8 日(金)午後 1 時から 抱く・脚・勇気	奈良市立中部公民館 4F (近鉄奈良駅④出口徒歩 5 分) 〒639-0251 香芝市逢坂 2-720-20 大内朝子
川 柳 塔 ま つ え	9 日(土)午後 2 時締め切り 家・演・労る・ぬるぬる	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木 9-23-22 三島崙丘
堺川柳会	9 日(土)午後 2 時締め切り 底・望む 「カナダ(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町 2-16-3 河内天笑
川 柳 塔 打 吹	9 日(土)午後 2 時締め切り 板・溢れる・掘る	倉吉市上灘町 9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原 637-3 牧野芳光
八尾市民 川 柳 会	10 日(日)午後 1 時から 道・きっちり・肥る・雑詠	山本コミュニティセンター 3 F 学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0086 八尾市陽光園 1-3-12-305 宮西弥生
川 柳 塔 わかやま	10 日(日)午後 2 時締め切り 生氣・爪・エール・「やがて」	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺 111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	11 日(月)午後 1 時から 束・遠い・蹴る・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩 3 分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町 2-19-515 山本義子
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	12 日(火)午後 2 時締め切り 詩・しっとり・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太
ほ たる 川 柳 同 好 会	12 日(火)午後 1 時から 変身・もったいない・泣く	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅駅前ビル 5 F 〒561-0813 豊中市小曾根 2-4-1 水野黒兎

編集後記

☆早くも今年の折り返し点にきました。不順な気候、気温の変化も日替わりであり戸惑うことばかりです。

☆そんな中、編集部大先輩の田中正坊さんの計報が舞い込みました。病氣療養中と聞いてはおりましたが、3月中頃、エッセイの原稿を頂いたばかりです。6月号に正坊さんのコーナーである閑人閑話の欄に掲載して、ゲラが出来上がったところでした。

☆新聞記者をされていた経歴から、川柳塔誌の編集長をされ、川柳塔・水煙抄欄の割付を現在の形に整えて下さったのも正坊さんです。以後もよく助言、批評、誤字の指摘など頂き、プロの編集人正坊さんに教えられることはかりでした。

☆私宛の昨年11月に頂いた葉書に、「初仕事にしてはまずまずの出来、ただ編集後記の文に、です・まず調

が混じっているから気をつけるよう」と書いて下さいました。独特の癖字もなつかしく、いま読み返しています。

☆また旅好きの正坊さんには、よくあちこち一緒に遊ばせていただきました。台湾、中国東北部、カンボジアなどです。正坊さんはいいつも奥様ご同伴、奥様はとてこまめに正坊さんの面倒をみておられたのが、印象的でした。

☆とにかく博識であった正坊さん、川柳塔をいつも正しい方向へ導いて下さり、川柳塔誌の内容の充実に助言を下された正坊さんには大変お世話になりました。☆今はただご冥福をお祈りするばかりです。(希)

ひとこと

兼題に思う

近隣に適当な柳社もなく、川柳塔の仲間が居ない岡山県の山中で大会に参加するのを楽しみにしているが、日頃から兼題について感じることもある。

職業に限定された兼題があるが、できれば一般的に作句できる題が良いのではと思う。山の事や百姓、職人の世界などの題は、一般人は勉強する余地がないのではないかと。山の木一本、草一本切ったこと

も、刈った事もない人が「木」や「草」の選をする。街の事を知らない人が「街」の選をする。

職人の独自の技術を持った人達も作家の中にはたくさん居る。そんな技術者から見ると、支離滅裂な入選句がいくつも存在する。

伝統だ、革新だと言う前に、大会の選者は兼題に熟知した人を選ぶべきだろう。正解はないが正解にどれだけ近付くかに、尽きると思っている。

(小林 妻子)

○七月に同人名簿の改訂版を配布しようと作業中です。平成の大会併の影響で、従来に比し住所の部分変更が多く、煩雑を極めています。

○以前から気になっていたのですが、同人の男女比を最新データで調べてみました。丸めた数字で男性45%女性55%と10%の差があります。まして平均寿命に10年近い差がありますから、今や男性の柳人の新規発掘

を急がねば、この差はいよいよ大きくなります。○団塊の世代の一斉退職が始まり、年金や消費の諸点で色々な論議がされていますが、最も大きい問題は60歳からの余生をどう生かすかという事です。

○今、川柳塔社では会員の裾野を広げようと、全国の川柳会で新人を積極的にお誘いしています。川柳界自体の高齢化が進んでいる今、60歳は若手です。団塊

の世代の男性の、これまでのビジネス一辺倒だった方々を、川柳の世界に、川柳塔の会員に招き入れたいものです。

○私自身が定年川柳であります、もし川柳に巡り会っていないならば、この10年は無味乾燥な歳月であつたろうと思われただけに、お知り合いの団塊世代の男性を、ぜひ川柳世界に誘って頂きたく切望します。

(尚)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(8月号)

地名

都府道市
県
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



檸檬抄投句用紙

「促す」 (6月15日締切)

8月号発表

松本 文子 選 — 共選 — 川上 大輪 選

B A

--	--

地名

市都
県道府

姓雅号

B A

--	--

地名

市都
県道府

姓雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



川柳塔誌新規購読申込書

年 月 日

氏名	住所	電話	紹介者
	〒 —	—	

○ ○

年 年

月 月
から から
一年 半年

9 5
8 0
0 0
0 円 円

該当の方に○をつけて下さい

〒545-0005

大阪市阿倍野区三明町2-10-16 ウエムラ第2ビル202

川柳塔社

(電話 06-6629-6914)

振替 00980-5-33368

◎この用紙は新規購読申し込みのみにご使用下さい

作品募集

8月号発表 (6月15日締切)

川柳塔 (8句)
水煙抄 (8句)
愛染帖 (3句)
檸檬抄 (2句)
一路集 (3句)
初歩教室

河内天笑選
奥田みつ子選
新家完司選
川上大輪共選
松本文子選
富田蘭水選
米田幸子選
松下比呂志選
「泳ぐ」(3句) 三宅保州担当

9月号
檸檬抄「長い」
一路集「玉」「小さい」
「意外」
初歩教室「高い」

本社6月句会

とき 6月7日(木) 午後5時半開場・6時半締切り
開催時間、締切り時間に注意下さい。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
おはなし
兼題 「そこそこ」
「骨」
「マナー」
「役立つ」
「流儀」
会費 1000円
投句料 5000円 (切手可)
板尾岳人選
岩佐ダン吉選
安土理恵選
谷口義選
三宅保州選
奥田みつ子選
河内天笑選

本社7月句会

7日(土) 午後5時半から
兼題 「じっくり」「筋」「インテリ」
「通う」「昼寝」

第26年度 夜市川柳募集

第1回「旅」新家完司選
ハガキに3句 6月末日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)

一年分 九千八百円(同)

二〇〇七年(平成十九年)六月一日発行

発行人 河内 權治

編集人 山本 希久子

印刷所 美研アート

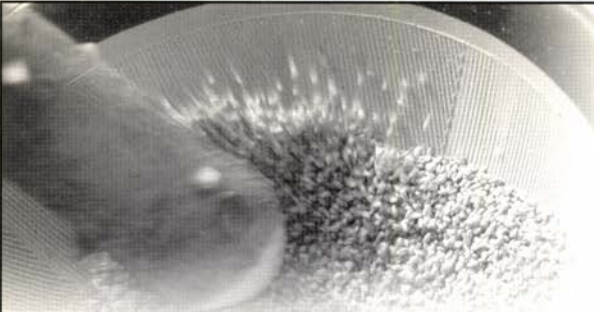
〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六六六二九一九四番

振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番



オニザキの すりごま

自宅の台所で始めた
手洗いのごま加工・販売
から50年。

オニザキでは、手作りの
風味にこだわり、独自に
開発した製法で、ごまの
香りと味わいを最大限
に引き出し、美味しい
すりごまを作り続けて
います。

株式会社 オニザキコーポレーションセルズ
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL  0120-30-5050

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪(06) **6771-4861**(代)